

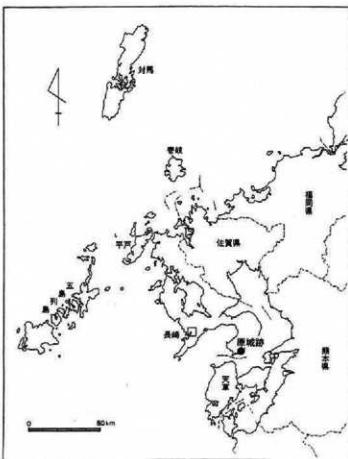
原城跡 III



2006

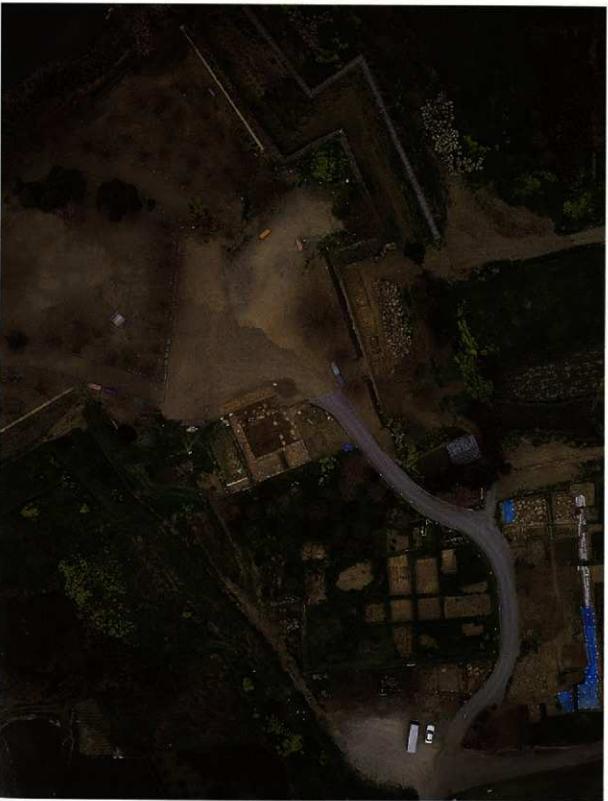
長崎県南有馬町教育委員会

原城跡 Ⅲ

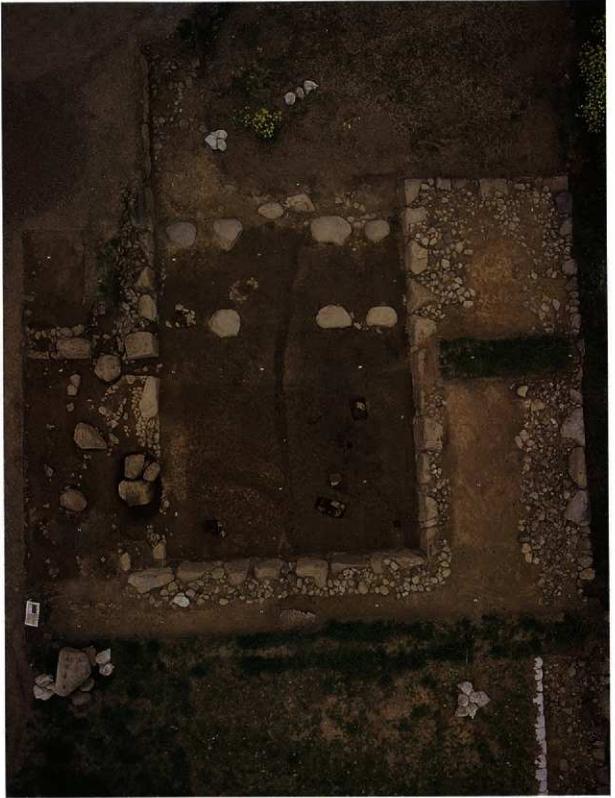


2006

長崎県南有馬町教育委員会



原城本九防空指



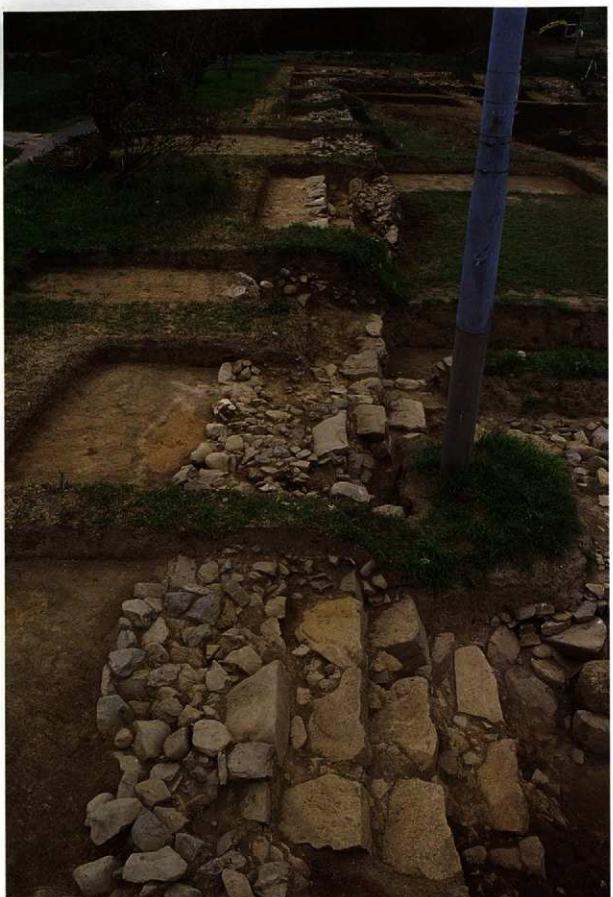
原城本丸跡虎口空撮



原城本丸跡虎口破却状況



原城本丸跡虎口



原城本丸跡大手門形成口石垣段

発刊に寄せて

島原の乱の舞台となった「原城」は島原半島南部の南有馬町に在る。城は海面から屹立する標高31m、周囲約4kmの丘に築かれており、東は有明海、西北は一部を除いて泥土という天然の要塞であった。

「島原の乱」は、我が国唯一のキリスト教徒が絡む宗教戦争であり、国を三百年間の閉じ籠もり政策「鎖国」へと転換しめた史実は、歴史上に占める意義も大きい。

原城跡では、平成4年から発掘調査が行われてきたが、有馬氏の全盛時代を彷彿とさせる遺跡や遺物と共に大量のキリスト教関係遺物が出土し貴重な研究資料となっている。

近年の発掘では、島原の森岳城に持ち去られたとされていた石垣が姿を現し、多層の橹の存在を推し量りに充分な張り出しを備えた、堂々たる城郭の概要までもが明らかになった。三百七十余年の眠りから覚めた原城の石垣は、森岳城の石垣とは石質も異なり、通説に疑問を投げかける。

全国的にも希有の規模と言われる構形虎口や壮大な城門の跡、更には、何處にもかに敬意を払い、キリスト教の想いや怨念を封じ込める意志が強く感じられる独特の破城の方法など、興味深い発見が相次いでいる。

「島原の乱」そのものを歴史上から抹殺したかった幕府が、乱後に執った政策もまた徹底を極めたと推察され、残存する資料自体が非常に少ない。しかも、残された資料の殆どが町外に散逸している状況の中で、出土する遺跡や遺物を検証するには相当の苦労が伴うが、「原城跡整備指導委員会」の先生方の温かい御指導と確かな御助言に支えられて原城跡の発掘が順調に推進していることは慶賀の至りである。この場をお借りして、諸先生方へ深甚なる感謝の意を表し、心からなる御札を申し上げたい。

今日も現場では黙々と発掘作業が続けられているが、原城跡が遺跡や遺物から学術的に完璧され、史実の全容が明らかにされるのは何時のことであろうか。日々の成果に一喜一憂し、疎懶な状況に胸を打たれ、壮大なロマンに夢を膨らませる。

巷間伝えられている「過酷な税金で苦しめられ、最後には原城に立て籠もった全員が虐殺された」という原城の印象では子供達に郷土愛を育む事も難しいが、日暮城と呼ばれ親しまれていた優雅な原城、領内にはコレジヨやセミナリヨが建てられ、国文学や国外の古典、神学、油絵、音楽などをラテン語で授業するなど、我が国最先端の教育が行われていた頃の原城など、子供達が跨りに思いを蓄える時代の原城が、次第に姿を現し始めた。

同時に、一旦は魔城の臺き目に遭うものの、時を経て、再び殉教の舞台として歴史に蘇る「島原の乱、当時の原城」もまた、その様相を現しつつある。

この度、「原城発掘」「原城跡Ⅱ」に継いで、平成12年度迄の成果を纏めた「原城跡Ⅲ」が発刊される運びとなった。本書は、学術書としても元より歴史ドキュメントとしても御一読に値する確信する。多くの皆様方にお読み戴く事を祈念して発刊の言葉としたい。

平成18年3月30日

南有馬町教育委員会 教育長 菅 弘賢

例　　言

1. 本書は、長崎県南高来郡南有馬町に所在する国指定史跡「原城跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は国庫補助事業として実施したもので、調査期間はつぎのとおりである。
8次調査 平成11年9月8日～平成12年1月20日
9次調査 平成12年9月4日～平成13年3月29日
3. 調査は南有馬町教育委員会が主体となって実施した。
調査指導 本中 真 文化庁文化財保護部記念物課
高野 晋司 長崎県教育庁文化課（現、学芸文化課）
調査担当 松本 横二 南有馬町教育委員会
4. 本書は松本横二が執筆した。
5. 遺構実測は調査担当者が行い、井口珠代の協力を得た。石垣実測はアジア航測㈱に委託した。
6. 遺物実測は、佐藤さおり、中村美由紀、長谷津貴子が行った。トレースは佐藤、拓本は中村が行つた。
7. 本書関係の写真撮影は、調査時の遺構については松本が行い、空中写真についてはアジア航測㈱に委託した。遺物写真は松本が撮影した。
8. 遺物整理において、陶磁器は佐賀県立九州陶磁文化館、大橋康二氏、キリストン関係遺物は日本26聖人記念館、結城了悟氏をはじめとして多くの方々から指導・教示を受けた。
9. 本書に関する遺物・写真・図面については、原城文化センターで保管している。
10. 本書の編集は松本による。

本文目次

第1章 はじめ	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	2
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
第1節 基本層序	5
第2節 平成11年度の調査概要と遺構	11
第3節 平成12年度の調査概要と遺構	17
第4節 出土遺物	
1 貿易陶磁器	27
2 国産陶磁器	41
3 瓦	64
4 キリストン関係	88
5 金属製品	91
第4章 まとめ	

挿図目次

原城本丸跡空堀	
原城本丸跡虎口空堀	
原城本丸跡虎口破却状況	
原城本丸跡虎口	
原城本丸跡大枡形虎口雁木段	
第1図 南有馬町道路地図	4
第2図 土層図	7・8
第3図 調査区位置図	9・10
第4図 石垣19	11
第5図 石垣19隅角部	12
第6図 TP56遭構配置図	13・14
第7図 石垣21・22・23・24・25 (S = 1/100)	15・16
第8図 原城本丸虎口平面図 (S = 1/100)	19・20
第9図 階段遭構実測図 (S = 1/50)	21
第10図 溝遭構実測図 (S = 1/60)	22
第11図 原城本丸大枡形虎口遭構実測図 (S = 1/50)	23・24
第12図 原城本丸平面図 (S = 1/600)	25・26
第13図 貿易磁器① (S = 1/3)	28
第14図 貿易磁器② (S = 1/3)	31
第15図 貿易磁器③ (S = 1/3)	32
第16図 貿易磁器④ (S = 1/3)	33
第17図 貿易磁器⑤ (S = 1/3)	34
第18図 貿易磁器⑥ (S = 1/3)	35
第19図 貿易磁器⑦ (S = 1/3)	37
第20図 貿易磁器⑧ (S = 1/3)	38
第21図 貿易陶器① (S = 1/3)	40
第22図 貿易陶器② (S = 1/3)	41
第23図 国產磁器 (S = 1/3)	42
第24図 国產陶器① (S = 1/3)	48
第25図 国產陶器② (S = 1/3)	49
第26図 国產陶器③ (S = 1/3)	50

第27図 国產陶器④ (S = 1/3)	51
第28図 国產陶器⑤ (S = 1/3)	52
第29図 国產陶器⑥ (S = 1/3)	53
第30図 国產陶器⑦ (S = 1/3)	54
第31図 国產陶器⑧ (S = 1/3)	55
第32図 国產陶器⑨ (S = 1/3)	58
第33図 国產陶器⑩ (S = 1/3)	59
第34図 国產陶器⑪ (S = 1/3)	60
第35図 国產陶器⑫ (S = 1/3)	61
第36図 国產陶器⑬ (S = 1/3)	62
第37図 瓦質土器 (S = 1/3)	63
第38図 軒丸瓦① (S = 1/4)	65
第39図 軒丸瓦② (S = 1/4)	66
第40図 丸瓦① (S = 1/4)	68
第41図 丸瓦② (S = 1/4)	69
第42図 丸瓦③ (S = 1/4)	70
第43図 丸瓦④ (S = 1/4)	71
第44図 丸瓦⑤ (S = 1/4)	72
第45図 丸瓦⑥ (S = 1/4)	73
第46図 軒平瓦① (S = 1/4)	75
第47図 軒平瓦② (S = 1/4)	77
第48図 平瓦① (S = 1/4)	78
第49図 平瓦② (S = 1/4)	79
第50図 隅軒平瓦 (S = 1/4)	81
第51図 鬼瓦① (S = 1/4)	82
第52図 鬼瓦② (S = 1/4)	83
第53図 鬼瓦③ (S = 1/4)	84
第54図 鱥瓦① (S = 1/4)	86
第55図 鱥瓦② (S = 1/4)	87
第56図 十字架 (S = 1/1)	89
第57図 花十字紋瓦 (S = 1/1)	90
第58図 金属製品 (S = 1/1)	91

表 目 次

第1表 貿易磁器観察表①.....	95
第2表 貿易磁器観察表②・貿易陶器観察表・國產磁器観察表.....	96
第3表 國產陶器観察表①.....	97
第4表 國產陶器観察表②・瓦質土器.....	98
第5表 軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦観察表.....	99
第6表 平瓦・隅軒平瓦・鬼瓦・鰐瓦.....	100
第7表 十字架・花十字紋瓦・金属性製品	101

図 版 目 次

図版1 1 平成11年度調査区 TP50調査前	105
2 平成11年度調査区 TP54調査前	
3 平成11年度調査区 TP55調査前	
図版2 1 平成11年度調査区 TP56調査前	106
2 平成12年度調査区 TP58調査前	
3 平成12年度調査区 TP60~63調査前	
図版3 1 本丸C区 TP50 南から	107
2 本丸C区 TP50 北から	
3 本丸C区 TP51 石垣検出 南から	
図版4 1 本丸C区 TP52 北から	108
2 本丸C区 TP52 土層 西から	
3 本丸C区 TP53 壱込石検出 東から	
図版5 1 本丸C区 TP54 石垣隅角部 南から	109
2 本丸C区 TP54 土層 南から	
3 本丸A区 TP56 虎口石塀 西から	
図版6 1 本丸A区 TP56 虎口兩口部破却 西から	110
2 本丸A区 TP56 虎口石塀 東から	
3 本丸A区 TP56 土層 西から	
図版7 1 本丸A区 TP56 虎口礎石 南から	111
2 本丸A区 TP56 虎口 南から	

3 本丸A区 TP56 階段・土坑 北から	
図版8 1 本丸A区 TP57 南から	112
2 本丸D区 TP58 破却状況 東から	
3 本丸D区 TP58 離木段 東から	
図版9 1 本丸D区 TP58 階段 上から	113
2 本丸D区 TP58 石垣隅角部 東から	
3 本丸D区 TP58 離木段全景 東から	
図版10 1 本丸D区 TP58 水路 上から	114
2 本丸D区 TP59 南から	
3 本丸D区 TP59 西から	
図版11 1 本丸D区 TP59 土層 西から	115
2 本丸D区 TP59 土層 南から	
3 本丸D区 TP60 西から	
図版12 1 本丸D区 TP61 石垣 西から	116
2 本丸D区 TP62 破却層 西から	
3 本丸D区 TP63 階段 北から	
図版13 1 本丸D区 TP63 石段 東から	117
2 本丸D区 TP63 層位 西から	
3 本丸D区 TP63 階段 北から	
図版14 1 本丸D区 TP63 石段 南から	118
2 本丸D区 TP64 破却 北から	
3 本丸E区 TP65 西から	
図版15 1 本丸C区 TP50 鬼瓦出土状況 西から	119
2 本丸D区 TP61 花十字紋瓦出土状況 南から	
3 本丸D区 TP63 陶磁器出土状況 北から	
図版16 1 本丸D区 TP62 瓦出土状況 北から	120
2 本丸D区 TP58 瓦出土状況 南から	
3 本丸A区 TP56 人骨出土状況 北から	
図版17 1 調査風景 東から	121
2 調査風景 北から	
3 調査風景 南から	
図版18 キリシタン関係遺物／花十字紋瓦	122
図版19 貿易磁器①	123
図版20 貿易磁器②	124

図版21	貿易磁器③	125
図版22	貿易磁器④	126
図版23	貿易磁器⑤	127
図版24	貿易磁器⑥	128
図版25	貿易磁器⑦	129
図版26	貿易磁器⑧	130
図版27	貿易陶器①	131
図版28	貿易陶器②	132
図版29	国産磁器①	133
図版30	国産磁器②／国産陶器①	134
図版31	国産陶器②	135
図版32	国産陶器③	136
図版33	国産陶器④	137
図版34	国産陶器⑤	138
図版35	国産陶器⑥	139
図版36	国産陶器⑦	140
図版37	国産陶器⑧	141
図版38	国産陶器⑨	142
図版39	国産陶器⑩	143
図版40	国産陶器⑪	144
図版41	国産陶器⑫	145
図版42	国産陶器⑬／瓦質土器	146
図版43	軒丸瓦①	147
図版44	軒丸瓦②／丸瓦①	148
図版45	丸瓦②	149
図版46	丸瓦③／軒平瓦①	150
図版47	軒平瓦②	151
図版48	軒平瓦③／平瓦	152
図版49	隅軒平瓦／鬼瓦①	153
図版50	鬼瓦②	154
図版51	鬼瓦③／鍵瓦①	155
図版52	鍵瓦②	156
図版53	金属性製品	157

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

原城は長崎県の南東にある、有明海上に面した島原半島の南西部に位置している。1637年（寛永14）に勃発した「島原・天草の乱」の主戦場、原城攻防戦の舞台になったところである。一揆軍は天草四郎時貞を盟主として12月から翌年2月までの約3ヶ月間、原城に籠城し幕府と対立した。

亂の平定のために九州諸藩が動員され、大阪の陣以来の大規模な軍事的動員が実行された。この「島原の乱」の発生と展開は、徳川家光政権下の幕藩領主に深甚なる危機感を抱かせた。幕府は一揆鎮圧後直ちに「今度島原表のごとく、対上様御法度を背く者に対しては、幕府の下知を得たずに越堀出兵して鎮圧すべし」と武家諸法度の解釈を拡大し、翌年にはキリシタン絶滅の意図から1世紀にわたるボルトガル貿易を禁絶して領国の完成となつた。このようにみてみると原城築城戦のもつ意義は日本史上まことに重大であるといふことができる。城は乱後の現地処理により、二度と城として使用できないように徹底的に破壊され埋めつくされた。

その原城の創始は、明応5年（1496）日野江城の支城として領主有馬貴統による築城とされるが詳細は不明である。城は海岸に突き出した標高31mの丘に築かれ本丸、二ノ丸、三ノ丸、天草丸、鶴山出丸などから構成されており周囲は約4km、東は有明海、西及び北は一部を除き一面泥土の天然要害であった。本丸は石垣で囲まれ出入り口は櫛形の虎口となり、三ノ丸の東側海岸に面した所に大手門があり、他に町門、池尻門、蓮池門、田尻門がある。

現在の原城跡は、半数近くが畠地として利用され、また、本丸地区においては歴史公園として広く一般の人々に親しまれている。

原城跡の発掘調査に至る原因は、昭和52年策定の「管理保存計画」に基づく保存環境整備事業の一環で実施している。平成4年度から開始された発掘調査によって、これまでに本丸地区を中心に多くの遺物が出土している。特に十字架、メダイ、ロザリオの珠などのキリスト教関係遺物は島原の乱にまつわる資料である。また、乱後の幕府による現地処理で、破壊され埋め込まれた出入口などが検出され、原城築城時の遺構や「島原の乱」に対する幕府の対応を示す資料を発見した。また、共に出土する多くの人骨は、乱の壮絶な最後の様子がうかがえるものである。他に火薬桶の鉛玉、輸入陶磁器、瓦などの資料があった。

今回の調査は、引き続き本丸地区的調査であり、平成11年度から平成12年度にかけて行ったものである。

第2節 調査組織

この調査は国庫補助事業として、文化庁及び長崎県教育庁文化課の指導のもと、南有馬町教育委員会が調査主体となり実施した。調査関係者は次のとおりである。

①平成11年度

調査指導	文化庁文化財保護部記念物課	本中 真
	長崎県教育庁文化課組成文化財班課長補佐	高野晋司
事務組織	総括 南有馬町教育委員会教育長	中村重徳
調査担当	南有馬町教育委員会 学芸員	松本慎二
調査期間	平成11年9月8日～平成12年1月20日（58日間）	
調査面積	680m ²	
②平成12年度		
調査指導	文化庁文化財保護部記念物課	本中 真
	長崎県教育庁文化課組成文化財班課長補佐	高野晋司
事務組織	総括 南有馬町教育委員会教育長	中村重徳
調査担当	南有馬町教育委員会 学芸員	松本慎二
調査期間	平成12年9月4日～平成13年3月29日（85日間）	
調査面積	650m ²	

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

原城がある南有馬町は、長崎県の南東にある島原半島の南西部に位置している。南東は有明海に臨んで口之津町と連なり、北西は加津佐町と南串山町に接し、北は北有馬町と有馬川を隔てて境をしている。

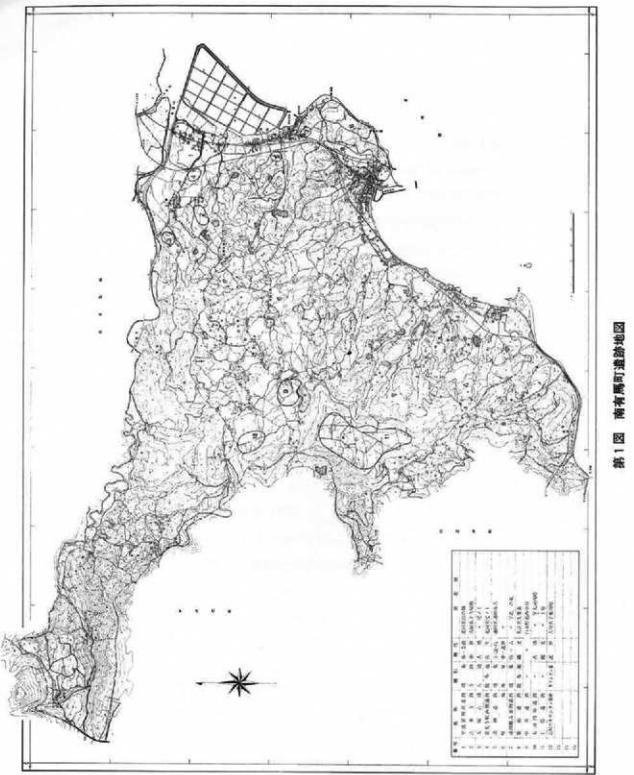
島原半島は、雲仙岳を中心とした火山地形がつくられ、角閃石安山岩と黒雲母角閃石英安山岩類を主体とした雲仙火山東部の北部地域と南西部の第四系の分布する南部地域に分けられる。北部地域は南有馬町、北有馬町の境界近くを流れる有馬川及び諏訪池付近で境となり、第四紀の山陰火山系噴出物の角閃石安山岩類及び黒雲母角閃石英安山岩類の雲仙火山群で構成される。南部地域は玄武岩類、安山岩類及び火山屑岩の台地性の地形を示し、特徴的な平坦な形状をしている。鳳上岳(409m)と上原(383m)からなる丘陵地から東側に至るにしたがい、次第に低くなっていく扇状地形をなし有明海に臨んでいる。上原高原からの眺望はすばらしく、眼下に町並みと原城跡を望み、その後方に有明海に浮かぶ鍋島、八代海との境をなす天草の島々、遠方に連なる九州山地等を一望することができる。

第2節 歴史的環境

原城跡周辺での考古学的な調査は、金毘羅神社遺跡⁽¹⁾弥生・奈良時代、上原遺跡⁽²⁾纏文時代の2遺跡で行われている。金毘羅神社遺跡⁽¹⁾では、圃場整備に伴った調査が行われた。弥生時代からの遺構群が検出され、出土遺物には、土器、石器、鐵剣形石劍、支脚土器、合口壺などが出土している。上原遺跡⁽²⁾では、工事に伴う試掘調査が行われた。支石墓状伏石、積石墓状の積石などが認められたが、遺跡包蔵状態は認められず、支石墓巨石群4群についても支石墓である証左は得られていないかった。中谷遺跡⁽³⁾・大河内原遺跡⁽⁴⁾では、県営畑地帯総合整備事業に伴う試掘調査を行ったが、遺構遺物の検出は無かった。

【参考文献】

- ・南有馬町1956『南有馬町郷土史』
- ・南有馬町教育委員会1981『北岡金毘羅遺跡調査報告書』南有馬町文化財調査報告第1集



第3章 調査の概要

第1節 基本層序

本丸地区に23箇所の調査坑を設置し実施した。平成11年度はTP50～TP56の7箇所、平成12年度はTP56～66の11箇所を調査した。なお調査の整理上本丸地区をA～F区の6区画に大別した。(第3図) TP50・51・54・は、本丸-C区に設置した調査坑である。本丸北側に位置し、石垣9・石垣10を構成する本丸最上部より低い部分である。西側部分は本丸に通じる道路で削られているが、東西に約40m、南北に約25mの平場部分である。牧草畠として利用されていたため表土層は柔らかい。TP52・55は、本丸-B区に設置した調査坑である。本丸-C区より一段高い平場であり、ツツジが多く植栽されている。TP53・58・59・60・61・63は本丸-D区に設置した調査坑である。本丸の門を構成する区域で、花壇として利用されていた。TP56・57・66は本丸-A区に設置した調査坑であり、ツツジが多く植栽されている。TP62・64は本丸-F区に設定した調査坑である。石垣10沿いにある幅約7m、高さ約1mの犬走り状の部分である。

TP50・51・54の基本土層

第1層は暗褐色土層で植物根を多く含む。第2層は黄褐色土層で粘性があり堅い。整地層と思われ、瓦・陶磁器などを含む。焼土及び炭も多く含まれ火災層と考えられる。TP51・54は石垣破壊により埋められた個所で、石垣の石材が多く入る。

TP52・55の基本土層

第1層は暗褐色土層で植物根を多く含む。第2層は暗褐色粘質土層で粘性があり堅い。焼土及び炭も多く含まれ火災層と考えられる。

TP53・58・59・60・61・63の基本土層

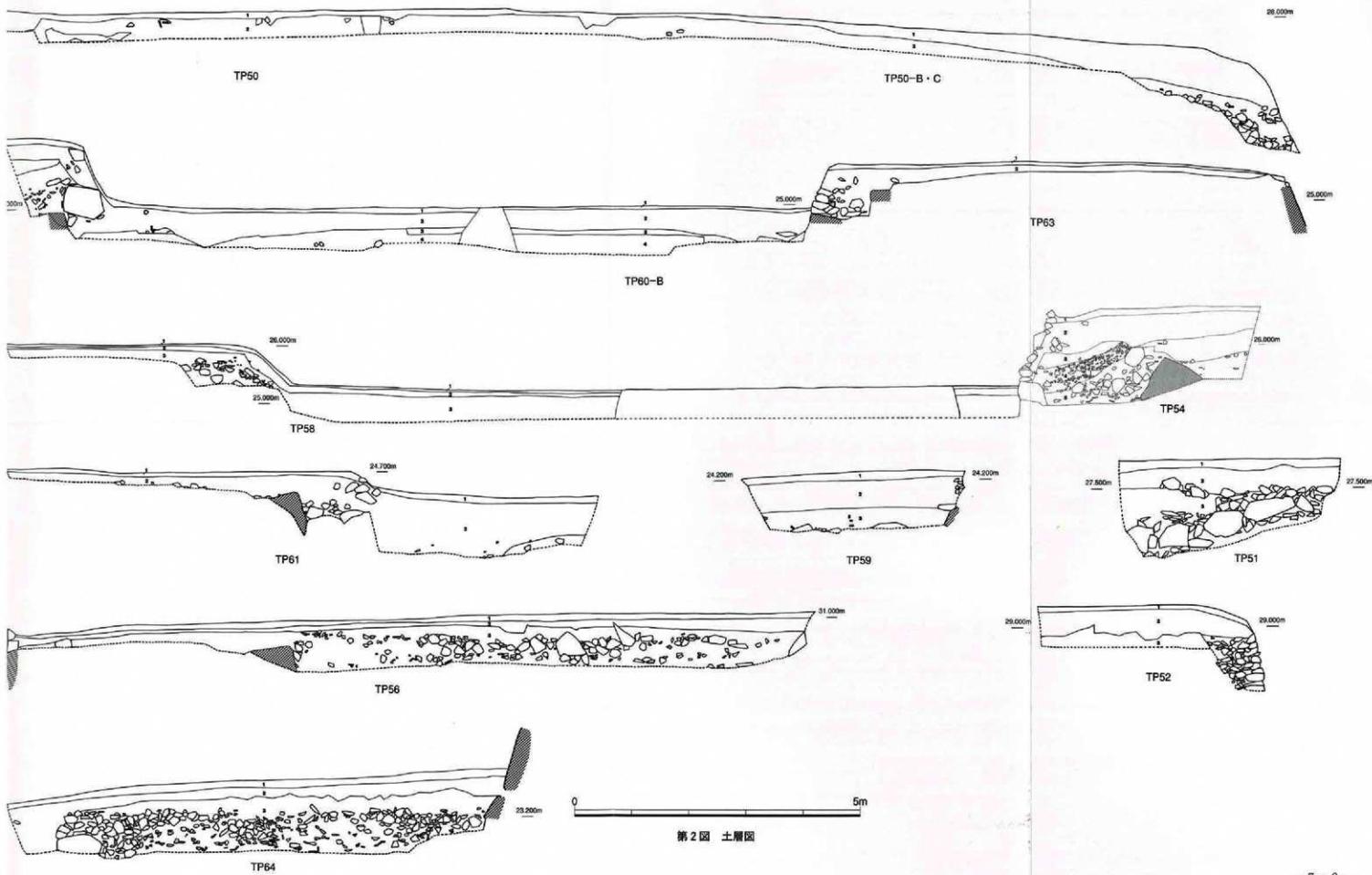
本丸-D区であり、本丸の門を構成する枠形の地区である。外側は石垣石墨でコの字形になり、中央部は1段低くなる。低い部分の第1層は暗褐色土層で植物根及び樹木根が多く入り、砂質で柔らかい。第2層は黄褐色土層で粘性があり堅い。石垣石墨部分の第1層は暗褐色土層で植物根を多く含む。第2層は黄褐色土層で粘性があり堅い。石垣構築時の整地層である。

TP56・57・66の基本土層

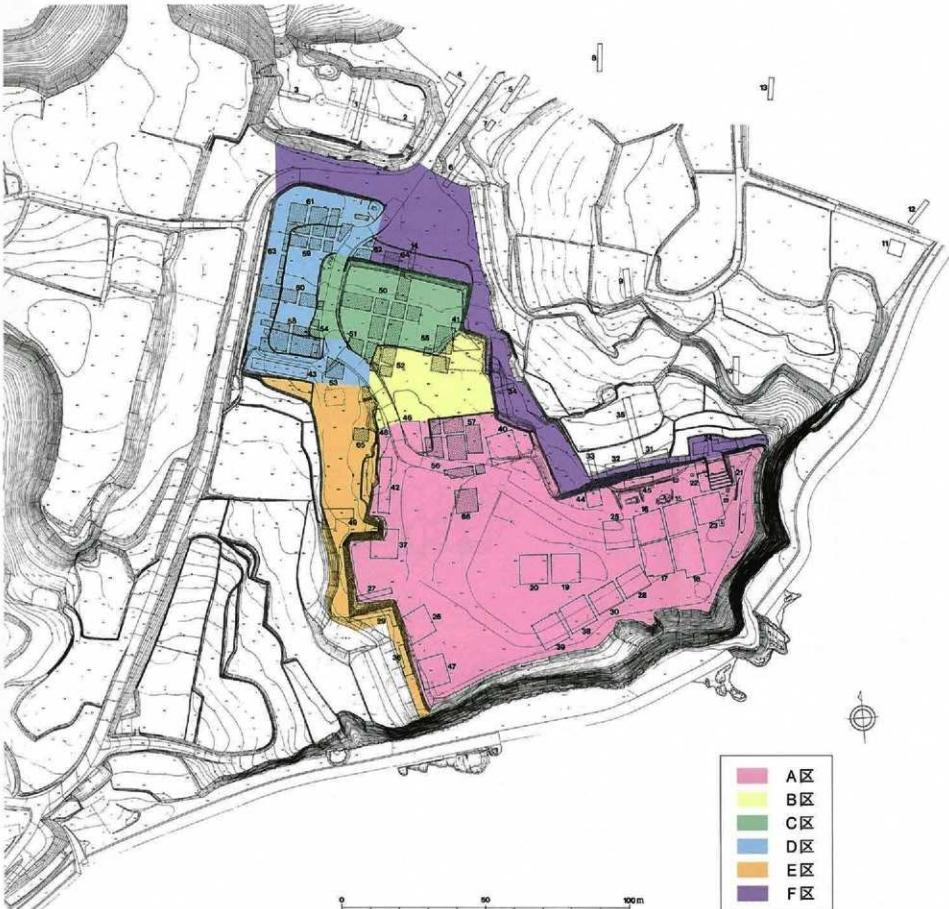
第1層は暗褐色土層で植物根を多く含み柔らかい。第2層は黄褐色土層で黄褐色の粘質土をベースに、にぶい黄橙の土が多く混じる。TP56は石垣破壊により埋められた個所で、石垣の石材が多く入る。

TP62・64の基本土層

第1層は暗褐色土層で植物根を多く含み柔らかい。第2層は石垣破壊により埋められた個所で、石垣の石材が多く入る。



第2図 土層図



第3図 調査区位置図

第2節 調査概要と遺構

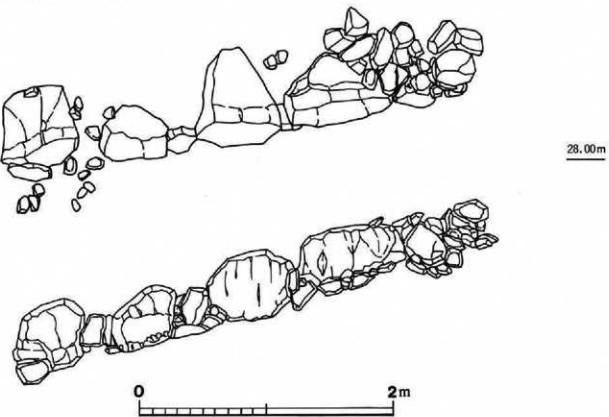
(1) 平成11年度の調査概要と遺構

調査は本丸－C区の平場一帯と、本丸－C区に接して1段高い本丸－B区。また、本丸－A区の最も北よりの個所に調査坑を設定し実施した。調査は主に10m×10mのトレンチを設定し、全て人力で掘り下げ調査を進めた。調査整理上、本丸の外郭を取り巻く埋没石垣ラインを推定し、既存する石垣を含めそれぞれの石垣に番号を付した。(第12図) 石垣番号は、本丸東側で検出した虎口を構成する石垣から順に付けた。

検出された遺構としては、本丸北側に大きく張り出した虎口空間帯に設けていた、最も本丸寄りの出入口を検出した。本丸から見て右側の石墨を張り出した外堀形の出入口である。出入口の外側の石墨は巨石を用い、門の床面には玉砂利が敷き詰めてある。

石垣19(第4図、図版3-3)

TP51において東西方向に並ぶ石垣と裏込めを確認した。石垣は基底部であり、東側から西側に向けて傾斜している。石垣は、自然崩壊ではなく、人為的に大量の裏込め石と石垣の石材で埋められ、黄褐色粘質土で覆わされていた。この場所は大堀形虎口を構成する、第2の門と思われる所で、石垣が傾斜していることから階段等の可能性がある。対となる石垣の推定場所の上部は、現在道路として利用されているため確認できない。



第4図 石垣19 (S = 1/30)

検出した石垣は、幅約3.5m、高さ約50cmの石垣基底部で、東西方向に15度傾斜角度を持つ。階段の踏石等は確認できなかった。石垣列の前面には多くの瓦等が出土したため、門に関連する構築物があった可能性がある。石垣の番号を「石垣19」とした。

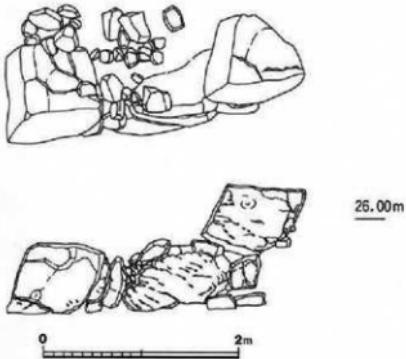
石垣隅角部（第5図、図版5-1）

TP54において石垣隅角部と裏込めを確認した。

TP51で検出した石垣の延長を想定して設定した調査坑である。石垣は、自然崩壊ではなく、人为的に大量の裏込め石と石垣の石材で埋められ、黄褐色粘質土で覆われていた。この場所は大槻形虎口を構成する内側石垣で、石垣19の隅角部である。

検出した隅角部は基底部の一石のみで、算木の状態は不明である。角石は高さ約70cm、幅約1mである。隅角部石垣は東側と北側に続き、大槻形虎口内側石垣のラインが想定できた。

隅角部より北側に続く石垣を「石垣20」とした。



第5図 石垣19隅角部 (S = 1/50)

石垣21～25（第7図）

本丸A区の最も北側にある広場に設定したTP56において検出した石垣である。広場の北面と西面には既存する高さ1mほどの石垣があり、本丸A区とB区の境目の石垣としていた。既存する石垣は、基底部のみの石垣である。しかし、築城当時の石垣であったため、広場内部がどういった空間だったかを確認するための試掘坑であった。北側石垣は東西方向に並び北側を向いた石垣で「石垣21」、西側石垣は南北方向に並び西側を向いた石垣で「石垣22」と番号を付けた。

広場空間内の表土層下は人頭大の礫が充填されており、破脚の状態が想定できた。石垣21・22は隅角部があり、基底石のみで算木は不明である。隅角部の角石には割面石を用いており、角後線をできるだけシャープに仕立てようとする意図が現れている。

石垣22において、石垣の途中に隅角部の角石を確認したため、角石以降の南側は破脚により埋められた状況であると確認できた。その角石から東側に向かって、広場空間内部に並ぶ石列を検出した。

「石垣23」と番号を付ける。さらに、石列の突当たりから南側に向けて並ぶ石列も検出した。「石垣24」と番号を付ける。それぞれの長さは、石垣22は約5m、石垣23は約11m、石垣24は約8mである。トレンチ南側にも東西に並ぶ石列を検出した。「石垣25」と番号を付ける。石列の東端には隅角部の角石を確認し、南北に並ぶ石列も想定できた。石垣25も基底石のみであり、隅角部の算木は不明である。

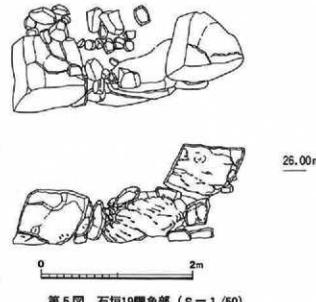
床面確認のため石垣23、24、25沿いに幅約1mを掘り下げた。石垣23の西側に、2個の礎石を検出した。礎石は石垣から約40cm離れたところに並び、その間隔は礎石真々で約2.80cmである。また、石

た石垣は、幅約3.5m、高さ約50cmの石垣基底部で、東西方向に15度傾斜角度を持つ。階段は確認できなかった。石垣列の前面には多くの瓦等が出土したため、門に間連する構築物が想定がある。石垣の番号を「石垣19」とした。

図5 (第5図、図版5-1)

おいて石垣隅角部と裏込めを確認した。検出した石垣の延長を想定して設定した。石垣は、自然崩壊ではなく、人為の裏込め石と石垣の石材で埋められ、黄土で覆われていた。この場所は大掛形虎する内側石垣で、石垣19の隅角部である。た隅角部は基底部の一石のみで、算木の剥である。角石は高さ約70cm、幅約1m。隅角部石垣は東側と北側に続き、大掛形石垣のラインが想定できた。

より北側に続く石垣を「石垣20」とした。



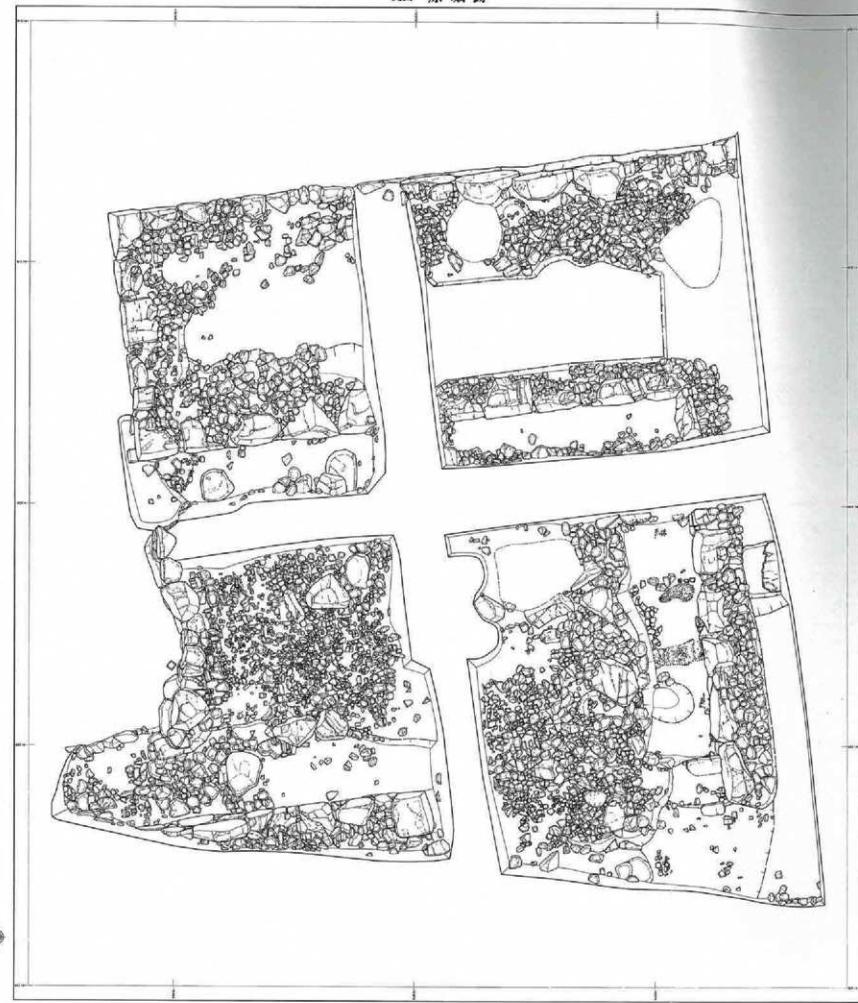
第5図 石垣19隅角部 (S=1/50)

図6 (第7図)

区の最も北側にある広場に設定したTP56において検出した石垣である。広場の北面と西面する高さ1mほどの石垣があり、本丸A区とB区の境目の石垣としていた。既存する石垣は、みの石垣である。しかし、築城当時の石垣であったため、広場内部がどういった空間だったための試掘坑であった。北側石垣は東西方向に並び北側を向いた石垣で「石垣21」、西側北方向に並び西側を向いた石垣で「石垣22」と番号を付けていた。

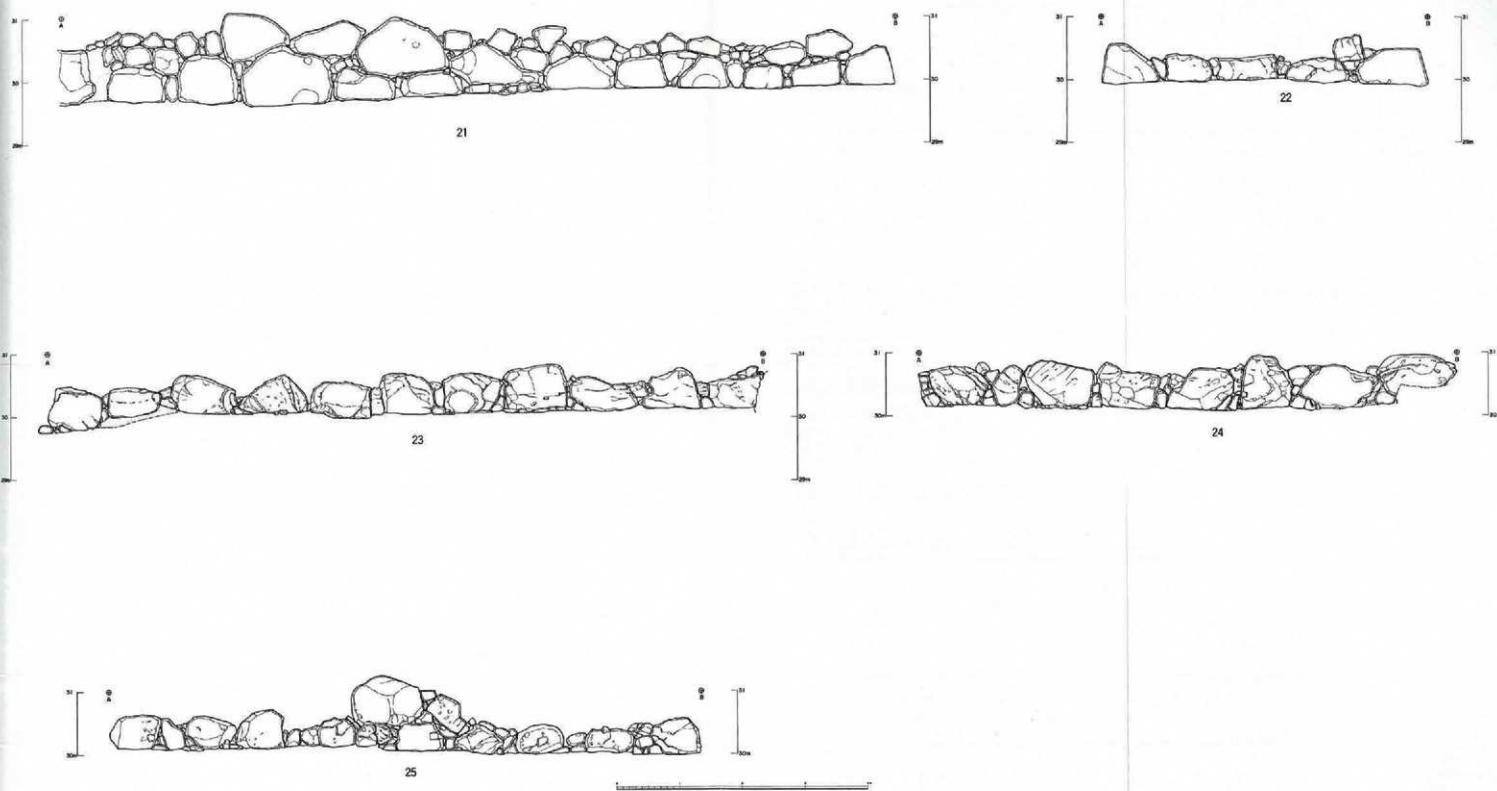
箇内の表土層下は人頭大の礫が充填されており、破脚の状態が想定できる。石垣21・22は隅り、基底石のみで算木は不明である。隅角部の角石には割面石を用いており、角縁線をできるべくに仕立てようとする意図が現れている。

において、石垣の途中に隅角部の角石を確認したため、角石以降の南側は破却により埋めらであると確認できた。その角石から東側に向かって、広場空間内部に並ぶ石列を検出した。」と番号を付ける。さらに、石列の突当たりから南側に向けて並ぶ石列も検出した。「石垣23」と番号を付ける。それぞれの長さは、石垣22は約5m、石垣23は約11m、石垣24は約8mである。東側にも東西に並ぶ石列を検出した。「石垣25」と番号を付ける。石列の東端には隅角部の角し、南北に並ぶ石列も想定できる。石垣25も基底石のみであり、隅角部の算木は不明である。そのため石垣23、24、25沿いに幅約1mを掘り下げた。石垣23の西側に、2個の礎石を検出石は石垣から約40cm離れたところに並び、その間隔は礎石真々で約2.80cmである。また、石



第6図 TP56造構配置図

原城本丸虎口跡（石垣立面）



第7図 石垣21・22・23・24・25 (S=1/100)

垣25前にも同間隔にある礎石1個と礎石跡を検出した。石垣23と石垣25の幅は約7.5mであり、石垣24の階段部分と石垣25の角石までは幅は約6mである。

石垣24前には玉砂利を検出し、南端には階段と思われる2段の石を検出した。

これらにより、広場内部の大まかなアウトラインが想定でき、中央部は未調査のため詳細は分からぬが、礎石と階段を有する虎口であることが分かった。

虎口は幅約5mの石壘を外側に張り出した、外折形の虎口であり、礎石の存在から何らかの構築物が存在したことが伺える。

第3節 調査概要と遺構

(1) 平成12年度の調査概要と遺構

調査は、昨年度本丸-A区のTP56で検出した本丸虎口の続きと、本丸-C区に接して1段高い本丸-B区、本丸大折形虎口である本丸-D区、本丸-F区の石垣10の前面部分に任意に調査坑を設定し実施した。調査は主に10m×10mのトレンチを設定し、全て人力で掘り下げ調査を進めた。

検出された遺構としては、昨年検出した最も本丸よりの出入口の未調査部分から7個の礎石と1個の礎石跡、城内に入るための階段や床面の一部に玉砂利を検出した。また、多くの瓦や陶磁器とともに人骨も出土した。これにより出入口の規模が推測でき、出土した瓦などから乱當時は瓦葺の建物が存在したことが伺える。この出入口は、島原の乱後の破却により徹底的に破壊された状況で検出し、城内に入る階段はかなりの破壊を受けており、城の破却の状況を多く見られる。

本丸に入る最初の門である大折形門跡内に設定したTP61トレンチから花十字紋瓦が出土した。瓦は、破却により埋め込まれた石垣の中から人骨と共に出土し、戦国時代のキリシタン大名の居城からの出土は全国でも初めてであった。また、未調査の部分は残るが檣台跡と思われる石垣や、それに取り付く階段、大折形門内部の石壘の内側に、南北に長さ約47mにおよぶ階段遺構を検出した。

虎口（第8図、図版7-1）

TP56において昨年度検出した虎口遺構の調査である。虎口空間内の石垣の石材等を取除き、床面の検出を行った。床面には7個の礎石と1個の礎石跡を検出した。7個の礎石には規格性は見られず加工度も低い。配列された礎石の中央通路間は約3m、脇間は約1.5m、梁行間は約2.7mである。床面の一部には玉砂利も検出した。虎口を構成する石垣は5面あり、全て基底石のみで、天端までの高さは不明である。石垣21・22・23で構成される石壘は幅南北方向に約5m、長さ東西方向に約11mである。本丸側からみて右側に石壘を張り出した外折形の出入口となる。

本丸内部に取りつく所には、階段遺構も検出した。幅は東西方向に約6mで、西端には約50cmの溝部がある。踏石は1段目の2石と2段目の1石のみでほとんどが破壊されている。階段部分の中央部には大きな穴が掘られ石垣の石材が入れられていた。

石垣25の中には鏡石として使用したと思われる巨石があり、本丸正面玄関に相当する出入口と考えられる。

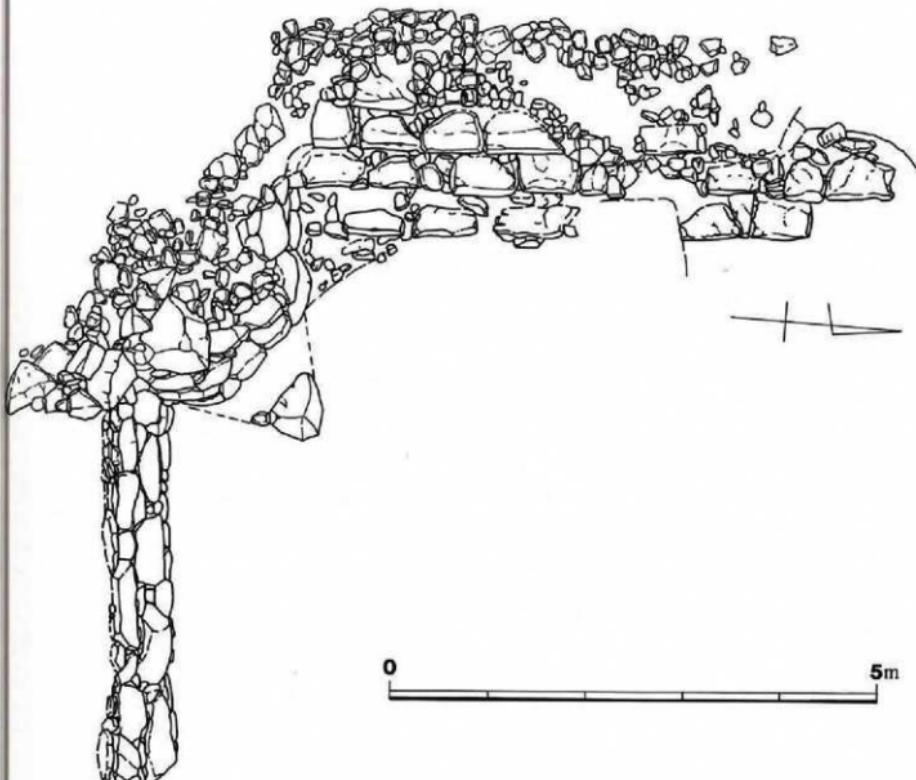


第8図 原城本丸虎口平面図 (S = 1/100)

階段（第9図、図版8-3）

本丸一D区に設置したTP58・61・63において、南北方向に並ぶ階段を検出した。TP58では4段、TP61では2段、TP63では2段を確認した。TP58の下2段とP61の下2段のラインが一致していることから、関連する階段は横一列に並ぶ全長約47mの階段遺構であり、雁木段であることが判明した。

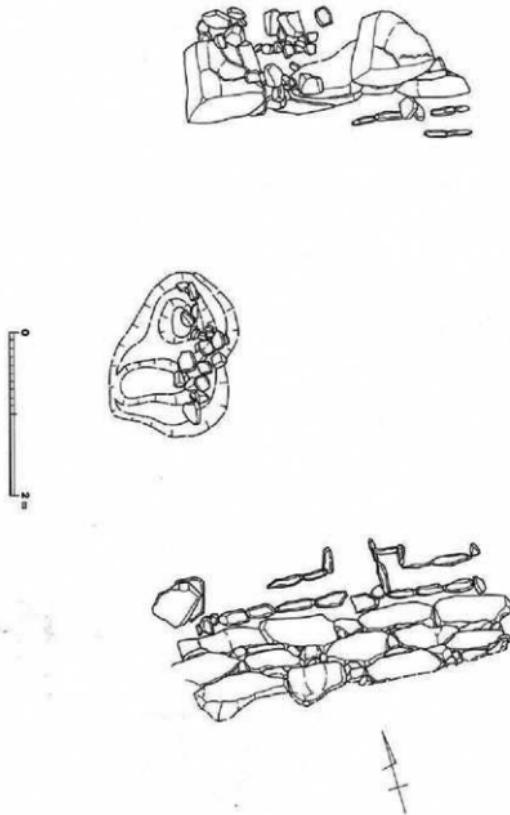
TP58で検出した階段横には、内部空間に突出した石垣の隅角部を検出した。隅角部の北側石垣は階段遺構の袖石垣となる。隅角部を基点に石垣12までは約10m、石垣13まで約10mを計り、正方形の空間ができる。つまり、本丸大枡形虎口の南側櫓台と思われる遺構である。しかし、上部分は破却により破壊されているため確認できない。



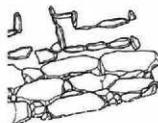
第9図 階段遺構実測図 (S=1/50)

水路（第10図、図版10-1）

本丸一D区に設置したTP58において、石垣に沿って東西方向に通る溝造構を検出した。この場所は大括形虎口の第2門にあたる場所で、TP51で検出した石垣に続く空間である。溝造構は両脇に断面が長方形の平たい石材を並べ溝の縁としている。溝の幅は約30cm、検出した東端から西側に約1mでL字形に折れ曲がり、約50cmの溜橋状空間を作る。さらに西側に水路は続くが、未調査なため確認できない。溜橋状の空間から北側通る溝造構も検出した。門床面中央部は破壊され、詳細は不明である。西向き開口部中央には径2m程の土坑があり、中には石垣に使用されていたと思われる巨石が入っていた。破却によるものかは不明である。

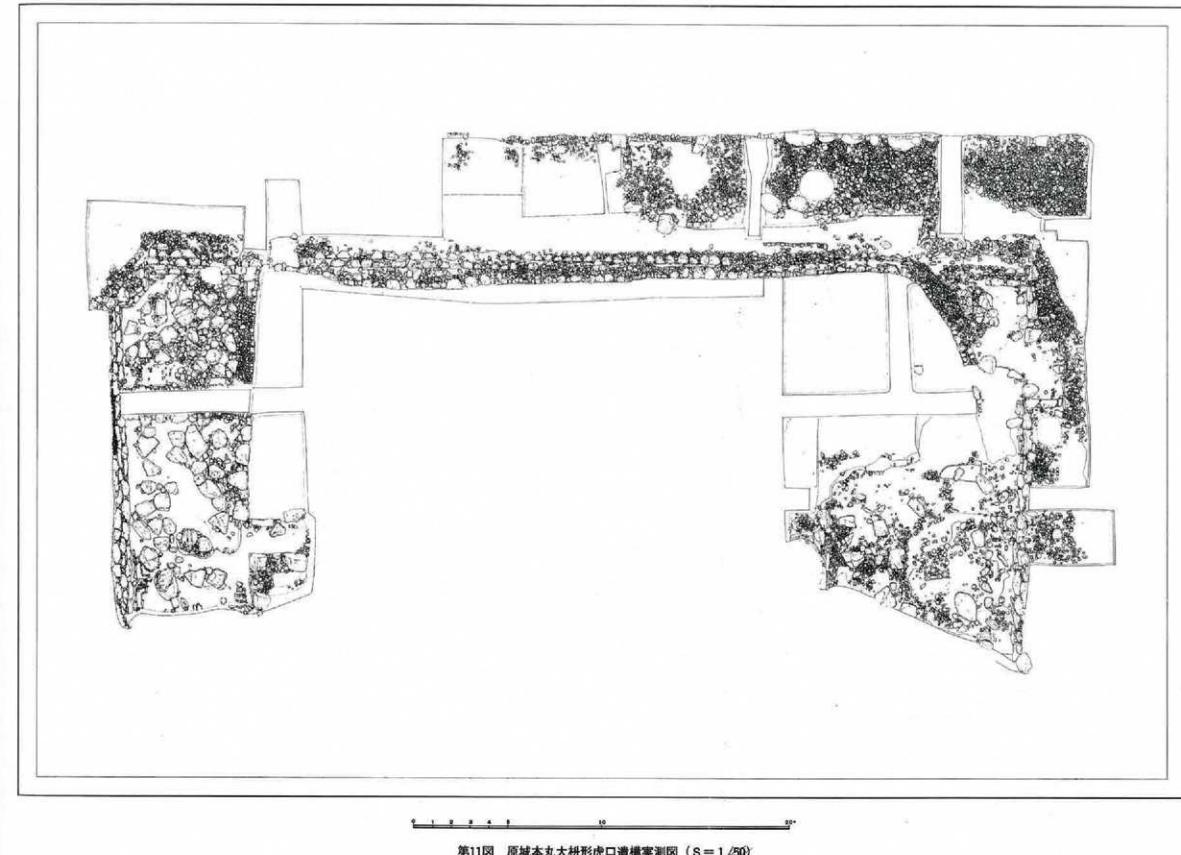
第10図 溝造構実測図 ($S = 1/60$)

西方向に通る溝造構を検出した。この場所
石垣に続く空間である。溝造構は両脇に断
面は約30cm、検出した東端から西側に約1m
らに西側に水路は続くが、未調査なため確
か。門床面中央部は破壊され、詳細は不明で
こは石垣に使用されていたと思われる巨石が



S = 1/60

原城跡本丸大枱形虎口(平面図)





第12図 原城本丸平面図 ($S = 1/600$)

1:600

第4節 出土遺物

遺物概要

第8次調査及び第9次調査において出土遺物は約13,000点に及び、特に多量に出土したのは陶磁器である。次に瓦が多く出土している。各遺物については種類別に記述を進める。

①貿易陶磁器

青花の器種が多く中国系窯のものが多い。他に東南アジア産のものも含まれる。

②国産陶磁器

唐津系陶器が主で、肥前磁器の製品がある。

③瓦

軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、隅軒平瓦、鬼瓦、蟻瓦がある。

④キリシタン関係

十字架、花十字紋瓦などがある。

⑤金属製品

銭、キセル、銅製品、鉛製品がある。

(1) 貿易陶磁器

a. 青磁

1は、碗の口縁部片である。明るいガラス質釉が掛かる。貫入が入る。

2は、皿の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は浅い。明るい緑色のガラス質釉が、疊付部分と高台内まで掛かる。

3は、皿である。口縁部は外反し開く。明るい緑色のガラス質釉が掛かり、貫入が入る。

4は、香炉の高台部片である。底部は平底で、内外面に明るい緑色のガラス質釉が掛かる。底部は釉が掛からず、露胎となる。

b. 白磁

5は、皿の高台部片である。「口禿」の皿で、底部は平底となり、釉が掛からず露胎となる。

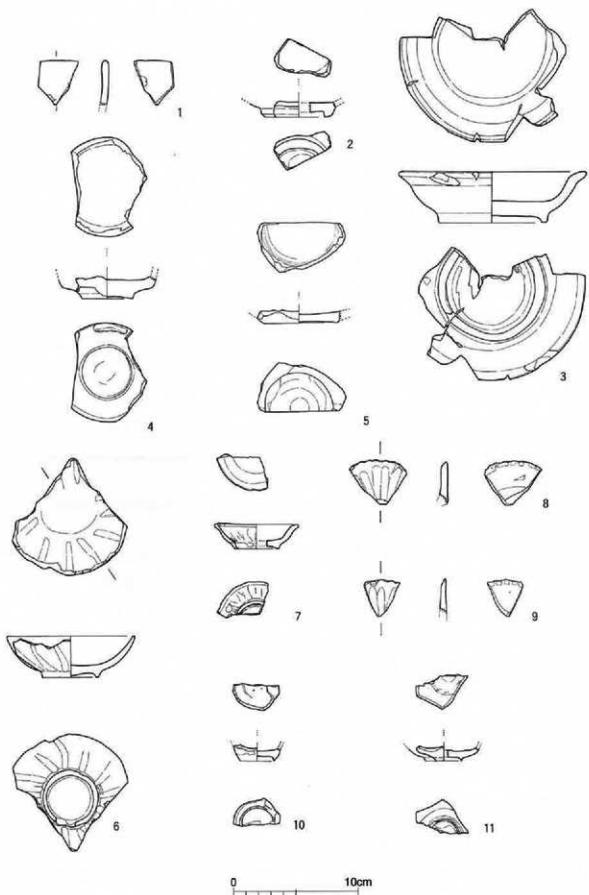
6は、皿である。器壁は菊弁形をし、器腹は浅く弓なりをしている。高台は低く内湾し、高台内は露胎で、褐色の鉄斑が現れている。貫入が入る。

7は、小皿である。口縁部は外反し、輪花状の口縁となる。高台は低く内湾し、高台内は浅い。高台内と疊付は無釉である。

8・9は、小皿の口縁部片である。器壁がまっすぐ広がり、外壁は菊花形をなす。

10は、小皿の高台部片である。器壁下部を削りだし高台とする。高台は低く内湾し、高台内は浅く無釉である。

11は、小皿の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は浅い。見込みは蛇ノ目状になる。



第13図 貿易磁器① (S = 1 / 3)

c. 青花

碗類

- 12は、小盃の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は浅い。見込みは円圈内に馬を描く。
- 13は、小盃の高台部片である。高台は低く、高台内と疊付は無釉である。高台外側に圓線。
- 14は、小盃の高台部片である。高台は高く内湾し、高台内は高い。高台脇に圓線と高台内には文字鉢が入る。見込みは円圈内に青海波が描かれる。
- 15は、瑠璃釉小盃の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は浅い。被熱痕がある。
- 16は、碗の高台部片である。高台は高く内湾し、高台内は高い。高台内は円圈内に文字鉢が入る。
- 17は、碗の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は浅い。疊付に初穀が付着している。見込みは文字鉢である。
- 18は、碗の高台部片である。高台は低く直立する。疊付に初穀が付着し、高台内は釉が掛かる。見込みは草花文を描く。
- 19は、碗の高台部片である。高台は低く直立する。疊付に初穀が付着し、高台内は釉が掛かる。高台外壁は二重円圈である。見込みは円圈内に白抜きの文様を描く。
- 20は、碗である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。高台は低く直立する。疊付に初穀が付着し、高台内は釉が掛からず、露胎となり褐色の鉄斑が現れている。見込みは二重円圈内に「青」を描く。
- 21は、碗の高台部片である。高台は低く直立する。疊付に初穀が付着し、高台内は釉が掛かる。見込みは二重円圈内に青海波が描かれる。
- 22は、碗の高台部片である。高台は低く直立し、高台内は釉が掛かる。高台内外壁に初穀が付着している。器腹外壁には唐草文、見込みは二重円圈内に草花文を描く。
- 23は、碗の高台部片である。高台は高く内湾し、高台内は高く、釉が掛かる。見込みは白抜きで十字花文を描く。
- 24は、碗の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は高く茶褐色の釉が掛かる。見込みは円圈内が蛇ノ目状の釉剥ぎとなる。
- 25は、碗の高台部片である。高台は低く直立し、高台内は釉が掛かる。見込みは円圈内が蛇ノ目状の釉剥ぎとなる。
- 26は、碗の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は高く露胎となる。見込みは円圈が描かれる。
- 27は、碗の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は釉が掛かる。外壁は色絵痕が残る。
- 28は、碗の口縁部片である。口縁部は直立し、口縁部内外壁に波文と草木文を描く。外壁には龍を描く。
- 29は、碗の口縁部片である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。外壁に草花文を描く。
- 30は、碗の口縁部片である。口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。外壁に龍文を描く。
- 31は、碗の口縁部片である。口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。口縁部内外壁に圓線。
- 32は、碗の口縁部片である。口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。貫入が入る。

33は、碗の口縁部片である。口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。外壁に花文を描く。

34は、碗の口縁部片である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。外壁に龍文を描く。

皿類

35は、基筋底の皿で、疊付が露胎となっている。見込みは草木に鳥が描かれる。

36は、基筋底の皿で、疊付が露胎となっている。見込みは二重円圈内に草木が描かれる。

37は、基筋底の皿で、疊付が露胎となっている。見込みは二重円圈である。

38は、基筋底の皿で、疊付が露胎となっている。見込みは草花文が描かれる。

39~41は同類の皿である。高台は低くやや内湾し疊付部分は初穀が付着している。内側に向けて面取りをしている。円圈内に人物が描かれている。口縁部には、紗綾形文が描かれている。

42は、皿の高台部片である。高台は低くやや内湾し、高台内は二重円圈内に文字鉢が入る。見込みは二重円圈内に人物が描かれている。

43は、皿の高台部片である。高台は低く直立し、高台内壁に内側に初穀が付着している。見込みは草が描かれる。

44は、皿の高台部片である。高台は低く内湾し、疊付と高台内に初穀が付着している。見込みは二重円圈内に文字鉢が入る。

45は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。外壁に花唐草文を描く。高台は低くやや内湾し、疊付に初穀が付着している。見込みは二重円圈内に欄干と草花を描く。

46は、口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。高台は低く、圓線一本配する。見込みは草花が描かれている。

47は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。外壁に花唐草文を描く。高台は低く内湾し、疊付部分は黒く着色されている。見込みは二重円圈内に龍文を描く。

48は、皿の高台部片である。高台は低く内湾し、高台外壁面を青花で塗りつぶす。見込みは蓮弁を廻らす。

49は、皿の高台部片である。高台は低く内湾する。見込みは圓線内に文様が描かれている。

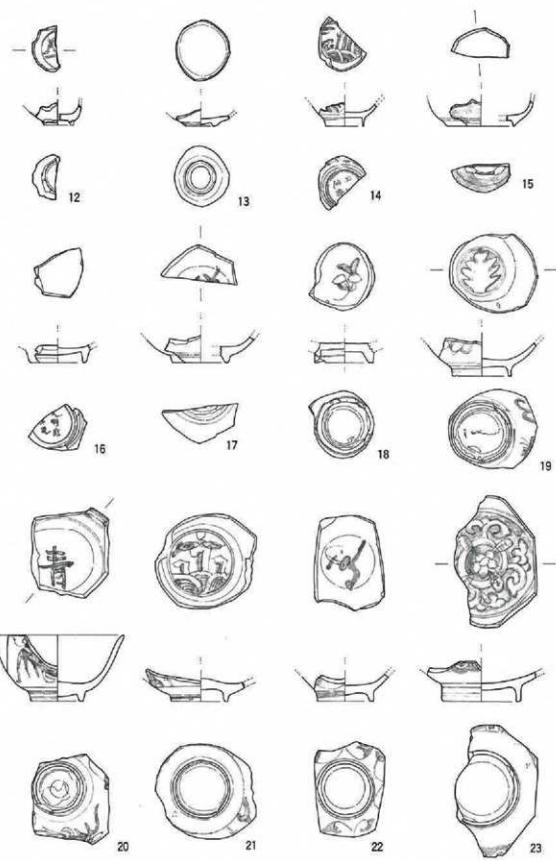
50は、高台は低くやや内湾し、疊付は内側に向けて削り取っている。高台側面に圓線を廻らす。見込みは草花を描く。

51は、小皿の高台部片である。口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。高台は低くやや内湾する。見込みは円圈内に文様を描く。

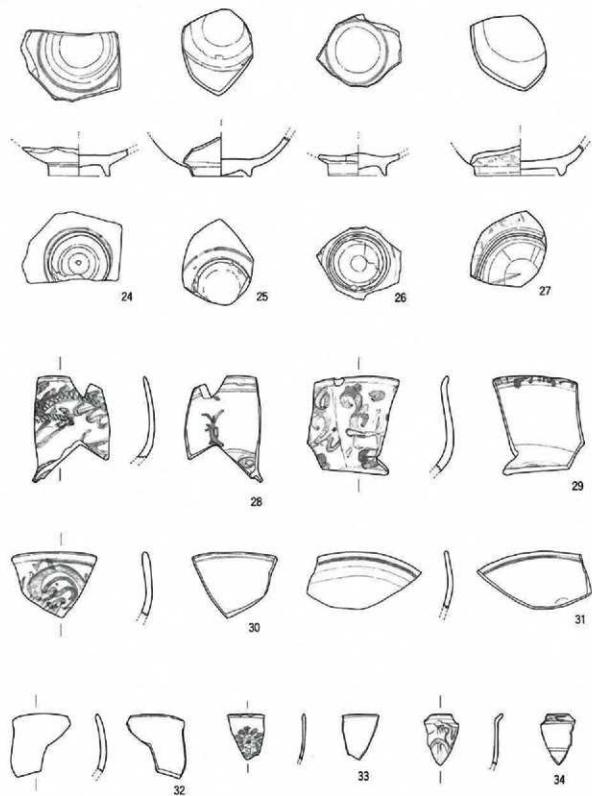
52は、鏡状の縁をもつ皿の口縁部片である。口縁部は直線的外側に開き、器腹部で屈曲する。口縁部に花文を描く。

53は、皿の高台部片である。高台は低く内湾し、疊付は銳角になる。

54, 55は、高台は低く直立し、高台内は丁寧に削られている。高台及び高台内、見込みは釉が掛からず露胎である。

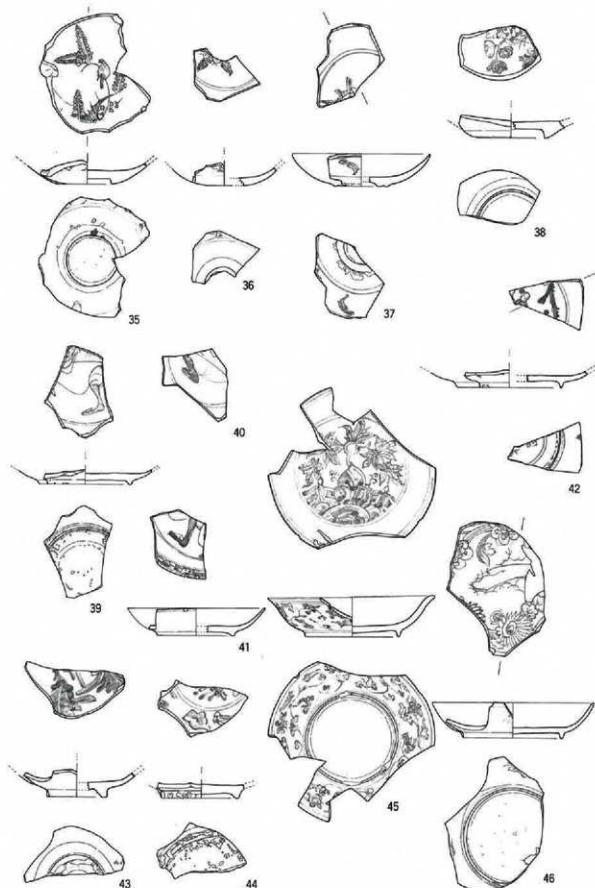


第14図 貿易磁器② (S = 1/3)



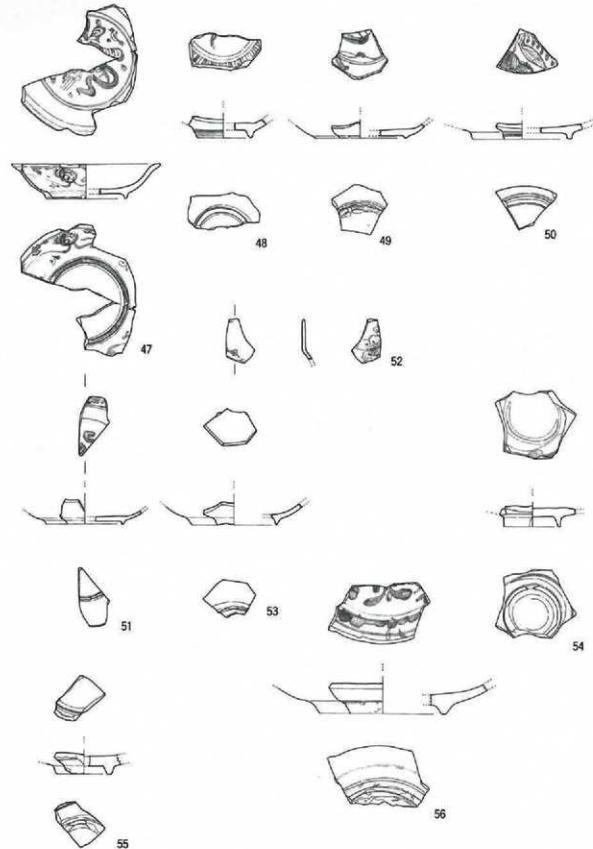
0 10cm

第15図 貿易磁器③ (S = 1 / 3)



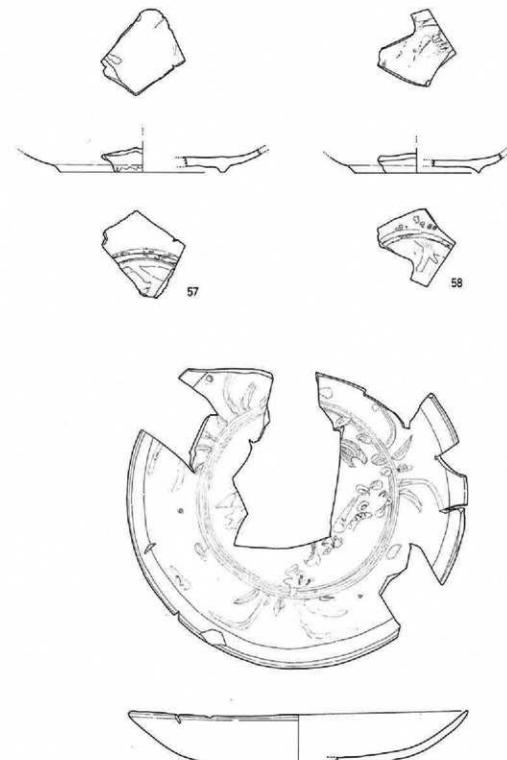
0 10cm

第16図 貿易磁器④ (S = 1 / 3)



第17図 貿易磁器⑤ (S = 1/3)

-34-



第18図 貿易磁器⑥ (S = 1/3)

-35-

56は、青花大皿高台部片である。高台は低く内湾し、疊付に初穂が多く付着する。見込みは草木などを描く。

57~59は、須頃赤絵の皿である。高台は低く内湾し、疊付および高台内壁に初穂が多く付着する。色絵部分は剥落している。

瓶身

60は、白磁の水滴で、内外両面に白釉が施される。口縁部はやや内済し、器腹部は弓なりに膨らみを持つ。注口部と把手部は欠損しているが、把手上部に紐通しが付く。底部は平底で釉が掛からず露胎となる。

61は、蓋である。青海波文のなかに三方に窓を設け花文を描く。蓋の裏は鶴が掛からず雲胎である。

62は、小壺である。口縁部は欠損しているが、器腹は膨らみ、底部は平底である。内外面と底部に釉が掛かり、書き入が入る。口縁部周辺に薬文、器底には鷹が描かれる。

63は、急須と思われる。底部は平底で、釉が掛からず露胎となる。器腹には花唐草文、下部には連弁文が見られる。

64は、瓶の口縁部である。草花文を描き、墨入がある。

65は、瓶の低部片である。低部は平底で軸が掛からず、靈動となる。根元に事文文を刻む。

66は、瑠璃釉壺の高台部片である。高台は低く内済し、高台内は浅く白釉が掛かる。疊付は鋭角に削り出上雲胎となる。

67は、臺の器腹部片である。外壁は緑色の釉が塗られ、内部は釉が塗られておらず

68は、アンビン壺である。剣は短く、口は外反する。口縁部の外側に顯著な稜をもち、器腹は肩部に最大径をもつ、腰部中部に上下の接合部がある。底部は平底で斜面に削られた溝跡がある。

69-72は、朝鮮製白磁碗の口縁部である。

73は、朝鮮製白磁皿の高台部片である。高台は低くやや内湾し、疊付は厚く削り取っている。見込みは既に跡が残る。

⁷⁴⁴ 一方、開港場開拓の資金調達である、資金は個人から直接、商社から、銀行から融資され、開港場開拓

（2）複数型の「高音部」である。高音は直ぐに消え、高音内外に轟が掛かる。直角と先端のみに砂目跡が付く。

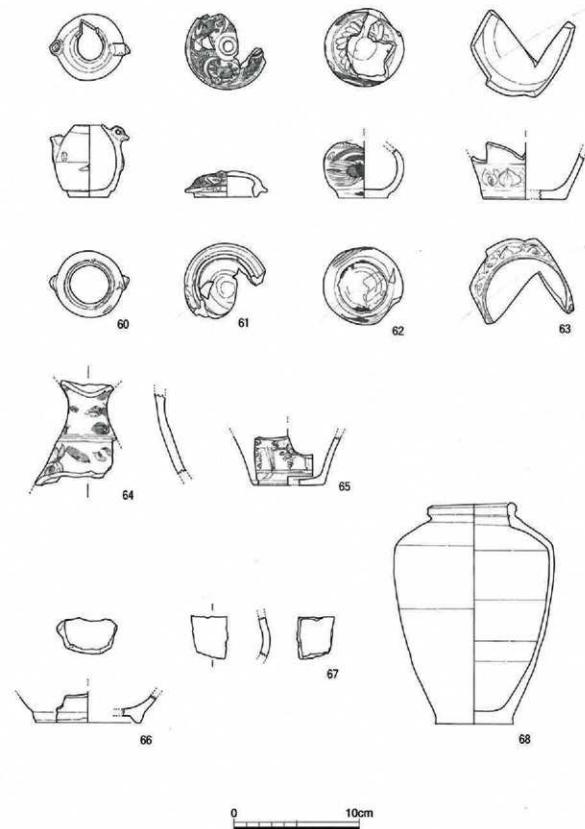
以上は、新潟製鐵の高音部分である。先述の如きが掛かりす、露船となる。

これは、初期成長の高齢部で見られる。高齢は既に内側し、高齢内外に瘤が掛かる。茎付と見込みに移り跡が付く。

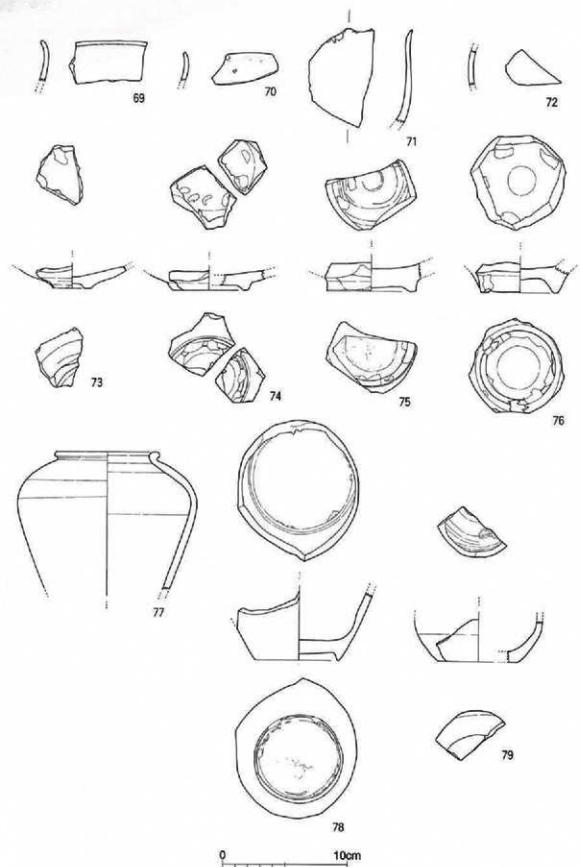
77は、朝鮮表白磁瓶の口部である。剣は短く、口は外反する。器壁は肩から胴にかけて豊かに膨らむ。内外に釉が掛かる。

78は、朝鮮製白磁瓶の底部である。高台は低く内湾し、高台内外に軸が掛かり、疊付は銳角になる。

79は、朝鮮製白磁小壺の高台部片である。底部は平底で、袖が掛からず露胎である。



第19図 貿易磁器⑦ (S = 1 / 3)

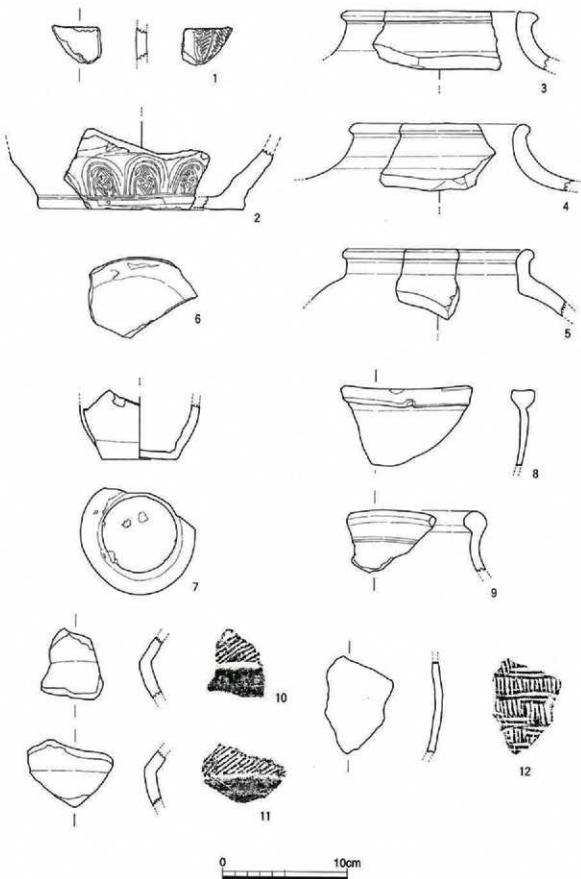


第20図 貿易磁器⑥ (3 = 1 / 3)

d. 陶器

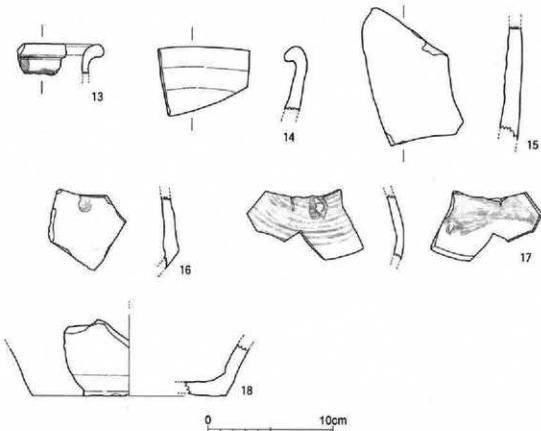
出土した貿易陶器の生産地は中国および東南アジア系である。

- 1・2は、華南三彩壺、いわゆるトライディスクアント壺である。1は、胴部分である。緑色の器壺で表面文様は黄色である。2は、壺の裾部分である。底部は平底で、釉は掛からず露胎である。裾部分は連弁文である。胎土は黄茶褐色で、内面は鉄釉が掛けられている。
- 3は、壺の口縁部である。内外壁に船軸が掛けられ、口縁部は玉縁状になる。
- 4は、壺の口縁部である。口縁部は頸部から僅かに外反し、口縁部は玉縁状になる。内外壁に船軸が掛けられる。
- 5は、壺の口縁部である。口縁部は頸部から直立し、口縁は玉縁状になる。外壁に船軸が掛けられ、口縁上部は釉が掛けられず露胎となる。
- 6は、壺の底部分である。内外壁に船軸が掛けられる。底部は中央に向けて窪み、釉は掛けられず露胎となる。
- 7は、ベトナム製瓶の低部分である。底部は平底となり、外壁には船軸が掛けられる。内部は鉄金色になる。
- 8は、ベトナム製鉢の口縁部である。口縁部は外反しこの字状となり、内面には沈線が廻る。頸部と口縁部の間に沈線が廻る。外面は赤みがかった灰色を呈し、内面は褐釉が掛けられ黒い小斑点が浮かぶ。胎土は灰色を呈し堅い。
- 9～12は、ベトナム製ハンネラ土器である。土師質の土器で、器腹に叩き文や印文が施される。胎土は橙色を呈する。
- 9は、口縁部である。口縁部は頸部から僅かに外反し、口縁部は玉縁状になる。
- 10・11は、同一固体の口縁部である。口縁部は頸部から直立する。肩部から叩き文を施す。
- 12は、器腹部である。格子状の文様が施されている。
- 13は、タイ製鉢の口縁部である。口縁部は外反し玉縁状になる。口縁部は釉が掛けられず露胎となるが、器腹部は船軸が掛けられる。胎土は褐色を呈する。
- 14は、タイ製鉢の口縁部である。口縁部は内側に湾曲し玉縁状になる。内外面とも赤みがかった灰色を呈し露胎となる。
- 15は、タイ製壺の器腹部である。内面は赤みがかった灰色を呈し、内面にはぶい黄橙色を呈する。
- 16は、タイ製壺の低部である。底部は平底で釉は掛けられず露胎である。外面に釉が垂れており、内面は灰色を呈し露胎である。
- 17は、タイ製青磁双耳瓶である。明るい緑色のガラス質釉が掛けられ、肩部は圓錐を幾重にも廻らす。胎土は白灰色に黒い微砂を含む。
- 18は、東南アジア製と思われる壺の低部である。底部は平底で釉は掛けられず露胎である。外面は茶褐色を呈する。



第21図 貿易陶器① (S = 1/3)

-40-



第22図 国産陶器② (S = 1/3)

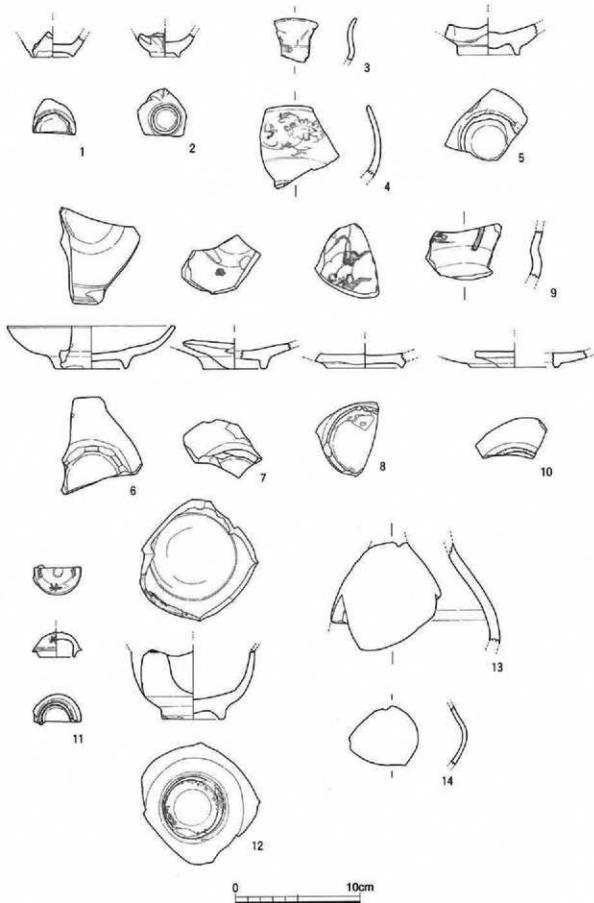
(2) 国産陶器

a. 磁器

本遺跡から出土した国産磁器の生産地は肥前である。器形は皿・碗・瓶である。

- 1は、小皿の高台部片である。高台は低く内湾する。置付は鋭角になり、高台内にも釉が掛かる。
- 2は、染付小皿の高台部片である。高台は低く内湾する。外壁には草文を描く。
- 3は、染付小皿の口縁部片である。口縁部は外側に開き、外壁に文様が入る。
- 4は、碗である。高台は低くやや内湾する。口縁部はやや内側にすぼまり、器腹は弓なりとなる。外壁は菊文が描かれている。
- 5は、碗の高台部片である。高台は低く内湾し、高台内は釉が掛かる。
- 6は、染付皿である。高台は低くやや内湾する。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりをしている。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎをして砂目跡が付く。置付にも砂目跡が付く。
- 7は、皿の高台部片である。高台は低くやや内湾する。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎをして砂目跡が付く。
- 8は、皿の高台部片である。高台は低くやや内湾する。置付、高台内に砂が多く付着する。見込みは松を描く。
- 9は、染付皿口縁部片である。口縁部は外反し折線状になる。口縁部内壁に文様が見られる。
- 10は、皿の高台部片である。高台は低くやや内湾する。置付、高台内に砂が多く付着する。

-41-



第23図 国産磁器 (S = 1/3)

11は、蓋である。外壁に花文を描く。蓋裏は釉が掛からず露胎である。

12は、碗である。高台は低くやや内溝し、豊付に砂が多く付着する。内外とも無文である。

13は、瓶である。器腹は厚く、外面に釉が掛かる。

14は、瓶である。器腹は弓なりになり、外面のみ釉が掛かる。

b. 陶器

出土した陶器は唐津系の陶器が主である。器形は皿・碗・瓶・壺などである。

碗類

1は、小碗である。底部は平底で釉が掛からず露胎である。見込みに被熱痕が見られる。胎土は灰黄褐色を呈する。

2は、小碗である。高台は低く直立する。口縁部はやや外反し、器腹は浅く弓なりとなる。全面に被熱痕が見られる。胎土は白灰色を呈する。

3は、小碗である。高台は低く直立する。豊付に3ヶ所の砂目跡が付く。胎土は灰色を呈する。

4は、高台は低くやや内溝し、高台内は浅い。見込みに胎土目跡が3ヶ所付く。胎土は浅黄褐色を呈する。

5は、高台は低くやや内溝し、高台内は浅く釉は全面に施釉され、貢入が入る。胎土は白灰色を呈する。

6は、高台は低く直立する。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにぶい橙色を呈する。

7は、高台は低く直立し、高台内は浅い。釉は高台まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は器腹部でオリーブ灰色、高台はにぶい橙色を呈す。

8は、高台は低く直立し、高台内は浅い。釉は全面に施釉される。胎土は灰黄褐色を呈する。

9は、高台は低く直立する。豊付に砂目跡が1ヶ所付く。釉は全面に施釉される。胎土は灰白色を呈する。

10は、高台は低くやや内溝し、高台内は浅い。釉は全面に施釉される。胎土は灰色を呈する。

11は、高台は低く直立する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は淡黄色を呈する。

12は、高台は低くやや内溝し、高台内は浅い。口縁部はわずかに外反し、器腹は弓なりになる。釉は全面に施釉される。胎土は灰色を呈する。

13は、高台は低く直立する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄色を呈する。

14は、高台は低くやや内溝する。釉は全面に施釉される。胎土はにぶい黄褐色を呈する。

15は、高台は低くやや内溝し、高台内は浅い。釉は全面に施釉される。胎土はにぶい橙色を呈する。

16は、高台は低く直立する。釉は内面と器腹外壁の腰部分までと高台内に掛かる。胎土は灰色を呈する。

- 17は、高台は低く直立する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は器腹部では褐灰色で、高台部ではにぶい赤褐色を呈する。釉の上から長石釉をイッチン描きしている。イッチン（筒がき）の趣が素麺に似ているところから「そうめん手」と呼ばれる。
- 18は、天目形の碗である。高台は低く直立する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄色を呈する。
- 19は、高台は低く直立する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい橙色を呈する。
- 20は、高台は低くやや内湾する。釉は全面に施釉される。胎土は灰黄褐色を呈する。
- 21は、高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰色を呈する。
- 22は、高台は低く内湾し、高台内は浅い。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰黄色を呈する。
- 23は、高台は低く直立する。釉は内面に鉄釉が掛かり、器腹下部は透明釉が掛かる。胎土はにぶい黄色を呈する。
- 24は、高台は低く内湾し、高台内は浅い。釉は全面に施釉される。見込みは沈線の二重円圈を有する。胎土はにぶい赤褐色を呈する。
- 25は、高台は低くやや内湾する。綠釉が全面に施釉される。胎土は灰黄色を呈する。
- 26は、天目形碗の口縁部片である。釉は内外面に掛かる。胎土は灰オリーブ色を呈する。

皿類

- 27は、高台は低く内湾し、高台内は浅い。見込み及び疊付に砂目跡は見られない。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は淡黄色を呈する。
- 28は、高台は低く内湾し、高台内は浅い。見込み及び疊付に砂目跡は見られない。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 29は、見込みに砂目跡が付く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 30は、見込みに砂目跡が付く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい灰黄褐色を呈する。
- 31は、見込み及び疊付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。口縁部は外反し、平らに外に摘み出す。釉は全面に施釉される。胎土はにぶい黄灰色を呈する。
- 32は、見込み及び疊付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰オリーブ色を呈する。
- 33は、見込み及び疊付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は灰オリーブ色を呈する。

- 34は、見込みと疊付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰黄色を呈する。
- 35は、見込みに砂目跡が付く。高台は欠損している。釉は全面に施釉される。胎土は灰白色を呈する。
- 36は、溝縁皿である。見込みに砂目跡が付く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。口縁部は外反し、平らに外に摘み出す。口縁部上面に溝状のこみを設ける。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 37は、見込みに砂目跡が付く。高台は低く直立する。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は橙色を呈する。
- 38は、見込みに砂目跡が付く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰黄褐色を呈する。
- 39は、見込みに砂目跡が付く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄褐色を呈する。
- 40は、高台は低く内湾し、高台内は浅い。見込み及び疊付に砂目跡は見られない。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 41は、高台は低く内湾する。見込みは沈線の円圈を有する。見込み及び疊付に砂目跡は見られない。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにぶい赤橙色を呈する。
- 42は、高台は低く直立する。釉は器腹外壁の高台付根まで掛かり、高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 43は、見込みに砂目跡が付く。高台は低く直立する。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は灰白色を呈する。
- 44は、見込み及び疊付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。釉は全面に施釉される。胎土はにぶい褐色を呈する。
- 45は、見込みに砂目跡が付く。高台は低く内湾する。高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい橙色を呈する。
- 46は、見込みに砂目跡が付く。高台は低く内湾する。高台内は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 47は、見込みに砂目跡が付く。高台は低く内湾する。高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰黄色を呈する。
- 48は、高台は低く内湾する。見込みに鉄砂で文様を描く。胎土はにぶい赤褐色を呈する。
- 49は、高台は低く内湾する。見込みに印花を三島風の白土象嵌をしている。疊付に砂目跡が付く。釉は全面に施釉され、胎土は褐灰色を呈する。
- 50は、高台は低く内湾する。見込みに文様を描いており、錫が赤く発色している。疊付に砂目跡が付く。釉は全面に施釉され、胎土は灰白色を呈する。

51は、高台は低く内湾する。見込みに文様を描いており、銅が赤く発色している。見込みに砂目跡が付く。釉は全面に施釉され、胎土は灰白色を呈する。

52は、溝縁皿の口縁部片である。口縁部は平らに外に摘み出し、折れ部分ははっきりと稜ができる。口縁部に釉が掛かる。胎土は灰オリーブ色を呈する。

53は、瀬戸美濃系皿の高台部である。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。胎土は淡黄色を呈する。

54は、瀬戸美濃系皿である。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。口縁部は外反し、平らに外に摘み出す。口縁部上面に溝状のへこみを設ける。見込みは菊花を線刻し、その上にオリーブ黄色の釉を掛ける。胎土は淡黄色を呈する。

55・56は、瀬戸美濃系皿である。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。口縁部は外反し、平らに外に摘み出す。口縁部上面に溝状のへこみを設ける。見込みは釉が掛からず露胎である。釉は柿釉で、胎土は淡黄色を呈する。

57は、瀬戸美濃系皿の高台部である。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。全面に透明釉を施す。胎土は淡黄色を呈する。

58は、瀬戸美濃系皿である。高台は粗く削り出され低く、底部はほぼ平底である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりである。全面に白色の釉を施す。胎土は淡黄色を呈する。

59は、高台は低く内湾する。見込みに目跡が付く。内面は鉄釉が掛かり、外面は長石釉が高台外壁まで掛かる。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は灰白色を呈する。

60は、高台は低く内湾する。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。内面は鉄釉が掛かる。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は灰白色を呈する。

61は、高台は低く直立する。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。内面は鉄釉が掛かる。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は淡黄色を呈する。

62は、高台は低く内湾する。見込みに胎土目跡が付く。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は灰色を呈する。

63は、高台は低く内湾する。見込みに砂目跡が付く。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は灰オリーブ色を呈する。

64は、高台は低く内湾する。見込みに胎土目跡が付く。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はオリーブ黄色を呈する。

65は、高台は低く内湾する。見込み及び疊付に目跡は見られない。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰白色を呈する。

66は、高台は低く内湾する。見込み及び疊付に砂目跡が見られる。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土にはぶい黄橙色を呈する。

67は、高台は低く内湾する。見込みに鉄砂の堀れが見られる。高台内は掛からず露胎となる。胎土にはぶい褐色を呈する。

68は、高台は低くやや外反する。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。見込みに砂目跡と被熱痕がある。鉄砂で文様を描く。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は橙色を呈する。

69は、高台は低く内湾する。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。見込みに鉄砂で文様を描く。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにはぶい黃褐色を呈する。

70は、高台は低く直立する。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。口縁部は外反し、外に摘み出し折れ部分ははっきりと稜ができる。口縁部上面に溝状のへこみを設ける。見込みに鉄砂で文様を描く。見込み及び疊付に砂目跡が見られる。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土にはぶい黃橙色を呈する。

71は、高台は低く内湾する。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。見込みに鉄砂で文様を描く。見込み及び疊付に砂目跡が見られる。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにはぶい黃褐色を呈する。

72は、高台は低く内湾する。見込みに胎土目跡が見られ、鉄砂で竹文を描く。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土はにはぶい黃褐色を呈する。

73は、口縁部は外反し、外に摘み出し折れ部分ははっきりと後がでる。口縁部端は内側に折り曲げられ玉縁状になる。全面に厚く白土を塗り、口縁部内面と見込みに鉄砂で文様を描く。胎土は灰白色を呈する。

74は、二彩手の皿である。見込みに刷毛目を施し、緑色に発色した円圈を描く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く丁寧な作りである。疊付の幅は広く、胎土目跡が付く。釉は全面に施釉される。胎土は黄灰色を呈する。

75は、二彩手の皿である。見込みに刷毛目を施し、緑色に発色した花文を描く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く丁寧な作りである。疊付の幅は広い。見込みに胎土目跡が付く。釉は全面に施釉される。胎土は橙色を呈する。

76は、刷毛目の皿である。見込みに刷毛目を施す。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く丁寧な作りである。見込み及び疊付に砂目跡が付く。高台内は釉が掛からず露胎となる。胎土は黄灰色を呈する。

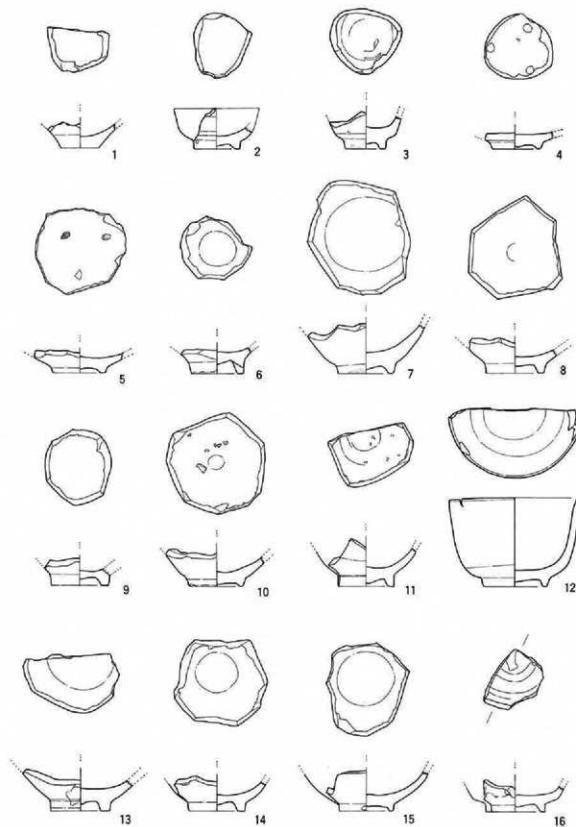
77は、刷毛目の蓋である。上部分に刷毛目を施す。裏は釉が掛からず露胎である。輪縁づくりである。胎土は褐色を呈する。

78は、鉢の口縁部片である。口縁部はわずかに外反し玉縁状になる。器腹は深く、外面に鉄釉が掛かる。胎土は灰オリーブ色を呈する。

79は、鉢の口縁部片である。口縁部はわずかに外反し玉縁状になる。器腹は深く、直立する。外壁に鉄砂で文様を描く。胎土にはぶい黄橙色を呈する。

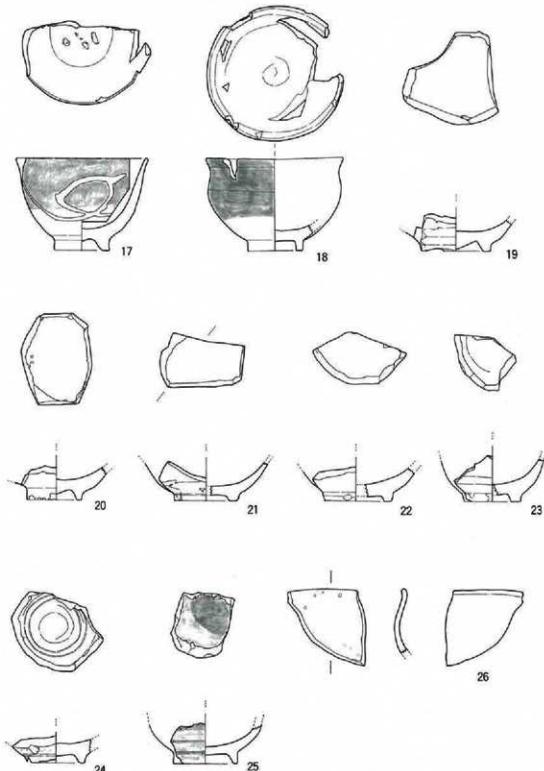
80は、水注の注口である。外面には釉が掛けられるが、内部は釉が掛からず露胎である。胎土はにはぶい赤褐色を呈する。

81は、線香立てと思われる。高台は高くやや内湾する。器腹腰部分に波文が見られる。釉は器腹外壁に掛かり、内面及び高台内は掛からず露胎である。胎土はにはぶい黄色を呈する。



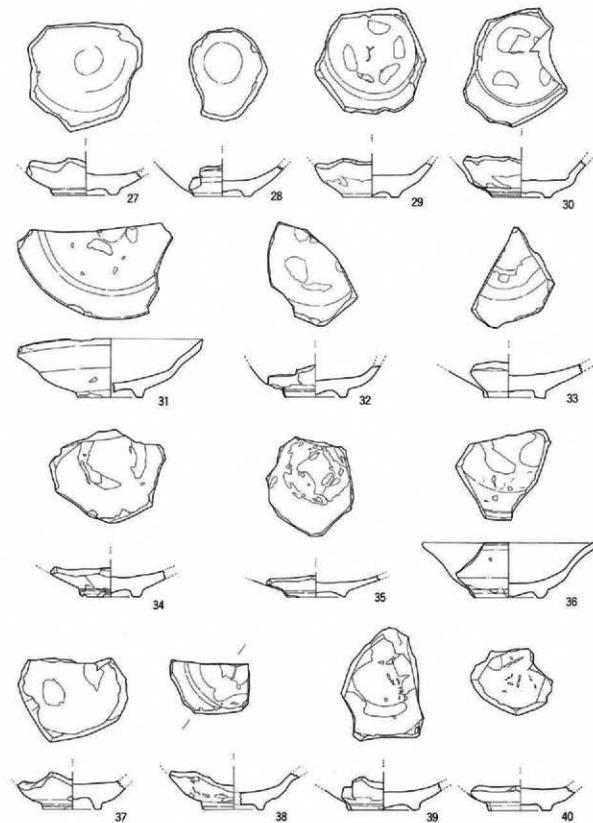
第24図 国產陶器① (S = 1/3)

- 48 -



第25図 国產陶器② (S = 1/3)

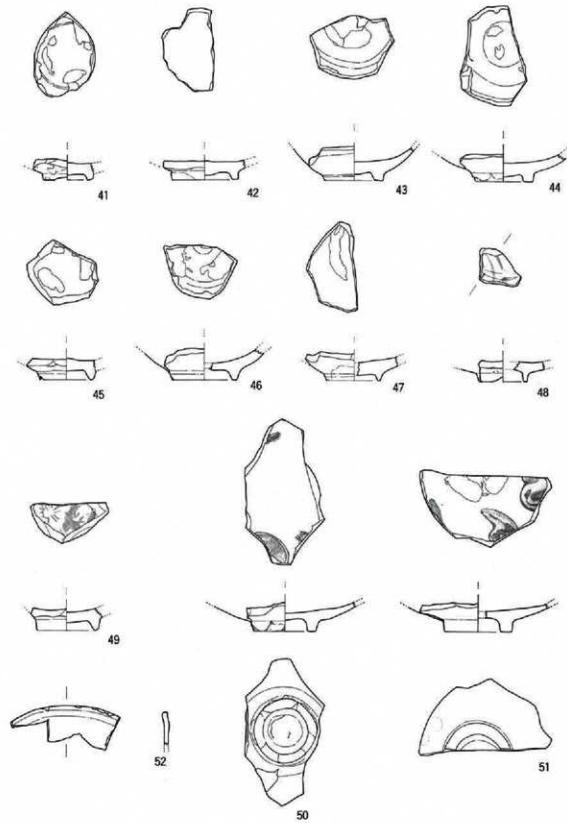
- 49 -



0 10cm

第26図 国產陶器③ (S = 1 / 3)

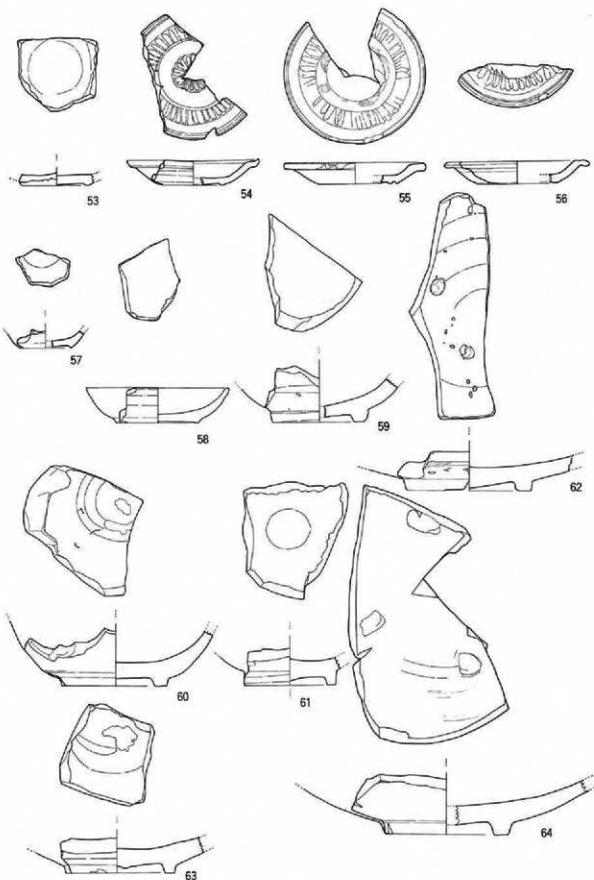
— 50 —



0 10cm

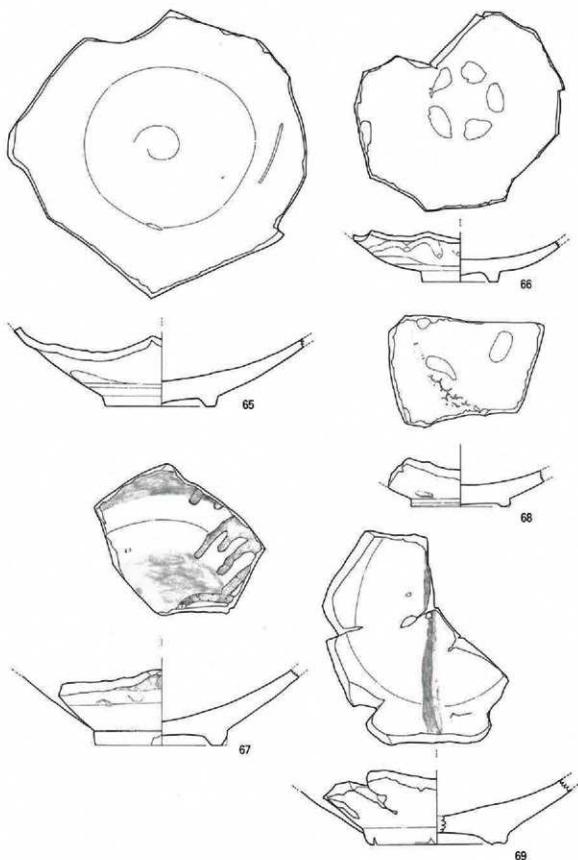
第27図 国產陶器④ (S = 1 / 3)

— 51 —



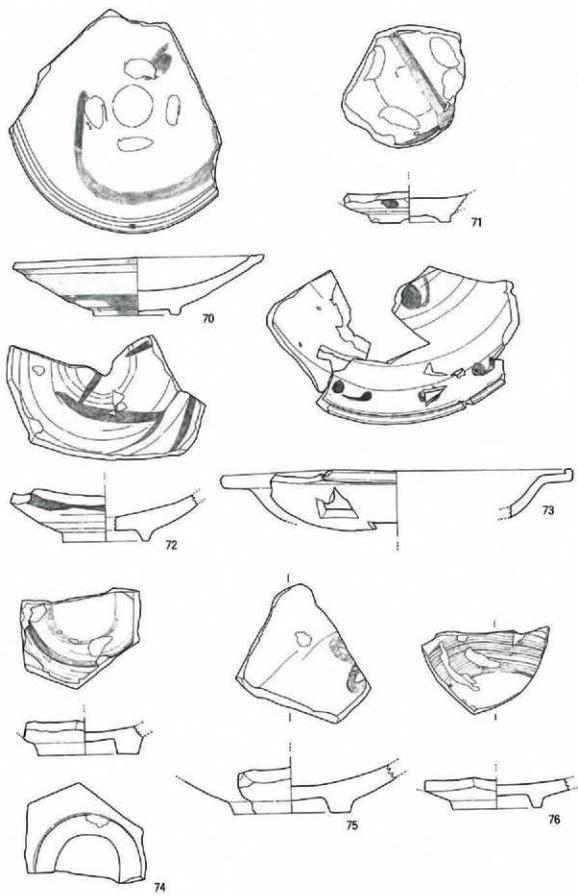
第28図 国產陶器⑤ (S = 1/3)

—52—



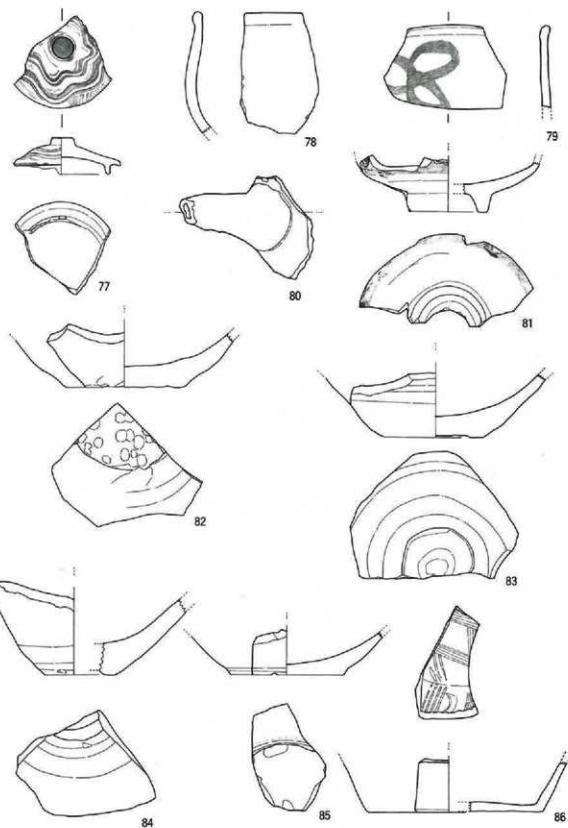
第29図 国產陶器⑥ (S = 1/3)

—53—



第30図 国產陶器⑦ (S = 1/3)

— 54 —



第31図 国產陶器⑧ (S = 1/3)

— 55 —

- 82は、擂鉢の高台部片である。底部は平底で、複数の窪みが見られる。御目は13本。釉は掛からず露胎である。胎土はにぶい橙色を呈する。
- 83は、擂鉢の高台部片である。底部は基筒底となる。御目は磨耗してほとんど見られない。釉は掛からず露胎である。胎土はにぶい橙色を呈する。
- 84は、擂鉢の高台部片である。底部は基筒底となる。御目は6本。釉は掛からず露胎である。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 85は、擂鉢の高台部片である。底部は平底となり、糸切り痕が残る。御目は5本。釉は掛からず露胎である。胎土はにぶい橙色を呈する。
- 86は、擂鉢の高台部片である。底部は平底となる。御目は見込みで2本、器腹で4本配す。釉は外壁面と底に掛かる。胎土は褐灰色を呈する。

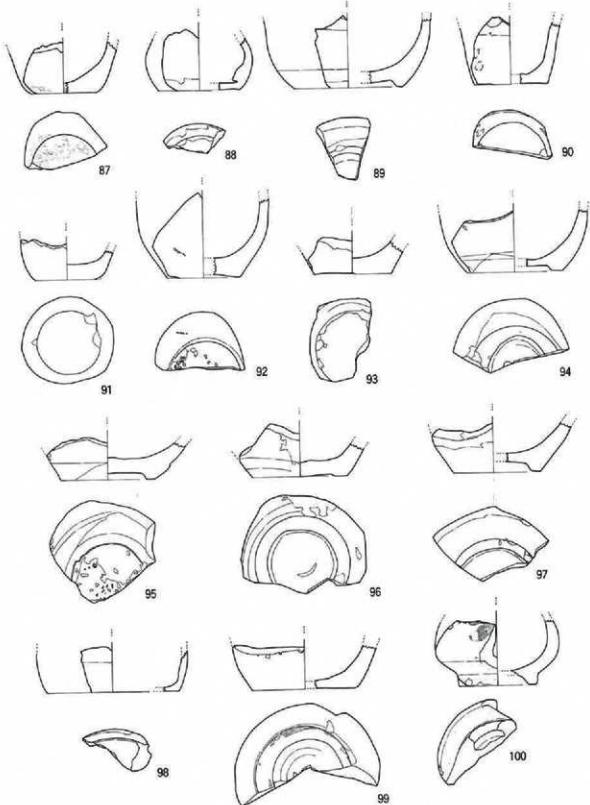
瓶類

- 87は、底部は平底となり、初戻が付着している。鉄軸が外外面に掛かる。胎土は灰白色を呈する。
- 88は、底部は基筒底高台となる。鉄軸が内外面に掛かる。胎土は淡黄色を呈する。
- 89は、底部は基筒底高台となる。長石釉が外面に掛かる。内面と高台内には釉は掛からず露胎となる。胎土は灰黄色を呈する。
- 90は、底部は平底となる。鉄軸が外外面に掛かる。底部には鉄軸が掛かり、器腹部には長石釉が掛かる。胎土は灰黄色を呈する。
- 91は、底部は平底となり、糸切り痕が残る。黄褐色の釉が外面に掛かる。胎土は灰白色を呈する。
- 92は、底部は平底となり、糸切り痕が残る。鉄軸が外外面に掛かる。胎土は灰黄色を呈する。
- 93は、底部は平底となり、糸切り痕が残る。鉄軸が外面に掛かる。胎土はにぶい黄色を呈する。
- 94は、底部は基筒底高台となる。長石釉が外面に掛かる。内面と高台内には釉は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄色を呈する。
- 95は、底部は基筒底高台となる。高台内部には砂が多く付着している。見込みは釉の溜りが見られる。胎土は白灰色を呈する。
- 96は、底部は基筒底高台となる。鉄軸が外外面に掛かり、その上から鉄軸の垂れが見られる。内部見込みには難纏成形の痕が残る。胎土は灰黄色を呈する。
- 97は、底部は基筒底高台となる。鉄軸が内外面に掛かる。胎土は灰黄色を呈する。
- 98は、底部は平底となる。黒褐色の外壁に長石釉の垂れが見られる。胎土は灰白色を呈する。
- 99は、底部は平底となる。外壁に鉄軸が掛かる。内部見込みには難纏成形の痕が残る。胎土は浅黄橙色を呈する。
- 100は、二彩手の瓶である。外壁に刷毛目を施し、緑色に発色した文様を描く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く丁寧な作りである。蓋付の幅は広い。見込みに胎土目跡が付く。胎土は灰黄色を呈する。

- 101～107は、壺の口縁部片である。口縁部は外方に折り、外側に縁帯を設ける。
- 101は、内面に同心円状の叩き痕が残る。釉は外外面に掛かる。
- 104は、口縁部上面に貝目の痕が付く。
- 106は、口縁部は玉縁状になる。壺の口縁部片である。口縁部は外方に折り、外側に縁帯を設ける。口縁部および頸部には釉は掛からない。
- 107は、備前壺の口縁部片である。口縁部はやや外反する。頸部は高く、肩部は丸く張り、波状の文様が刻まれる。
- 108～118は、壺の底部である。底部は平底である。
- 112は、底部に貝目の痕が付く。
- 117は、底部に内面に十字の文様が付く。
- 119は、甕である。肩部に2本の縄文を廻らし、内面は同心円状の叩き痕が残る。

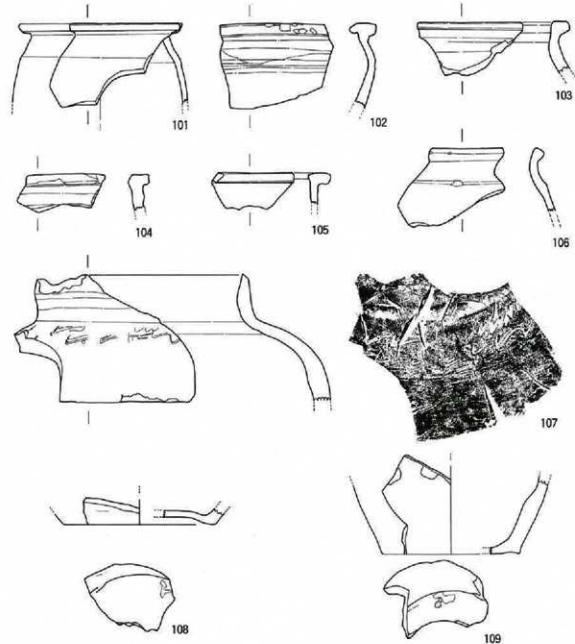
瓦質土器

- 1～6は、瓦質火鉢の口縁部片である。
- 1は、口縁部は外反し、玉縁状になる。口縁部下にX状の印文がある。胎土は中心部で暗青灰色、外側で灰黄色を呈する。
- 2は、口縁部は外反し、玉縁状になる。口縁部下に菊花状の印文がある。胎土は灰黄色を呈する。
- 3は、口縁部は外反し、玉縁状になる。口縁部下に花状の印文がある。胎土は灰黄色を呈する。
- 4は、口縁部は外反し、玉縁状になる。口縁部下に花状の印文がある。胎土は淡黄色を呈する。
- 5は、口縁部は外反し、玉縁状になる。口縁部下に菊花状の印文がある。胎土はにぶい黄橙色を呈する。
- 6は、口縁部は内側に窄まる。口縁部下に1本の削出し突帯をもつ。胎土は灰色を呈する。



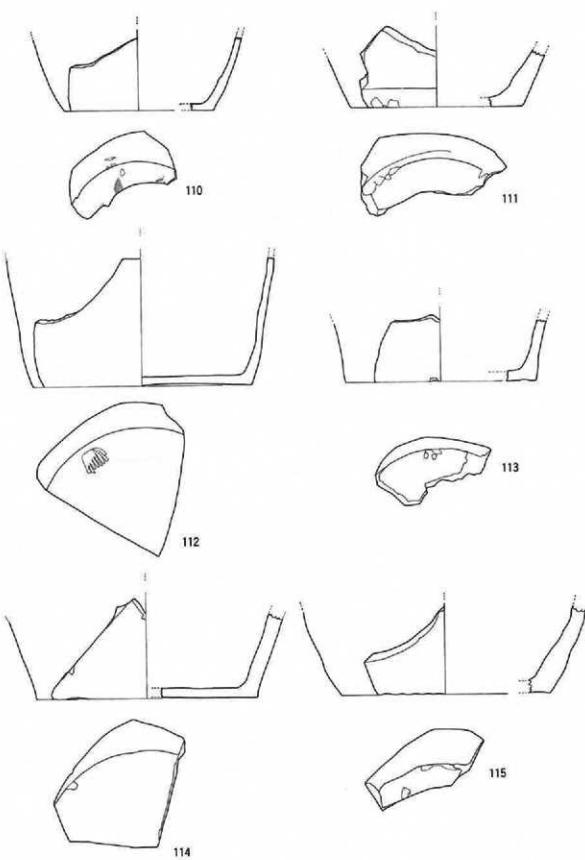
第32図 国產陶器③ (S = 1 / 3)

- 58 -



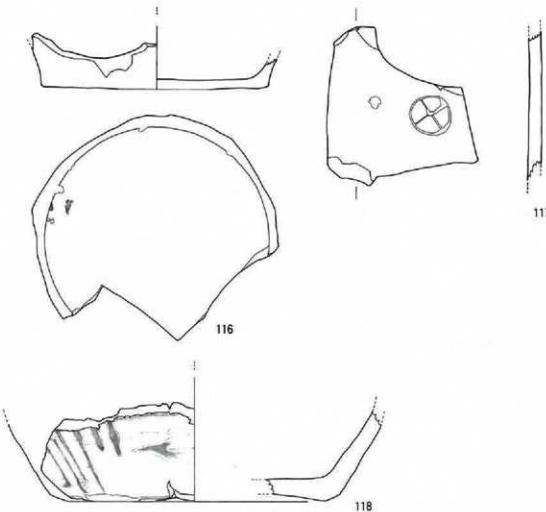
第33図 国產陶器④ (S = 1 / 3)

- 59 -



第34図 国產陶器① (S = 1/3)

- 60 -

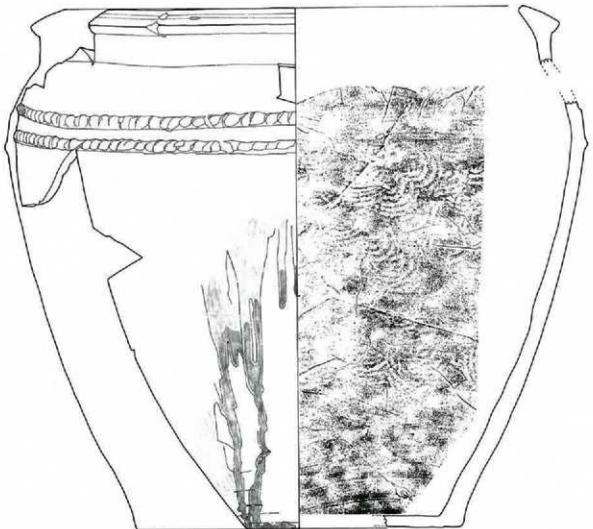


第35図 国產陶器② (S = 1/3)

- 61 -

0 10cm

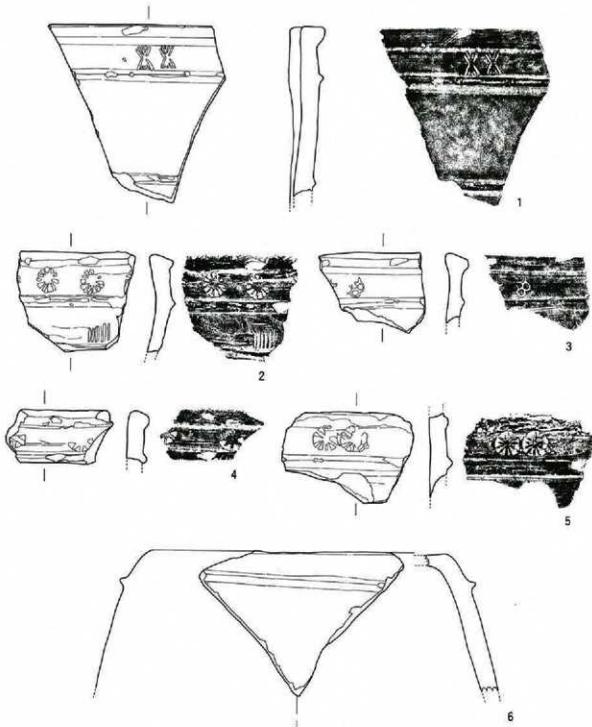
0 10cm



119

0 10cm

第36図 国產陶器③ (S = 1/3)



0 10cm

第37図 瓦質土器 (S = 1/3)

(3) 瓦

出土した瓦は軒丸、丸、軒平、平、隅軒平、鬼、鰐瓦である。

a. 軒丸瓦

1は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。巴頭は玉状となる。珠文は5個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調はぶい黄色を帯びている。

2は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。珠文は4個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は淡黄色を帯びている。

3は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。珠文は7個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は灰色を帯びている。

4は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。珠文は3個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は暗青色を帯びている。

5は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。巴頭は先端が尖っている。珠文は2個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は緑灰色を帯びている。

6は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。巴頭は先端が尖っている。珠文は4個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調はオリーブ灰色を帯びている。

7は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。周縁部が欠損しており、巴頭は先端が尖っている。珠文は1個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調はオリーブ灰色を帯びている。

8は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。巴頭は先端が尖っている。珠文は5個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は灰色を帯びている。

9は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。巴頭は先端が尖っている。珠文は6個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は緑灰色を帯びている。

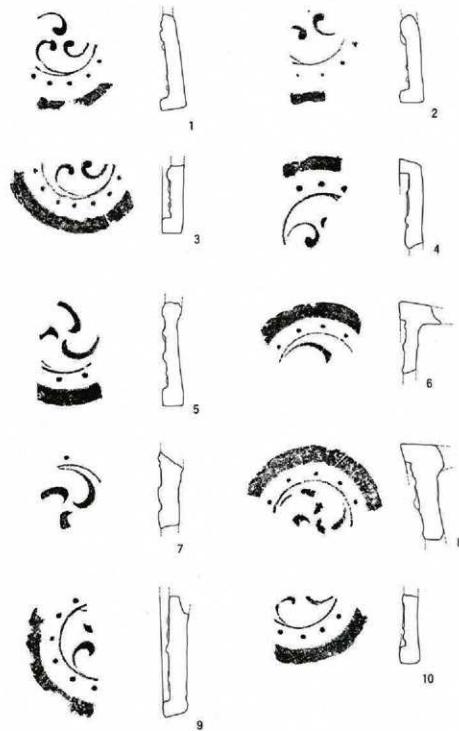
10は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。巴頭は先端が尖っている。珠文は4個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調はぶい黄橙色を帯びている。

11は、左巻きの三巴文で、巴尾部は互いに接し圓線をなしている。巴頭は先端が尖っている。珠文は3個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は青灰色を帯びている。

12は、右巻きの三巴文で、巴頭と巴尾部は欠損している。珠文は、小さくはっきりとした珠で7個残存している。瓦当裏面はナデ調整が施される。色調は緑灰色を帯びている。

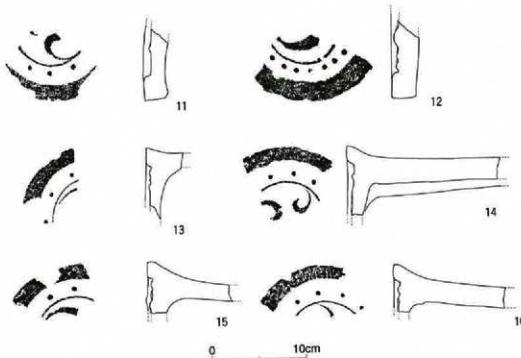
13は、左巻きの三巴文で、巴尾部が一部残る程度であるが互いに接し圓線をなしている。巴頭は欠損している。珠文は3個残存している。色調はオリーブ灰色を帯びている。

14は、左巻きの三巴文で、巴尾部は短いが互いに接し圓線をなしている。巴頭は先端が尖っている。珠文は3個残存している。丸瓦凹面はヘラによるナデ調整が施され、コビキBの痕跡も見られる。色調は緑灰色を帯びている。



0 10cm

第38図 軒丸瓦① (S = 1/4)



第39図 軒丸瓦② (S = 1/4)

15は、左巻きの三巴文で、巴尾部が一部残る程度であるが互いに接し團線をなしている。巴頭は欠損している。珠文は2個残存している。色調は緑灰色を帯びている。

16は、左巻きの三巴文で、巴尾部は短いが互いに接し團線をなしている。巴頭は欠損している。珠文は4個残存している。丸瓦凹面はヘラによるナテ調整が施され、コビキBの痕跡も見られる。色調は淡黄色を帯びている。

b. 丸瓦

1は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。凹面は、玉縁部に対し左下がり方向の斜位のコビキA痕が見られる。色調は暗灰色を帯びている。

2は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。玉縁部に対し左下がり方向の斜位のコビキA痕が見られる。玉縁下には擦り紐痕も残る。焼成は良好で、色調は暗オリーブ灰色を帯びている。

3は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。凹面は、玉縁部に対し左下がり方向の斜位のコビキA痕と、布目痕も見られる。玉縁下には擦り紐痕も残る。また、釘穴が開いており、凸面から凹面に向け穿孔されている。色調は緑黒色を帯びている。

4は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。凹面は、玉縁部に対し左下がり方向の斜位のコビキA痕が見られる。玉縁下には擦り紐痕も残る。色調は灰色を帯びている。

5は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。凹面は、玉縁部に対し

左下がり方向の斜位のコビキA痕と、布目痕も見られる。玉縁下には擦り紐痕も残る。色調は暗緑灰色を帯びている。

6は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。凹面は、玉縁部に対し左下がり方向の斜位のコビキA痕と、布目痕も見られる。色調は暗緑灰色を帯びている。

7は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕が見られる。凸面から凹面に向か穿孔されている。色調は緑灰色を帯びている。

8は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕が見られる。色調は白灰色を帯びている。

9は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕と、布目痕も見られる。玉縁下には擦り紐痕も残る。色調は暗青灰色と白灰色のしま状を呈している。

10は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕と、布目痕も見られる。色調は暗オリーブ灰色を帯びている。

11は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。凹面は、コビキB痕が見られる。色調は浅黄色を帯びている。

12は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕が見られる。色調は暗オリーブ灰色を帯びている。

13は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、菊花状の印刻がある。凹面は、コビキB痕と、布目痕も見られる。色調は暗緑灰色を帯びている。

14は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕が見られる。色調はオリーブ灰色を帯びている。

15は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕が見られる。玉縁下には擦り紐痕も残る。色調は緑灰色を帯びている。

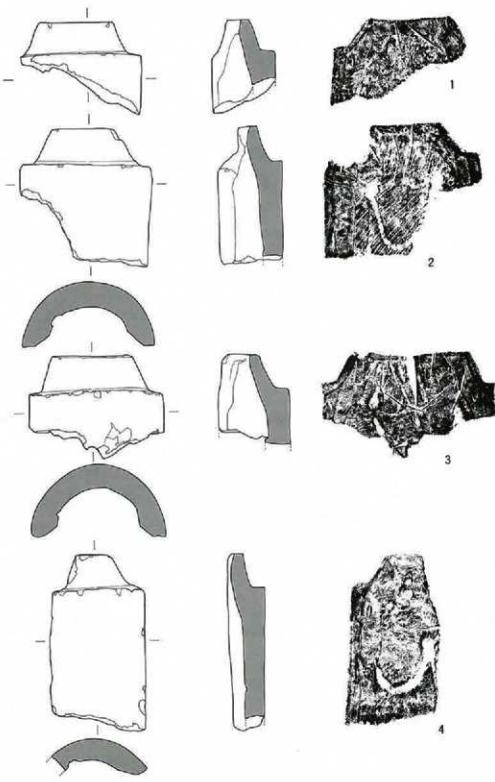
16は、凸面はナテ調整で仕上げている。凹面は、コビキB痕と、布目痕が見られる。粒子が粗く1cmの大の小穂を含み、色調はオリーブ灰色を帯びている。

17は、凸面はナテ調整で仕上げている。凹面は、コビキB痕と、布目痕が見られる。色調はオリーブ灰色を帯びている。

18は、凸面はヘラ状工具での調整が施され、さらにナテ調整で仕上げている。凹面は、布目痕が見られる。色調は暗青灰色を帯びている。

19は、凸面・凹面とも磨耗している。凹面は、布目痕が見られる。色調は暗緑灰色を帯びている。

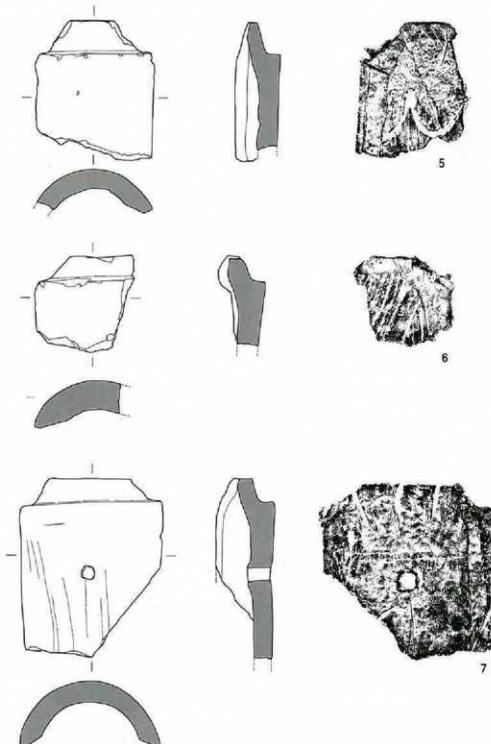
20は、凸面はヘラ状工具での調整が施される。凹面は、コビキB痕が見られる。凸面から凹面に向か穿孔されている。色調はオリーブ灰色を帯びている。



0 10cm

第40図 丸瓦① ($S = 1/4$)

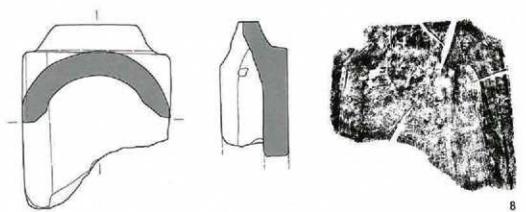
-68-



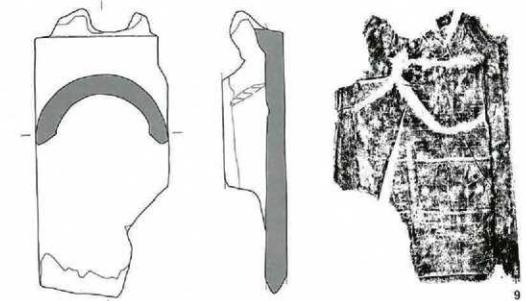
0 10cm

第41図 丸瓦② ($S = 1/4$)

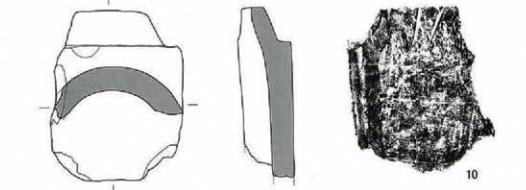
-69-



8



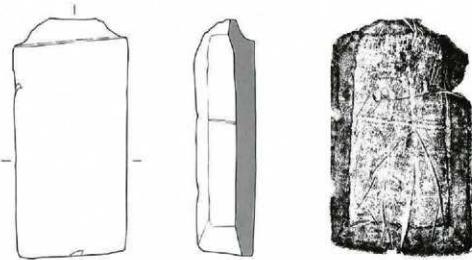
9



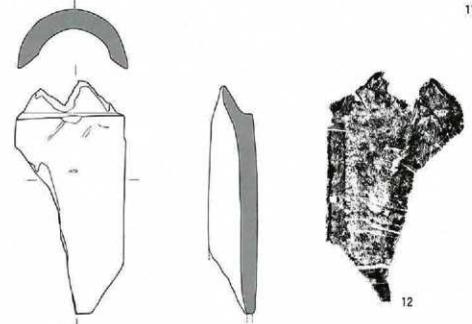
10

0 10cm

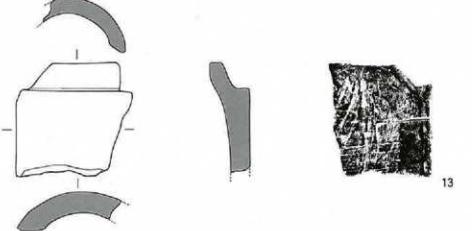
第42図 丸瓦③ (S = 1/4)



11



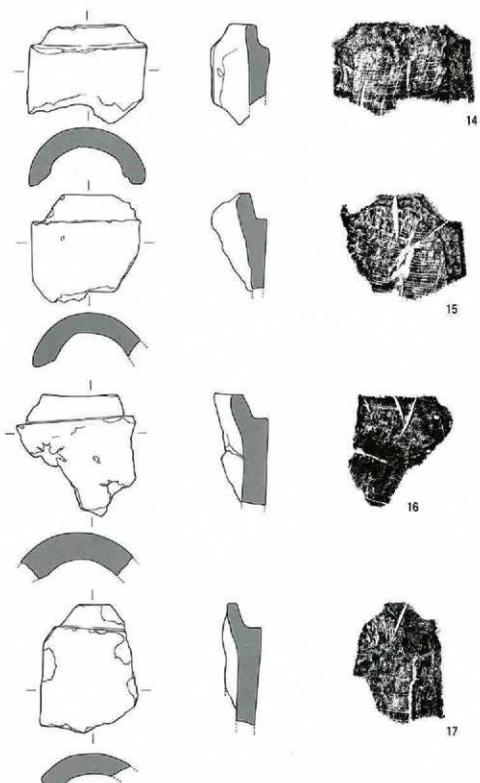
12



13

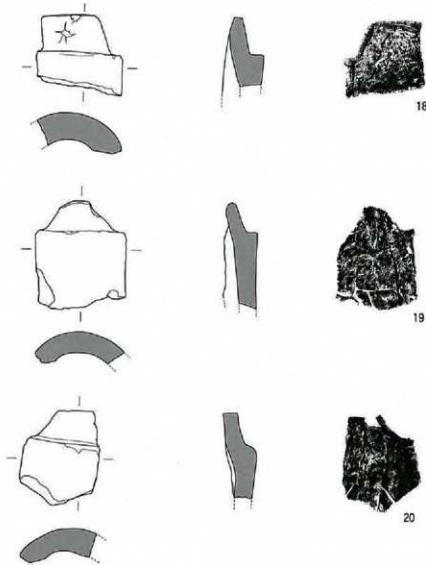
0 10cm

第43図 丸瓦④ (S = 1/4)



第44図 九瓦⑤ ($S = 1/4$)

—72—



第45図 九瓦⑥ ($S = 1/4$)

—73—



c. 軒平瓦

1は、瓦当の左側 $1/4$ を残す以外は欠損している。中心飾りは欠損しており不明である。唐草文は周縁近くしか残らず、上向きに強く渦巻き状に巻く。瓦当上部は面取調整が施され、頸の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、ヘラ状工具でナデ整形が施されている。色調はオリーブ灰色を帯びている。

2は、瓦当の右側 $1/3$ を残す以外は欠損している。中心飾りは不明で、唐草文は2転が残り、均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は両者強く巻く。瓦当上部は面取調整が施され、頸の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、ヘラ状工具によるナデ整形が施されている。色調はオリーブ灰色を帯びている。

3は、瓦当の右側 $1/3$ を残す以外は欠損している。中心飾りは不明で、唐草文は3転が残り、均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は全て強く巻く。瓦当上部は面取調整が施され、頸の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は浅黄色を帯びている。

4は、瓦当の中央部 $1/3$ を残す以外は欠損している。中心飾りは三葉である。唐草文は3転が残り、均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は全て強く巻く。頸の断面は角張っている。瓦当接合部はBで、ヘラ状工具によるナデ整形が施されている。色調は淡黄色を帯びている。

5は、瓦当の中央部 $1/3$ を残す以外は欠損している。中心飾りは三葉である。唐草文は3転が残り、均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は全て強く巻く。頸の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、ヘラ状工具によるナデ整形が施されている。色調は灰オーリーブ色を帯びている。

6は、瓦当の左側半分以外は欠損している。中心飾りは三葉で、上下向きに3転する均等唐草文であるが削られている。頸の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、ヘラ状工具によるナデ整形が施されている。色調は緑灰色を帯びている。

7は、瓦当の左側 $1/3$ を残す以外は欠損している。唐草文は3転が残り、均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は全て強く巻く。瓦当上部は面取調整が施され、頸の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は浅黄色橙色を帯びている。

8は、瓦当部分の周縁部である。文様は不明。瓦当上部は面取調整が施され、頸の断面は角張っており、分厚い頸下部である。瓦当接合部はAで、ヘラ状工具によるナデ整形が施されている。色調はオリーブ灰色を帯びている。

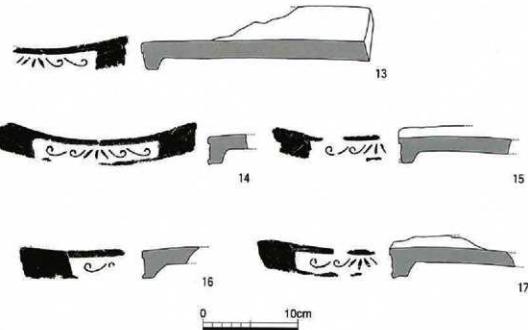
9は、瓦当の右側 $1/3$ を残す以外は欠損している。中心飾りは不明で、唐草文は3転が残り、均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は全て強く巻く。頸の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調はオリーブ灰色を帯びている。



0 10cm

第46図 軒平瓦① (S=1/4)

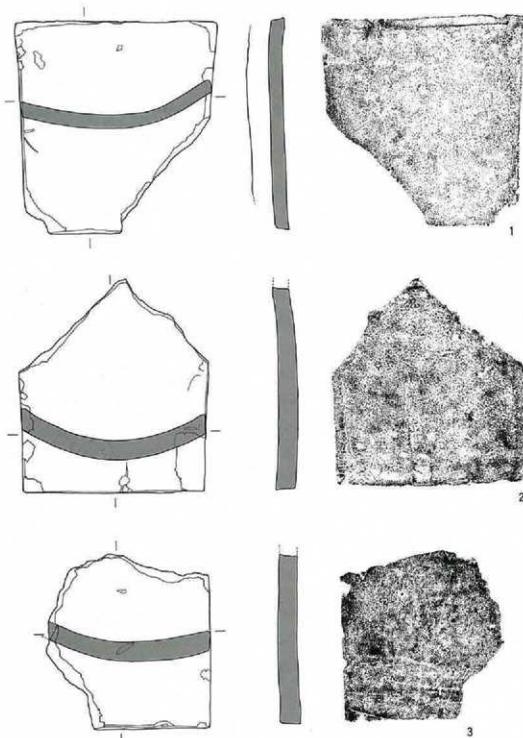
- 10は、瓦当の右側 $1/4$ を残す以外は欠損している。中心飾りは不明で、唐草文は2転が残り、均等唐草文である。唐草の線は太く、それぞれが接していない。残存する唐草文は両者強く巻く。瓦当上部は面取調整が施され、額の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、ヘラ状工具によるナデ整形が施されている。色調は暗オリーブ灰色を帯びている。
- 11は、瓦当の左側半分以外は欠損している。中心飾りは三葉で、上下向きに3転する均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は全て強く巻く。額の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調はオリーブ灰色を帯びている。
- 12は、瓦当の右側半分以外は欠損している。中心飾りは三葉で、唐草文は2転が残り、上向きに2転する均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は両者強く巻く。瓦当上部は面取調整が施され、額の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調はオリーブ黄色を帯びている。
- 13は、瓦当の右側半分以外は欠損しているが、平瓦部は残る。中心飾りは三葉で、唐草文は2転が残り、上向きに2転する均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は両者強く巻く。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。平瓦凸面はヘラ状工具での調整が施される。色調は緑灰色を帯びている。
- 14は、中心飾りは三葉で、唐草文は2転が残り、上向きに2転する均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。1転目は、中心飾の上から伸びて上向きに強く巻く。2転目は上向きに強く巻く。瓦当上部は面取調整が施され、額の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、ヘラ状工具によるナデ整形が施されている。色調は緑灰色を帯びている。
- 15は、瓦当の左側半分以外は欠損している。中心飾りは三葉で、唐草文は2転が残り、上向きに2転する均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は両者強く巻く。額の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は緑灰色を帯びている。
- 16は、瓦当の左側 $1/3$ を残す以外は欠損している。中心飾りは不明で、唐草文は2転が残り、均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は両者強く巻く。額の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は橙色を帯びている。
- 17は、瓦当の左側半分以外は欠損している。中心飾りは三葉で、唐草文は2転が残り、上向きに2転する均等唐草文である。唐草の線は細く、それぞれが接していない。残存する唐草文は両者強く巻く。額の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は灰色を帯びている。



第47図 軒平瓦② (S=1/4)

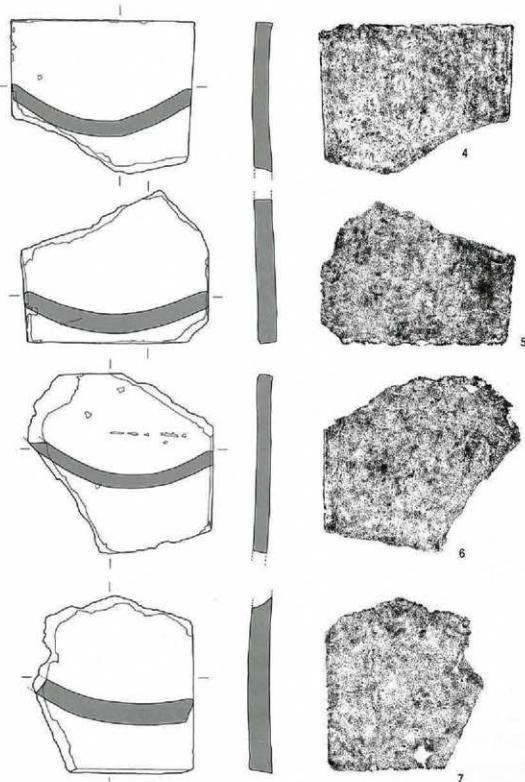
d. 平瓦

- 1は、長さ22cm、尻は1部欠損しているため不明である。厚みは1.5cm。凹面・凸面ともナデ調整で、頭部凹面角は面取調整が施される。色調は灰オリーブ色を帯びている。
- 2は、長さは頭部が欠損しているため不明である。幅は尻で19cm、厚みは2cm。凹面・凸面ともナデ調整である。色調はオリーブ灰色を帯びている。
- 3は、頭・尻部が欠損している。厚みは2cm。凹面・凸面ともナデ調整である。色調はオリーブ灰色を帯びている。
- 4は、頭部が残る。幅は頭で19cm、厚みは1.8cm。凹面・凸面ともナデ調整である。色調は暗灰色を帯びている。
- 5は、尻部が残る。幅は尻で19cm、厚みは1.8cm。凹面・凸面ともナデ調整である。色調は灰オリーブ色を帯びている。
- 6は、頭・尻部が欠損している。厚みは1.5cm。凹面・凸面ともナデ調整である。色調はオリーブ浅黄色を帯びている。
- 7は、頭・尻部が欠損している。厚みは2.3cm。凹面・凸面ともナデ調整である。色調は暗緑灰色を帯びている。



0 10cm

第48図 平瓦① ($S = 1/4$)



0 10cm

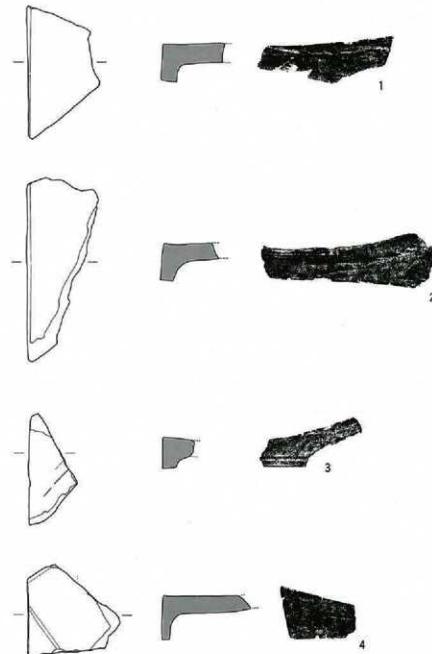
第49図 平瓦② ($S = 1/4$)

e. 開軒平瓦

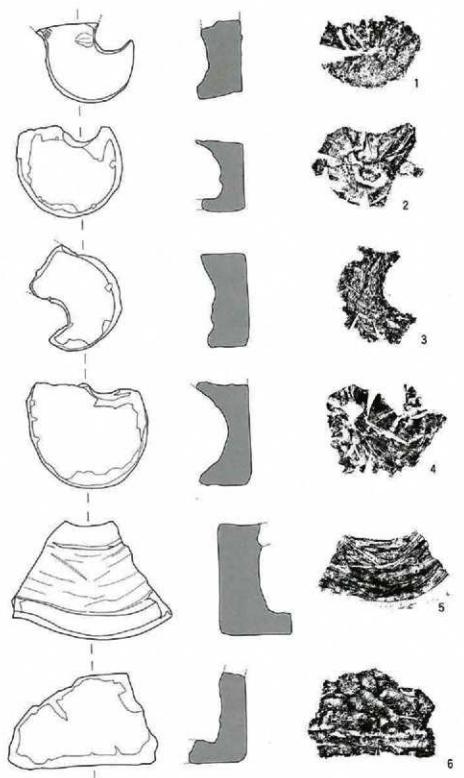
- 1は、瓦当の右側 $1/3$ を残す以外は欠損している。瓦当面は文様もなく、ヘラ状工具でナデ整形が施されている。周縁部は反り上がる。頭の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は浅黄色を帯びている。
- 2は、瓦当の右側 $2/3$ を残す以外は欠損している。瓦当面は文様もなく、ヘラ状工具でナデ整形が施されている。周縁部は反り上がる。頭の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は浅黄色を帯びている。
- 3は、瓦当の右側 $1/4$ を残す以外は欠損している。瓦当面は文様もなく、ヘラ状工具でナデ整形が施されている。周縁部は反り上がる。頭の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は浅黄色を帯びている。
- 4は、瓦当の左側 $1/4$ を残す以外は欠損している。瓦当面は文様もなく、ヘラ状工具でナデ整形が施されている。周縁部は反り上がる。頭の断面は角張っている。瓦当接合部はAで、指ナデ整形が施されている。色調は暗緑色を帯びている。

f. 鬼瓦

- 1は、右側端部で早蕨手状に巻く。縁の厚みは4.5cmで、裏部は周縁を土堤状に残し浅く削り凹みをつける。色調は表で緑灰色、裏はオリーブ灰色を帯びている。
- 2は、右側端部で早蕨手状に巻く。縁の厚みは4.5cmで、裏部は周縁を土堤状に残し浅く削り凹みをつける。色調は暗緑灰色を帯びている。
- 3は、左側端部で早蕨手状に巻く。縁の厚みは4.5cmで、裏部は周縁を土堤状に残し浅く削り凹みをつける。色調は暗青灰色を帯びている。
- 4は、右側端部で早蕨手状に巻く。縁の厚みは6cmで、裏部は周縁を土堤状に残し浅く削り凹みをつける。色調は暗緑灰色を帯びている。
- 5は、左側脚端部で先端部は欠損している。縁の厚みは7cmで、裏部は周縁を土堤状に残し浅く削り凹みをつける。色調は暗緑灰色を帯びている。
- 6は、鬼瓦の縁片である。縁の厚みは6.5cmで、裏部は周縁を高く残し深く凹みをつける。色調は灰オリーブ色を帯びている。
- 7は、鬼瓦の一部と思われるが、断片であるため形状は不明である。中央に一条の突帯をもつ。色調は暗青灰色を帯びている。
- 8は、鬼瓦の縁片である。表面は文様の貼付痕があり、内側に突帯が付く。縁の厚みは5cmで、裏部は周縁を土堤状に残し浅く削り凹みをつける。色調はオリーブ灰色を帯びている。
- 9は、鬼瓦の一部と思われるが、断片であるため形状は不明である。裏は大まかなヘラ削り痕がある。色調は青灰色を帯びている。

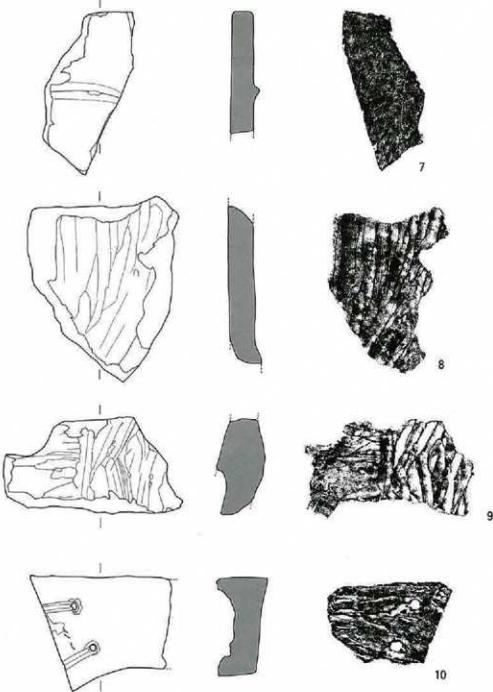


第50図 開軒平瓦 (S = 1/4)



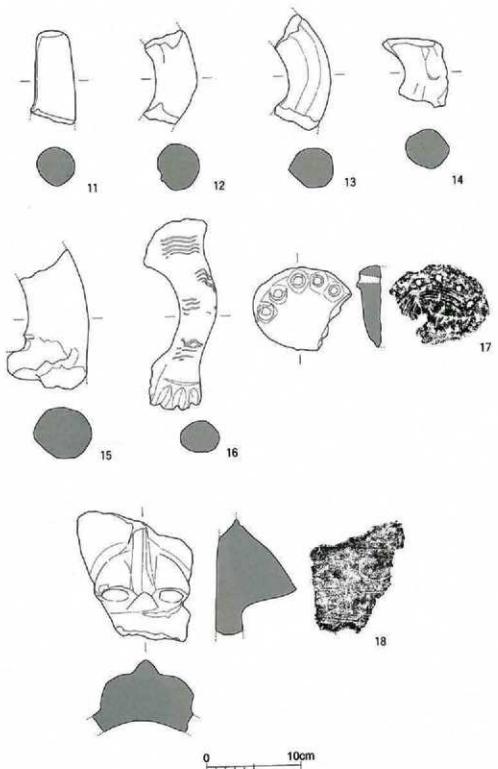
第51図 鬼瓦① ($S = 1/4$)
0 10cm

— 82 —



第52図 鬼瓦② ($S = 1/4$)
0 10cm

— 83 —



第53図 鬼瓦③ ($S = 1/4$)

10は、鬼瓦の一部と思われるが、断片であるため形状は不明である。端に釘穴と思われる穿孔が2ヶ所あり、それぞれ紐状のものを通すためか穿孔から外に溝が掘られる。裏部は周縁を土堤状に残し浅く削り凹みをつける。色調は表がオリーブ灰色、裏が白灰色を帯びている。

11は、鬼瓦の角部と思われるが、断片であるため形状は不明である。先端は玉縁状になる。表面はヘラ状工具でナデ整形が施されている。色調は緑灰色を帯びている。

12~15は、円柱状の一端である。鬼瓦の角部か獣子等の足部の可能性がある。表面はヘラ状工具でナデ整形が施されている。

16は、付根部分に釘穴と思われる穿孔がある。

17は、足部である。本体部分は不明であるが、獣子等の足部の可能性がある。表面は波状の線刻が見られる。足の指は4本である。色調はオリーブ灰色を帯びている。

18は、楕円形の台に5ヶ所の穿孔がある。文様の一端かと思われるが不明である。色調は表がオリーブ灰色、裏が白灰色を帯びている。

19は、鬼瓦の鼻部である。外鼻孔が2つ施されている。色調はオリーブ灰色を帯びている。

g. 鬼瓦

1は、鰭部である。U字型の工具による沈線でウロコを表現している。鰭条部は中心から均等に3本のノコギリ状の隆起があり、色調はオリーブ灰色を帯びている。

2は、鰭部である。U字型の工具による沈線でウロコを表現している。鰭条部は中心から均等に4本のノコギリ状の隆起があり、釘穴と思われる穿孔がある。色調はオリーブ灰色を帯びている。

3は、胴体の一部でウロコの沈線がある。色調は灰白色を帯びている。

4は、胴体の一部でウロコの沈線があり、釘穴と思われる穿孔がある。色調はオリーブ灰色を帯びている。

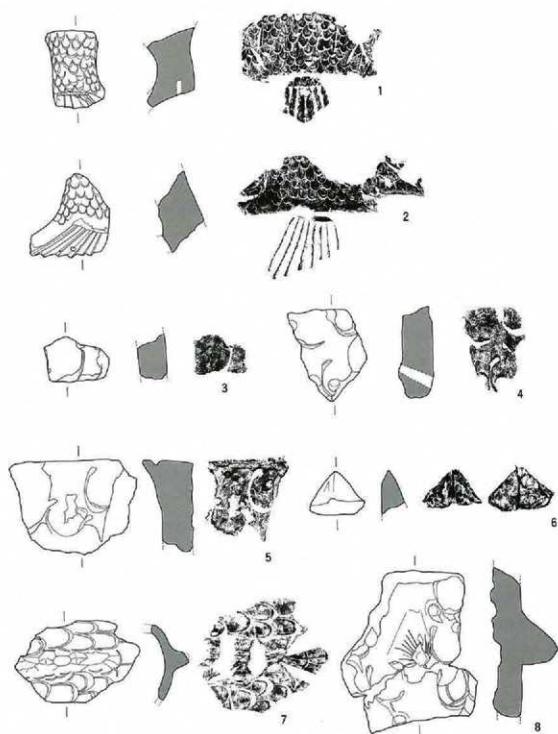
5は、胴体の底部と思われる。U字型の工具による沈線でウロコを表現している。裏面は指ナデ調整が行われる。色調は暗オリーブ灰色を帯びている。

6は、背鰭である。菱形の四角錐である。色調は暗オリーブ灰色を帯びている。

7は、背鰭部である。胴体はU字型の工具による沈線でウロコを表現している。背鰭はヘラ状工具で調整が行われる。裏面は指ナデ調整が行われる。色調はオリーブ灰色を帯びている。

8は、背鰭部である。胴体はU字型の工具による沈線でウロコを表現しており、釘穴と思われる穿孔が3ヶ所ある。背鰭の表面にクシ書きによる細い縦線が見られる。裏面は指ナデ調整が行われる。色調は青灰色を帯びている。

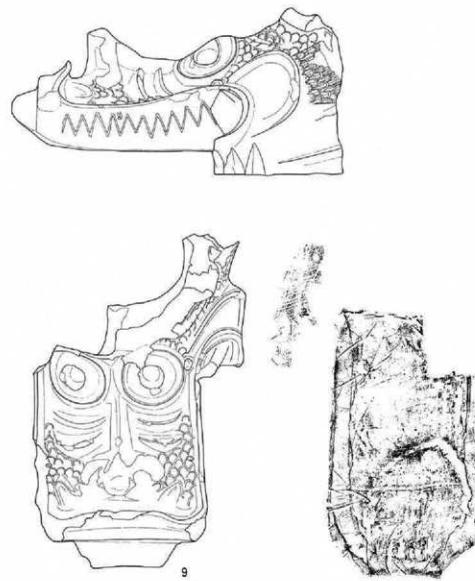
9は、頭部である。顎の表面にはU字型の工具による沈線でウロコを表現しており、目の横に釘穴と思われる穿孔が2ヶ所ある。また鼻の横端の左右にも小さい穿孔がある。目の下にはシワを表現しており、左右の側面には口をノコギリ状に線刻して表現している。先端には玉縁部があり、凹面は、コビキB痕と玉縁下には然り紐痕も残る。色調はオリーブ灰色を帯びている。



0 10cm

第54図 鱗瓦① ($S = 1/4$)

— 86 —



0 10cm

第55図 鱗瓦② ($S = 1/4$)

— 87 —

(4) キリシタン関係

出土した、キリシタン関係遺物は十字架5点、花十字紋瓦2点である。花十字紋瓦の出土は長崎市内に限定されており、島原半島からの出土は初めてである。

a. 十字架

1は、十字架をレリーフしたペンダント状のものと思われる。板状の鉛に十字架が付いたものである。鋳型に鉛を溶かし込んだ状態で、十字架製作過程の途中のようであるかと思われたが、十字架部の縦軸が1.9cm、横軸が1.3cmであり、出土した他の十字架と比較するとあまりにも小さいため、十字架単体での使用は考えにくい。下部は変形しているが、上部縁に残るカーブを復元してみると、円形ないし椭円形となり上部に穿孔を施すと、ペンダントとして利用できる。裏面は無文である。

2は鉛製で、角柱状の縱横軸となる。縱軸は2.75cm、横軸は2.09cmである。縱軸の下部に紐を通すためか穿孔を施す。両面とも文様はない。

3は鉛製で、円柱状の縱横軸となる。縱軸は2.78cm、横軸は1.98cmである。縱軸は紐を通すためのかん下筒状になる。

4は鉛製で、型作りと思われる。角柱状の縱横軸となるが、上部は欠損している。残存する縱軸は2.83cm、横軸は2.35cmである。縱軸の下部に紐を通すためか穿孔を施す。

5は鉛製で、円柱状の縱横軸となる。縱軸は曲がっており約2.47cm、横軸は約2.42cmである。縱横軸の先端に彫込みをもち、下縦軸に紐を通すためか穿孔を施す。

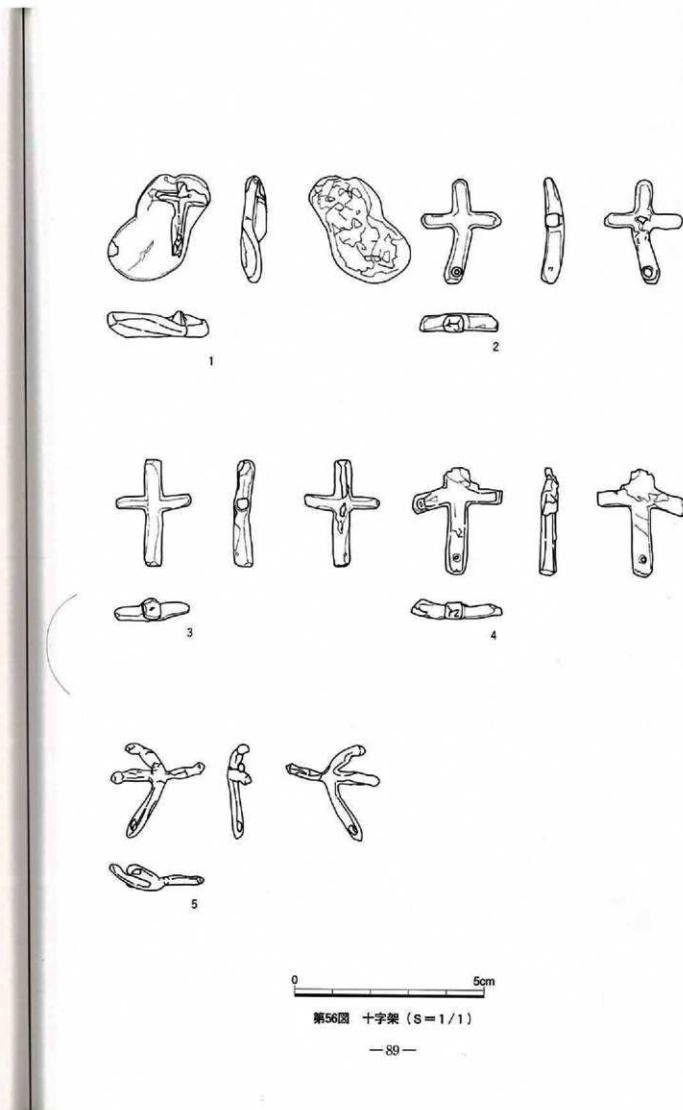
b. 花十字紋瓦

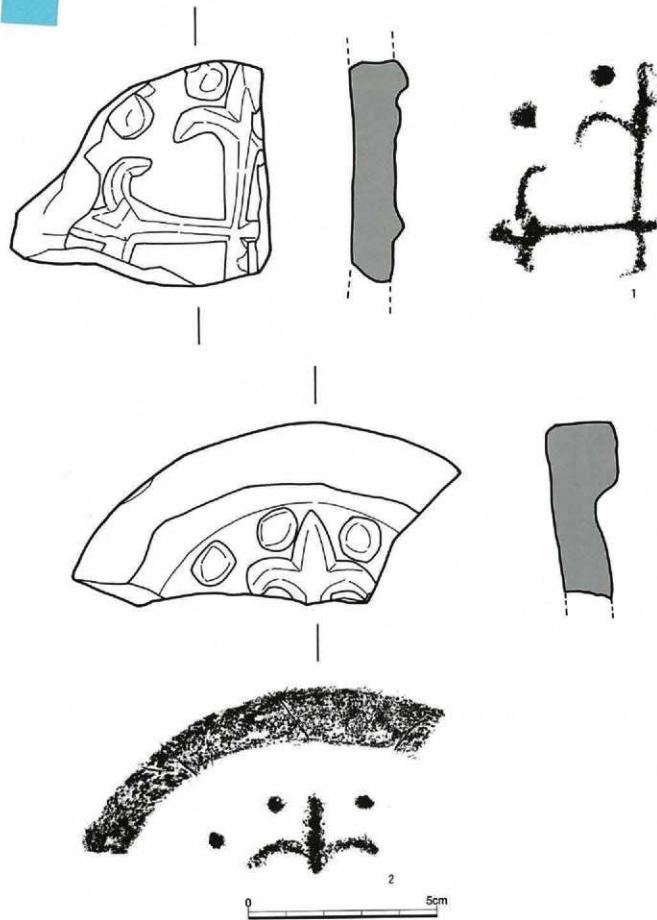
1は、瓦当面に花十字紋の模様を有する軒丸瓦である。瓦当面全体の1/4を残す以外は欠損している。2本の花弁模様と2個の珠文が残る。花弁の間に珠文が3個を配すタイプである。分類としてⅡB 3に属する。(宮下2003) 色調は青灰色を帯びている。

2は、瓦当面に花十字紋の模様を有する軒丸瓦である。瓦当面全体の1/5を残す以外は欠損している。1本の花弁模様と3個の珠文が残る。花弁の間に珠文が3個を配すタイプである。分類としてⅡB 3に属する。(宮下2003) 色調はオリーブ黄色を帯びている。

【引用・参考文献】

- ・長崎市教育委員会2002「金原町遺跡」
- ・長崎市教育委員会2003「勝山町遺跡」
- ・宮下雅史2003「花十字紋考」「西海考古」5号 西海考古同人会

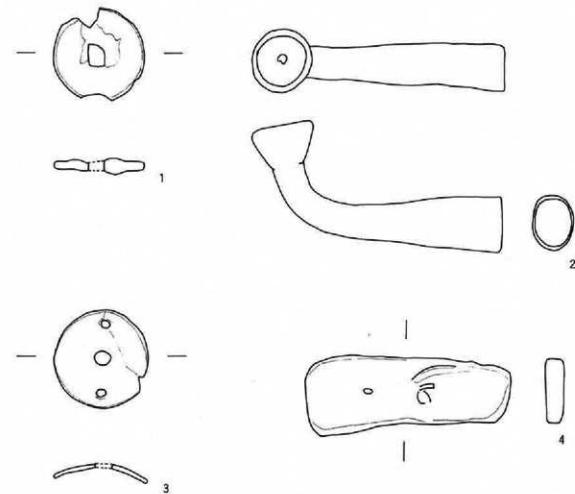




第57図 花十字紋瓦 ($S = 1/1$)

(5) 金属製品

- 1は、鏡である。表裏の腐食が激しいため文様の判断が出来ない。
- 2は、通管の瓶首部である。表面に文様は無い。
- 3は、円形で中央とその両脇に孔を開けたものである。径は2.5cm、中央の孔径は0.4cm、両サイドの孔径は0.25cm、厚みは0.1cmである。用途不明。
- 4は、鉛製である。長方形板状のもので穿孔が施される。表裏面に文様は無い。用途不明。



第58図 金属製品 ($S = 1/1$)

第4章 まとめ

原城跡の発掘調査は、平成4年度から実施しており今回で第9次調査となる。これまでに本丸調査区において多くの遺物が出土しており、特に十字架、メダイ、ロザリオの珠などのキリスト教関係遺物は島原の亂にまつわる資料である。また、多くの石垣の検出によってその年代と、宣教師の報告書の記録から1599年頃から1604年頃の築城であることが分かった。

今回の調査では、本丸から虎口の検出ができる、原城のプランがほぼ解明できた。

本丸A区に設定したTP56から検出した虎口は、本丸側から見て右側の石垣を張り出した外掛形の出入口で、張り出した石垣は幅約5m、長さ約11mを測り、開口部の幅は約7.5mを測る。虎口内部床面に7個の礎石と1個の礎石跡を検出した。礎石の配置から門は、東西に張り出した石垣から本丸側石垣に渡る構門形式と思われる。瓦もたくさん出土している事から門は瓦葺の建物のようである。建築物としての門は、張り出した石垣の内側にあり正面に門の侧面を見せた建ち位置である。出入口階段部分はかなり破壊されているが、幅約6m、2段の階段を検出している。築城当時はさらに数段あったと思われるが、破壊がひどく詳細は不明である。

この虎口の検出により、本丸の北側に位置する虎口空間帯の概要が判明し、原城の以外な姿が出現した。本丸Dの最初の門から石垣や城道を幾つも屈曲させた、防備厳重な巨大な虎口空間帯を原城は備えており、その大きさは本丸面積の約50%に値する。また、床面からは王砂利を検出し、門の周囲には玉砂利を撒き詰めていたと思われる。本丸東側で検出した虎口では、礎石と階段は存在しているが、玉砂利まで撒き詰めていなかった。このことから、今回検出した虎口は、他の門とは違う本丸正面の門としていたことが伺える。虎口外側の石垣には巨石が用いられており、これは石工たちの伝統的用語である「鏡積み」と称される技法によるものであり、城内では特に正面性の強い場所で限定的に用いられるものである。本丸の北側に位置する虎口空間帯外周を網羅する石垣にもこの「鏡積み」が多く見られ、この巨大な虎口空間帯は原城本丸の正面玄関とみなされて、最も本丸寄りの門は特に見栄と格式を重視した門であったことが考えられる。

このような虎口空間帯のプランを見てみると、織田信長の城や、それに続く豊臣秀吉の城、さらにはその家臣たちの城につぎつぎに取り入れられ、全国に広まっていった当時最新の城郭プランであった。また、調査によって検出した石垣もその形態から、慶長年間前期の豊臣系城郭の影響を色濃く受けた石垣であることが分かった。

九州地方にあっては未だ見ることがなかった築城技術であったが、豊臣秀吉の九州統一をかわきりに文禄・慶長の役による名護屋城や、後城の築城によって有馬晴信は自分の城にその技術を用いた。つまり、豊臣系城郭の新技術である石垣を使用した城を築城したのである。これは、明応5年以降あつた中世の城を改修したのではなく、全く新規に築城したと思われる。その完成した城は、検出した遺構などから推測すると天守相当の橹を備えており、近世的な城郭としての性格が強いものであった。

花十字紋瓦

平成12年度の調査において、本丸D区に設定したTP61から出土した。瓦は、破却された大枠形虎口の埋め込まれた石垣の中から人骨と共に出土した。

出土した花十字紋瓦片は、軒丸瓦と呼ばれる瓦の破片であり、瓦当面に花十字紋の模様を有する瓦である。瓦は、瓦当面全体の約4分の1程度の瓦片であり、2本の花模様と2個の珠文が確認できる。丸瓦部分は欠損し瓦当面のみである。胎土は粘土質の灰色を呈し、表面には砂質の粒子が多く見られる。

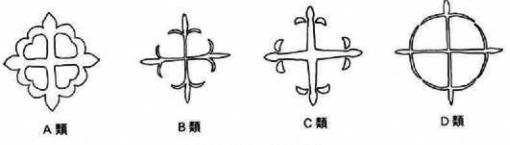
花十字紋瓦が出土した遺跡は、県内では長崎市内の万才町遺跡（県庁新別館）、万才町遺跡（長崎町年寄高島家跡）、万才町遺跡（ミゼリコルディア跡）、興善町遺跡（新町乙名八尾家跡）、興善町遺跡（宿老見家跡）、栄町遺跡（高見家跡）、桜町遺跡、金屋町遺跡、勝山町遺跡（サント・ドミニゴ教会跡）などから出土しているが、16世紀末キリスト文化の中心地であった有馬の地では初めての出土になる。また、戦国時代のキリスト大名の居城からの出土は全国でも初めてである。

花十字紋瓦は、1580年（天正8）のセミナリヨの設立から1613年（慶長18）のキリスト教禁教令が出されるまでの間、長崎市では万才町遺跡のミゼリコルディア（福祉事業団）、勝山町遺跡のドミニゴ教会などキリスト教関係施設の屋根瓦に使用されていた。

これらの花十字紋瓦について、宮下雅史氏が文様形態の分類を行われた。文様は、花十字紋とその周囲に配された連珠文で構成される。配置としては、花十字を圓文で囲み、その外側に連珠が配されるものと、圓文が無いものの2種に分類される。花十字の形態によってA～D類の4種（註）、連珠文は、8個・12個・16個・20個の4種類に分類され、全7種の文様形態が存在していることが確認されている。（宮下2003）

島原半島におけるキリスト教関係施設は半島南部において、セミナリヨ・コレジオなどの施設があったが建物跡など今まだ検出されていない。今回原城での出土は、キリスト大名である有馬晴信が築城した城からの出土であり、この瓦の使用施設・場所は不明であるが、出土した場所は本丸に入る最初の大きな門跡で、その施設に使用されていた可能性もある。宣教師の「1604年度日本準管区年報」によれば、晴信の新城が完成しキリスト教による祝福を受けたことが書かれている。このことから、原城を象徴するような施設に使用されていたことが推定されるが、出土した花十字紋瓦片の断面がかなり磨耗していることから、他に出土している瓦片の断面とは異なる様相であるため疑問が残るところである。また、花十字紋瓦の生産地や生産者に関しては一切不明であるため、今後島原半島での検出を期待し、長崎市出土瓦との比較研究を通じ解明できれば幸いである。

註



参考文献

- 五野井隆史 1980 「有馬信の新城経営と原城について」『キリストン文化研究会報』
- 長崎市教育委員会 1992 『長崎市歴史裁判所敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1992 『朝日新聞社長崎支局敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市教育委員会 1995 『万才町道路 長崎府新洲館替えに伴う発掘調査報告書』 長崎市文化財調査報告書 第123号
- 南有馬町教育委員会 1996 『原城跡』南有馬町文化財調査報告書 第2集
- 織豊期城郭研究会 1996 『織豊期城郭の石垣』『織豊城郭 第3号』
- 外山幹夫 1997 『肥前 有馬一族』新人物往来社
- 織豊期城郭研究会 1999 『織豊期城郭の虎口』『織豊城郭 第6号』
- 長崎市教育委員会 1999 『興善町道路 東邦生命保険第2長崎ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 南有馬町 2000 『原城発掘』 墓碑 石井進・服部英雄 新人物往来社
- 長崎市教育委員会 2002 『金剛町道路 オフィスマネーション側ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市教育委員会 2003 『勝山町道路 長崎市桜町小学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 宮下雅史 2003 『花十字紋瓦考』「西海考古」第5号 西海考古同人会
- 長崎県教育委員会 2004 『長崎奉行所跡卯町道跡 歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(上)』
- 長崎県文化財調査報告書 第177号

第1表 貿易磁器観察表①

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	碗	—	—	—	龍泉窯系	14C後～15C中	56	
2	碗	—	—	—	龍泉窯系	14C後～16C	59	
3	皿	—	8.5	4.1	龍泉窯系	14C～15C前	56	
4	香炉	—	4.0	—	龍泉窯系	14C後～16C	56	
5	皿	—	5.5	—	龍泉窯系	13C～14C	59	口秀
6	皿	—	4.5	3.3	福建広州系	16C後～17C初	58	(外)菊舟形
7	小皿	—	—	2.0	福建広州系	16C後～17C初	63	(外)輪輪袖
8	小皿	—	—	—	福建広州系	16C後～17C初	56	(外)輪花状
9	小皿	—	—	—	福建広州系	16C後～17C初	56	(外)菊花形
10	小皿	—	—	—	景德鎮系	16C後～17C初	56	
11	小皿	—	—	—	景德鎮系	16C後～17C初	56	(見込み)蝶/目状
12	小皿	—	—	—	景德鎮系	16C後～17C初	56	(見込み)馬
13	小皿	—	2.4	—	景德鎮系	1600～1630	S14	
14	小皿	—	2.9	—	景德鎮系	1600～1630	56	(見込み)青海波(底)文字鉢
15	小皿	—	—	—	景德鎮系	1590～1630	56	
16	碗	—	—	—	景德鎮系	1600～1630	52	(底)文字鉢
17	碗	—	—	—	景德鎮系	1600～1630	56	(見込み)文字鉢(底)初段付着
18	碗	—	4.6	—	泉州窯系	16C後～1630	56	(見込み)草花文(底)初段付着
19	碗	—	4.8	—	泉州窯系	16C後～1630	56	(見込み)青花文(底)初段付着
20	碗	—	4.0	5.3	泉州窯系	16C後～1630	56	(見込み)青花(底)初段付着
21	碗	—	4.6	—	泉州窯系	16C後～1630	S14	(見込み)青海波(底)初段付着
22	碗	—	4.5	—	泉州窯系	16C後～1630	56	(見込み)青花(底)初段付着
23	碗	—	6.0	—	泉州窯系	16C後～1630	56	(見込み)十字花文
24	碗	—	4.9	—	泉州窯系	16C後～1630	56	(見込み)蛇/目状輪脚
25	碗	—	—	—	泉州窯系	16C後～1630	58	(見込み)蛇/目状輪脚
26	碗	—	4.5	—	泉州窯系	16C後～1630	56	
27	碗	—	—	—	景德鎮系	16C末～17C初	56	(外)色絵瓶
28	碗	—	—	—	景德鎮系	1590～1630	50	(外)龍文
29	碗	—	—	—	福建広州系	16C後～1630	59	(外)草花文
30	碗	—	—	—	福建広州系	16C末～1630	54	(外)龍文
31	碗	—	—	—	福建広州系	16C末～1630	56	
32	碗	—	—	—	泉州窯系	16C末～17C前	56	
33	碗	—	—	—	景德鎮系	1590～1630	50	(外)花文
34	碗	—	—	—	泉州窯系	1590～1630	56	(外)龍文
35	皿	—	5.4	—	景德鎮系	16C前～16C中	56	(見込み)草木・鳥
36	皿	—	—	—	景德鎮系	16C前～16C中	50	(見込み)草木・鳥
37	皿	—	—	2.6	景德鎮系	16C前～16C中	50	(見込み)草木・鳥
38	皿	—	—	—	景德鎮系	1600～1630	S14	(見込み)草花文
39	皿	—	—	—	景德鎮系	1590～1630	56	(見込み)人物(底)初段付着、面取
40	皿	—	—	—	景德鎮系	1590～1630	56	(見込み)人物(底)初段付着、面取
41	皿	—	—	2.2	景德鎮系	1590～1630	56	(見込み)人物(底)面取
42	皿	—	—	—	景德鎮系	16C末～17C初	50	(見込み)人物(底)字路
43	皿	—	—	—	泉州窯系	1600～1630	56	(見込み)草花(底)初段付着
44	皿	—	—	—	景德鎮系	1590～1630	56	(見込み)草花(底)初段付着
45	皿	13.4	7.4	3.1	景德鎮系	16C前～16C中	63	(見込み)草花(底)初段付着
46	皿	—	8.0	2.8	景德鎮系	16C末～1630	56	(見込み)草花(底)初段付着
47	皿	—	6.8	2.8	景德鎮系	16C前～16C中	59	(見込み)龍文(底)右唐草文
48	皿	—	—	—	泉州窯系	16C末～1630	56	(見込み)連弁
49	皿	—	—	—	景德鎮系	16C中～17C	56	(見込み)文様
50	皿	—	—	—	景德鎮系	1600～1630	56	(見込み)草花
51	小皿	—	—	2.0	景德鎮系	16C末～17C初	56	(見込み)文様
52	皿	—	—	—	景德鎮系	1590～1630	50	(内)花文
53	皿	—	—	—	景德鎮系	16C	56	
54	皿	—	—	4.6	景德鎮系	16C末～17C初	56	
55	皿	—	—	—	泉州窯系	16C末～17C初	56	
56	大皿	—	—	—	泉州窯系	16C末～17C初	56	青花大皿(見込み)草木(底)初段付着
57	皿	—	—	—	福建龍泉系	17C前	56	凡須赤絵(底)初段付着
58	皿	—	—	—	福建龍泉系	17C前	56	凡須赤絵(底)初段付着
59	皿	27.1	13.8	4.7	泉州窯系	17C前	56	凡須赤絵(底)初段付着
60	水滴	2.1	3.1	5.8	景德鎮系	1610～1630	56	(上部)絞糸しあり

第2表 貿易磁器觀察表②・貿易陶器觀察表・國產磁器觀察表

貿易磁器②

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
61	蓋	6.6	4.9	—	景德鎮系	1590~1630	56	(表)青花波文、花文
62	小壺	—	3.8	—	湖州窯系	16C末~17C前	56	(外)菊文、龍
63	急須	—	6.5	—	景德鎮系	16C末~1630	S14	(外)花草文、連弁文
64	瓶	—	—	—	福臨窯系	16C末~17C前	56	(外)草花文
65	瓶	—	—	—	景德鎮系	16C末~1630	59	(外)連弁文
66	壺	—	—	—	景德鎮系	16C末~17C初	56	瑠璃釉
67	壺	—	—	—	中国	17C	56	
68	壺	6.8	6.5	17.5	台湾	16C	56	アンピニ壺(側面)上下の接合部
69	碗	—	—	—	朝鮮	16C	56	
70	碗	—	—	—	朝鮮	16C	56	
71	碗	—	—	—	朝鮮	16C	56	
72	碗	—	—	—	朝鮮	16C	56	
73	重	—	—	—	朝鮮	16C	56	上砂目
74	重	—	—	—	朝鮮	16C	56	上下砂目
75	皿	—	—	—	朝鮮	16C	56	
76	皿	—	6.0	—	朝鮮	16C	56	上下砂目
77	瓶	8.5	—	—	朝鮮	16C	56	
78	瓶	—	7.1	—	朝鮮	16C	59	
79	小壺	—	—	—	朝鮮	16C	62	

貿易陶器

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	壺	—	—	—	中国	16C~17C初	56	黒引三彩(白地・青花・緑彩)・(外)重文
2	壺	—	—	—	中国	16C~17C初	56	黒引三彩(白地・青花・緑彩)・(外)重文
3	壺	—	—	—	中国	16C~17C前	56	
4	壺	—	—	—	中国	16C~17C前	56	
5	壺	—	—	—	中国	16C~17C前	56	(外)緑釉
6	壺	—	—	—	中国	16C~17C前	56	(内・外)梅輪
7	瓶	—	6.0	—	ペルナム	16C~17C前	56	(外)緑釉
8	鉢	—	—	—	ペルナム	16C~17C前	50	(内)褐釉
9	土器	—	—	—	ペルナム	16C~17C前	56	ハンネラ土器
10	土器	—	—	—	ペルナム	16C	56	ハンネラ土器・叩き文
11	土器	—	—	—	ペルナム	16C	56	ハンネラ土器・叩き文
12	土器	—	—	—	ペルナム	16C	56	ハンネラ土器・格子状の文様
13	鉢	—	—	—	タイ	16C末~17C前	56	
14	鉢	—	—	—	タイ	16C末~17C前	56	
15	壺	—	—	—	タイ	16C末~17C前	56	
16	壺	—	—	—	タイ	16C	56	
17	瓶	—	—	—	タイ	16C	59	青磁反耳瓶
18	壺	—	—	—	東南アジア	16C	56	

國產磁器

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	小壺	—	—	—	肥前	1630~1640	59	
2	小壺	—	2.4	—	肥前	1630~1640	56	(外)花草文
3	小壺	—	—	—	肥前	1610~1630	56	(外)文様
4	碗	—	—	—	肥前	1610~1630	59	(外)菊文
5	碗	—	—	—	肥前	1610~1630	56	
6	皿	—	—	3.4	肥前	1610~1630	56	上砂目・(見込み)蛇目状熱溶ぎ
7	皿	—	—	—	肥前	1610~1630	56	(見込み)蛇目状熱溶ぎ・砂目跡
8	皿	—	—	—	肥前	1610~1630	63	(内)文様
9	皿	—	—	—	肥前	1610~1630	56	(底)砂付蓋
10	皿	—	—	—	肥前	17C前	56	
11	蓋	3.7	2.6	—	肥前	17C前	56	(外)花文
12	碗	—	4.9	—	肥前	17C前	56	(底)砂付蓋
13	瓶	—	—	—	肥前	17C前	56	
14	瓶	—	—	—	肥前	17C前	56	

第3表 國產陶器觀察表①

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	小輪	—	—	3.1	肥前	1590~1630	56	(見込み)無被瓶
2	小輪	—	—	3.5	肥前	1600~1630	56	無被瓶
3	小輪	—	—	3.2	肥前	1600~1630	56	下砂目
4	碗	—	—	3.8	肥前	1600~1630	56	上胎土目
5	碗	—	—	4.0	肥前	1600~1630	63	
6	碗	—	—	4.1	肥前	1600~1630	56	
7	碗	—	—	4.5	肥前	1600~1630	56	
8	碗	—	—	4.7	肥前	1600~1630	56	
9	碗	—	—	4.5	肥前	1600~1630	56	
10	碗	—	—	4.2	肥前	1600~1630	56	
11	碗	—	—	—	肥前	1600~1630	56	
12	碗	—	—	4.9	7.1	肥前	1600~1630	50
13	碗	—	—	—	肥前	1600~1630	56	
14	碗	—	—	4.4	肥前	1600~1630	56	
15	碗	—	—	4.4	肥前	1600~1630	56	
16	碗	—	—	—	肥前	1600~1630	56	
17	碗	—	—	4.0	7.4	肥前	1600~1630	50
18	碗	—	10.8	4.5	7.3	肥前	1600~1630	56
19	碗	—	—	5.3	肥前	1600~1630	56	天目形
20	碗	—	—	4.5	肥前	1600~1630	56	
21	碗	—	—	—	肥前	1590~1630	56	
22	碗	—	—	—	肥前	1600~1630	56	
23	碗	—	—	—	肥前	1600~1630	56	(内)鉄輪
24	碗	—	—	4.6	肥前	17C前	56	
25	碗	—	—	—	肥前	17C前	S14	綠釉
26	碗	—	—	—	肥前	17C前	56	天目形
27	重	—	—	4.9	肥前	1590~1630	56	
28	重	—	—	4.5	肥前	1590~1630	56	
29	重	—	—	4.5	肥前	1600~1630	56	
30	重	—	—	4.3	肥前	1600~1630	56	上砂目
31	重	—	—	5.1	4.7	肥前	1600~1630	56
32	重	—	—	4.8	—	肥前	1600~1630	56
33	重	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上下砂目
34	重	—	—	4.6	—	肥前	1600~1630	56
35	重	—	—	4.7	—	肥前	1600~1630	56
36	重	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上砂目
37	重	—	—	4.5	—	肥前	1600~1630	56
38	重	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上砂目
39	重	—	—	5.1	—	肥前	1600~1630	56
40	皿	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上砂目
41	皿	—	—	3.9	—	肥前	1600~1630	56
42	皿	—	—	5.1	—	肥前	1600~1630	56
43	皿	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上砂目
44	皿	—	—	4.8	—	肥前	1600~1630	56
45	皿	—	—	4.2	—	肥前	1600~1630	56
46	皿	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上砂目
47	皿	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上砂目
48	皿	—	—	—	肥前	1590~1630	56	(見込み)鉄砂文
49	皿	—	—	—	肥前	17C前	56	下砂目・(見込み)白土象嵌
50	皿	—	—	5.1	—	肥前	17C前	56
51	皿	—	—	—	肥前	17C前	56	(見込み)文様・目跡
52	皿	—	—	—	肥前	17C前	56	
53	皿	—	—	5.4	—	瀬戸美濃	16C後	59
54	皿	10.5	4.9	1.9	—	瀬戸美濃	16C後	54
55	皿	11.3	5.7	1.7	—	瀬戸美濃	16C後	63
56	皿	—	—	1.8	—	瀬戸美濃	16C後	63
57	皿	—	—	—	—	瀬戸美濃	16C後	50
58	皿	—	—	—	—	瀬戸美濃	16C後	56
59	皿	—	—	—	肥前	1590~1630	56	
60	皿	—	—	—	肥前	1590~1630	56	(内)鉄輪
61	皿	—	—	7.3	—	肥前	1590~1630	54
62	皿	—	—	6.2	—	肥前	1590~1630	56
63	皿	—	—	—	肥前	1600~1630	56	上胎土目
64	皿	—	—	9.7	—	肥前	1590~1630	56

第4表 国産陶器観察表②・瓦質土器

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年 代	出土地点	備 考
65	皿	-	8.7	-	肥前	1590~1630	59	
66	皿	-	5.9	-	肥前	1600~1630	56	上下砂目
67	皿	-	-	-	肥前	1590~1630	56	(見込み) 略狭の垂れ
68	皿	-	-	-	肥前	1590~1630	56	(見込み) 附耳、茎部、足部で文様
69	皿	-	11.2	-	肥前	1590~1630	56	(見込み) 略狭で文様
70	皿	-	6.9	-	肥前	1590~1630	50	上下砂目 (見込み) 略狭で文様
71	皿	-	6.5	-	肥前	1590~1630	56	上下砂目 (見込み) 略狭で文様
72	皿	-	6.9	-	肥前	1590~1630	56	上下砂目 (見込み) 略狭で文様
73	皿	-	-	-	肥前	1590~1630	56	(内) 見込み 略狭で文様
74	皿	-	8.5	-	肥前	17C 前	56	影手・下見手・(見込み) 刻毛目
75	皿	-	-	-	肥前	17C 前	56	二折手・(見込み) 扇形目、茎部・花文
76	皿	-	7.1	-	肥前	17C 前	56	上下砂目 (見込み) 刻毛目
77	皿	-	2.9	-	肥前	17C 前	56	(見) 刻毛目 (裏) 織目づく
78	鉢	-	-	-	肥前	17C 前	66	(内) 外) 銀鉢
79	鉢	-	-	-	肥前	1600~1630	69	(外) 銀鉢で支撑
80	水注	-	-	-	肥前	1590~1630	56	
81	瓶	-	-	-	肥前	17C	56	
82	瓶詰	-	-	-	肥前	17C	56	御手13本
83	瓶詰	-	8.4	-	肥前	17C	56	甚希底
84	瓶詰	-	-	-	肥前	17C	56	甚希底・脚4本
85	瓶詰	-	-	-	肥前	17C	56	脚4本 (底) 系切口痕
86	瓶詰	-	-	-	肥前	1580~1610	59	脚4本 (底) 系切口痕
87	瓶詰	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	(内) 外) 銀鉢 (底) 素敷付着
88	瓶詰	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	甚希底・(内) 外) 銀鉢
89	瓶詰	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	甚希底
90	瓶詰	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	(内) 外) 銀鉢
91	瓶	-	5.1	-	肥前	16C末~17C 前	56	(底) 系切口痕
92	瓶	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	(内) 外) 銀鉢 (底) 系切口痕
93	瓶	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	(外) 銀鉢 (底) 系切口痕
94	瓶	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	甚希底
95	瓶	-	-	-	肥前	17C 前	56	甚希底 (見込み) 脚の盛り) 分付着
96	瓶	-	7.6	-	肥前	17C 前	56	甚希底・(外) 銀鉢 (見込み) 織目成形張
97	瓶	-	-	-	肥前	17C 前	56	甚希底・(内) 外) 銀鉢
98	瓶	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	
99	瓶	-	-	-	肥前	16C末~17C 前	56	(外) 鉄輪 (P) 織目成形張
100	瓶	-	-	-	肥前	17C 前	56	二折手・上土手 (外) 脚目、花文
101	壺	-	-	-	肥前	16C末~17C 初	56	(内) 叫き痕
102	壺	-	-	-	肥前	16C末~17C 初	56	
103	壺	-	-	-	肥前	16C末~17C 初	56	
104	壺	-	-	-	肥前	17C 前	56	(口縁部) 目貝質
105	壺	-	-	-	肥前	17C 前	56	
106	壺	-	-	-	肥前	16C末~17C 初	S14	
107	壺	-	-	-	備前	15C~16C	59	(外) 波状の文様
108	壺	-	-	-	肥前	16C末~17C 初	56	
109	壺	-	-	-	肥前	17C 前	56	
110	壺	-	-	-	肥前	16C末~17C 初	56	
111	壺	-	-	-	肥前	15C~16C	56	
112	壺	-	-	-	肥前	16C末~17C 初	50	(底) 目貝痕
113	壺	-	-	-	肥前	17C 前	56	
114	壺	-	-	-	肥前	17C 前	56	
115	壺	-	17.9	-	備前	15C, 16C	61	
116	壺	-	-	-	肥前	17C 前	50	
117	壺	-	-	-	肥前	17C 前	56	(底) 十字の文様
118	壺	-	-	-	肥前	17C 前	58	
119	壺	-	-	-	肥前	17C 前	55	(外) 2本の繩文 (内) 叫き痕

瓦質土器

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年 代	出土地点	備 考
1	火鉢	-	-	-		16C末~17C 前	56	X字の印文
2	火鉢	-	-	-		16C末~17C 前	56	菊花状の印文
3	火鉢	-	-	-		16C末~17C 前	56	花状の印文
4	火鉢	-	-	-		16C末~17C 前	56	花状の印文
5	火鉢	-	-	-		16C末~17C 前	56	菊花状の印文
6	火鉢	-	-	-		16C末~17C 前	56	菊花状の印文

第5表 軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦観察表

番号	種別	直径(cm)	周縁幅(cm)	厚さ(cm)	測定(推定)	調査(推定)	面積(cm ²)	方向	被覆	接合	出土地点	備 考
1	軒丸瓦	15.1	1.4	0.7	5(16)	0.9	1.1	有			51	
2	軒丸瓦	18.7	1.3	0.8	4(16)	1.3	1.1	有			50	
3	軒丸瓦	14.2	1.6	0.6	7(14)	0.9	1.1	有			51	
4	軒丸瓦	16.1	1.5	0.9	3(14)	1.1	1.1	有			50	
5	軒丸瓦	15.3	1.9	0.8	2(10)	1.1	1.1	有			50	
6	軒丸瓦	15.8	1.8	0.7	4(12)	—	—	有			54	
7	軒丸瓦	—	—	—	—	—	—	有			50	
8	軒丸瓦	15.0	2.0	0.7	5(12)	1.2	1.1	有			56	
9	軒丸瓦	15.1	1.7	0.7	6(12)	1.0	1.1	有			54	
10	軒丸瓦	15.6	1.9	0.7	4(12)	0.9	1.1	有			56	
11	軒丸瓦	13.9	1.7	0.6	3(10)	1.1	1.1	有			56	
12	軒丸瓦	16.2	2.4	0.7	7(20)	—	—	有			51	
13	軒丸瓦	15.7	1.7	0.6	3(12)	1.1	1.1	有	コピキB		56	
14	軒丸瓦	17.5	1.7	0.8	2(24)	—	—	有	コピキB		50	
15	軒丸瓦	14.8	1.8	0.7	4(12)	—	—	有	コピキB		56	

丸瓦

番号	種別	色調	焼成	調 整	整	面	凸面	凹面	コピキ	出土地点	備 考
1	丸瓦	暗灰	—	—	—	—	A	A		50	
2	丸瓦	暗オリーブ灰色	良焼	ナデ	織痕	—	A	A		50	
3	丸瓦	緑黒色	—	ナデ	布目痕・織痕	—	A	A		56	釘穴
4	丸瓦	灰色	—	ナデ	織痕	—	A	A		56	
5	丸瓦	暗緑灰	—	ナデ	布目痕・織痕	—	A	A		56	
6	丸瓦	暗緑色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		56	
7	丸瓦	緑灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		54	穿孔あり
8	丸瓦	白色	—	ナデ	布目痕・絞痕	—	B	B		54	
9	丸瓦	暗青色・白灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		50	
10	丸瓦	淡黄色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		50	
11	丸瓦	暗オリーブ灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		50	
12	丸瓦	暗オリーブ灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		50	
13	丸瓦	暗緑色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		60	菊花状の印文
14	丸瓦	緑灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		56	
15	丸瓦	暗緑色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		56	
16	丸瓦	ナリーブ灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		56	1cm大の小跡
17	丸瓦	ナリーブ灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		56	
18	丸瓦	暗青色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		50	
19	丸瓦	暗緑色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		50	
20	丸瓦	オリーブ灰色	—	ナデ	布目痕	—	B	B		50	穿孔あり

軒平瓦

番号	種別	現存幅(cm)	高さ(cm)	中心筋	横筋	高さ(cm)	反転数	被覆	巻き	通縫	無	有	接合	出土地点	備 考	
1	軒平瓦	6.7	4.3	—	—	3.0	2.4	1	織	強	通縫	無	有	A	56	
2	軒平瓦	10.3	3.9	—	—	4.2	2.2	2	織	強	小透	無	有	A	56	珠文1種
3	軒平瓦	11.7	3.8	—	—	4.5	2.3	3	織	強	不透	無	有	A	50	珠文1種
4	軒平瓦	9.2	3.7	三筋	横	7.3	2.1	3	織	強	不透	無	有	B	56	
5	軒平瓦	11.4	3.7	三筋	横	5.9	2.1	3	織	強	不透	無	有	A	50	珠文1種
6	軒平瓦	14.3	4.3	三筋	横	8.8	2.4	3	織	強	不透	無	有	A	52	
7	軒平瓦	11.2	3.9	—	—	7.1	1.9	3	織	強	不透	無	有	A	50	珠文1種
8	軒平瓦	3.4	4.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	A	50	
9	軒平瓦	11.4	4.3	—	—	4.1	2.3	2	織	強	不透	無	有	A	54	
10	軒平瓦	7.0	3.9	—	—	4.1	2.2	2	太	強	通縫	無	有	A	50	
11	軒平瓦	13.5	3.0	三筋	横	6.5	1.7	2	織	強	不透	無	有	A	50	
12	軒平瓦	12.3	2.9	三筋	横	7.5	1.7	2	太	強	通縫	無	有	A	50	
13	軒平瓦	21.2	2.7	三筋	横	13.2	1.6	2	太	強	通縫	無	有	A	50	
14	軒平瓦	21.2	2.7	三筋	横	13.2	1.6	2	太	強	通縫	無</				

第6表 平瓦・隅軒平瓦・鬼瓦・城瓦

平瓦

番号	種別	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	色調	焼成	胎土	調整		出土地点	備考
								凸面	凹面		
1	平瓦	22.0	—	1.5	灰オリーブ色			ナデ	ナデ	50	
2	平瓦	—	19.0	2.0	オリーブ灰色			ナデ	ナデ	50	
3	平瓦	—	—	2.0	オリーブ灰色			ナデ	ナデ	56	
4	平瓦	—	19.0	1.8	暗灰色			ナデ	ナデ	50	
5	平瓦	—	19.0	1.8	灰オリーブ色			ナデ	ナデ	50	
6	平瓦	—	—	1.5	オリーブ浅黄色			ナデ	ナデ	50	
7	平瓦	—	—	2.3	暗緑灰色			ナデ	ナデ	50	

隅軒平瓦

番号	種別	残存幅(cm)	高さ(cm)	色調	調整	接合	出土地点	珠文		備考
								直徑(cm)	周縁幅(cm)	
1	隅軒平瓦	13.6	3.7	浅黄色	ナデ	A	50	—	—	
2	隅軒平瓦	18.4	3.8	浅黄色	ナデ	A	50	—	—	
3	隅軒平瓦	11.3	3.2	浅黄色	ナデ	A	50	—	—	
4	隅軒平瓦	7.8	4.6	暗緑灰色	ナデ	A	50	—	—	

鬼瓦

番号	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	胎土	色調	文様	焼成	穿孔	取っ手	出土地点	珠文		備考
											直徑(cm)	周縁幅(cm)	
1	鬼瓦	8.3	9.1	棘突	オリーブ灰色			—	—	56	—	—	
2	鬼瓦	9.4	11.0	棘突	灰色			—	—	54	—	—	
3	鬼瓦	10.9	9.3	棘突	灰色			—	—	56	—	—	
4	鬼瓦	10.9	12.2	棘突	灰色			—	—	50	—	—	
5	鬼瓦	12.3	16.7	棘突	灰色			—	—	54	—	—	
6	鬼瓦	9.5	15.5	棘突	灰色			—	—	50	—	—	
7	鬼瓦	15.6	8.1	棘突	灰色			—	—	56	—	—	
8	鬼瓦	18.3	15.4	棘突	オリーブ灰色			—	—	56	—	—	
9	鬼瓦	10.0	17.7	棘突	青灰色			—	—	58	—	—	
10	鬼瓦	11.9	14.5	棘突	オリーブ灰色・白色			○	—	56	—	—	
11	鬼瓦	9.5	4.6	棘突	灰色			—	—	58	—	—	
12	鬼瓦	9.5	4.8	棘突	オリーブ灰色			—	—	64	—	—	
13	鬼瓦	11.7	5.3	棘突	オリーブ灰色			—	—	58	—	—	
14	鬼瓦	6.9	5.9	棘突	オリーブ黄色			—	—	50	—	—	
15	鬼瓦	14.6	8.3	棘突	オリーブ灰色			○	—	50	—	—	
16	鬼瓦	19.7	6.5	棘突	オリーブ灰色			—	—	50	—	—	
17	鬼瓦	8.6	10.2	棘突	オリーブ灰色			○	—	50	—	—	
18	鬼瓦	12.1	11.6	棘突	オリーブ灰色			—	—	50	—	—	

城瓦

番号	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	胎土	色調	ウロコ	焼成	穿孔	出土地点	備考	珠文	
											直徑(cm)	周縁幅(cm)
1	城瓦	8.1	5.3	棘突	オリーブ灰色	U字型の工具	—	—	50	—	—	—
2	城瓦	8.5	8.0	棘突	オリーブ灰色	U字型の工具	○	—	50	—	—	—
3	城瓦	4.7	6.4	棘突	灰色	—	—	—	50	—	—	—
4	城瓦	9.6	6.8	棘突	オリーブ灰色	—	—	○	50	—	—	—
5	城瓦	9.8	12.8	棘突	オリーブ灰色	U字型の工具	—	—	56	—	—	—
6	城瓦	4.5	5.6	棘突	オリーブ灰色	—	—	—	50	—	—	—
7	城瓦	8.5	12.3	棘突	オリーブ灰色	U字型の工具	—	—	50	—	—	—
8	城瓦	15.9	13.7	棘突	青灰色	U字型の工具	○	—	56	—	—	—
9	城瓦	32.0	20.1	棘突	オリーブ灰色	U字型の工具	○	—	50	コゾクB面・裏面	—	—

第7表 十字架・花十字紋瓦・金屬製品

十字架

番号	種別	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	珠文		備考
								直徑(cm)	周縁幅(cm)	
1	十字架	2.70	2.07	0.50	13.446	鉛	50	—	—	
2	十字架	2.75	2.09	0.40	5.892	鉛	50	—	—	穿孔あり
3	十字架	2.78	1.98	0.40	4.684	鉛	56	—	—	上下簡状
4	十字架	—	2.35	0.37	4.436	鉛	56	—	—	穿孔あり
5	十字架	2.47	2.42	0.30	2.845	鉛	59	—	—	穿孔あり

花十字紋瓦

番号	種別	直徑(cm)	周縁幅(cm)	珠文		接合	出土地点	備考
				直徑(cm)	周縁幅(cm)			
1	花十字紋瓦	—	—	—	—	—	2(12)	61
2	花十字紋瓦	14.5	1.6	—	—	—	3(12)	61

金屬製品

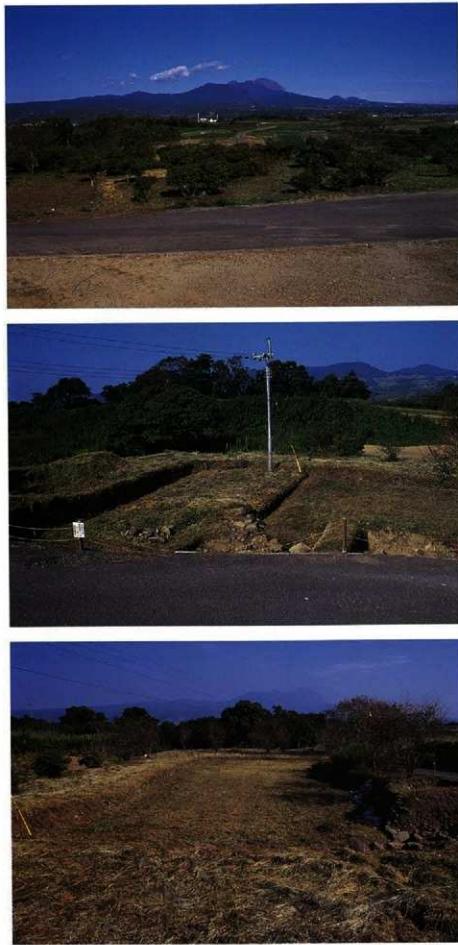
番号	種別	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	珠文		備考
								直徑(cm)	周縁幅(cm)	
1	鍔	2.35	2.35	0.35	3.218	銅	65	—	—	
2	鍔管	2.80	6.60	1.10	9.128	銅	50	—	—	
3	—	2.50	2.45	0.10	3.484	銅	56	—	—	
4	—	2.00	5.35	0.45	42.018	鉛	69	—	—	

図 版

(



図版2 状況写真



図版3 状況写真



図版4 状況写真



1. 本丸C区 TP52
北から

2. 本丸C区 TP52土層
西から

3. 本丸C区 TP53
裏込石検出 東から

図版5 状況写真



1. 本丸C区 TP54
石垣隅角部 南から

2. 本丸C区 TP54土層
南から

3. 本丸A区 TP56
虎口石壁 西から

図版6 状況写真



1. 本丸A区 TP56
虎口開口部破却
西から



2. 本丸A区 TP56
虎口石垣 東から



3. 本丸A区 TP56
土層 西から

図版7 状況写真



1. 本丸A区 TP56
虎口礎石 南から



2. 本丸A区 TP56
虎口 南から



3. 本丸A区 TP56
階段・土坑 北から

図版8 状況写真



1. 本丸A区 TP57
南から



2. 本丸D区 TP58
破壊状況 東から



3. 本丸D区 TP58
雁木段 東から

図版9 状況写真



1. 本丸D区 TP58
階段 上から



2. 本丸D区 TP58
石垣隅部 東から



3. 本丸D区 TP58
雁木段全景 東から

図版10 状況写真



1. 本丸D区 TP58
水路 上から



2. 本丸D区 TP59
南から



3. 本丸D区 TP59
西から

図版11 状況写真



1. 本丸D区 TP59
土層 西から



2. 本丸D区 TP59
土層 南から



3. 本丸D区 TP60
西から

図版12 状況写真



1. 本丸D区 TP61
石垣 西から



2. 本丸D区 TP62
破却層 西から



3. 本丸D区 TP63
隆段 北から

図版13 状況写真



1. 本丸D区 TP63
石段 東から



2. 本丸D区 TP63
層位 西から



3. 本丸D区 TP63
隆段 北から

図版14 状況写真



— 118 —

図版15 状況写真



— 119 —

図版16 状況写真



1. 本丸D区 TP62
瓦出土状況
北から



2. 本丸D区 TP58
瓦出土状況
南から



3. 本丸A区 TP56
人骨出土状況
北から

図版17 状況写真



1. 調査風景 東から



2. 調査風景 北から



3. 調査風景 南から

図版18 キリストン関係遺物／花十字紋瓦



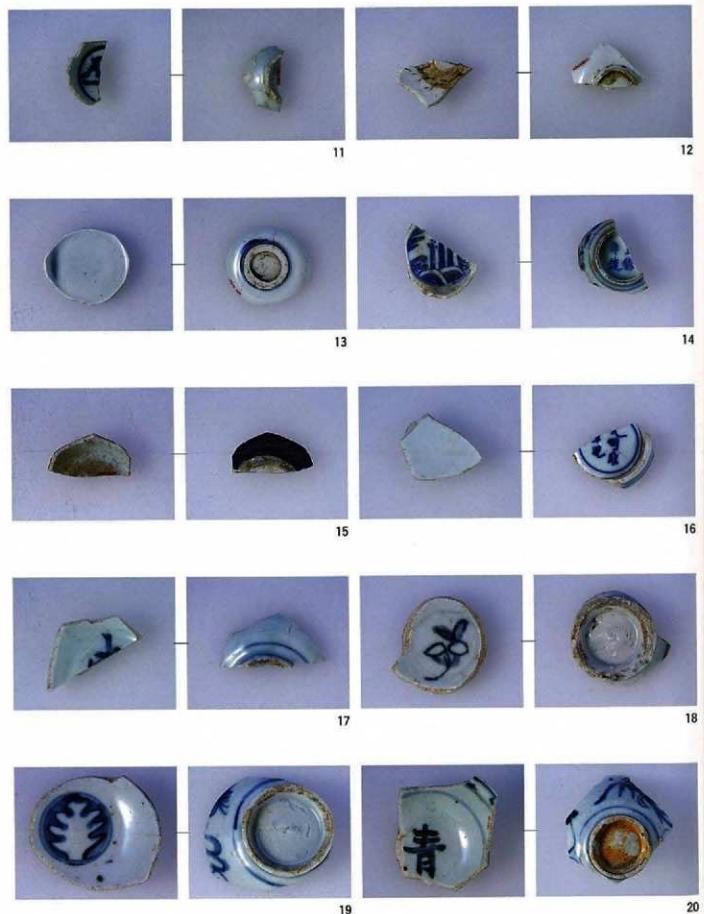
—122—

図版19 貿易磁器①



—123—

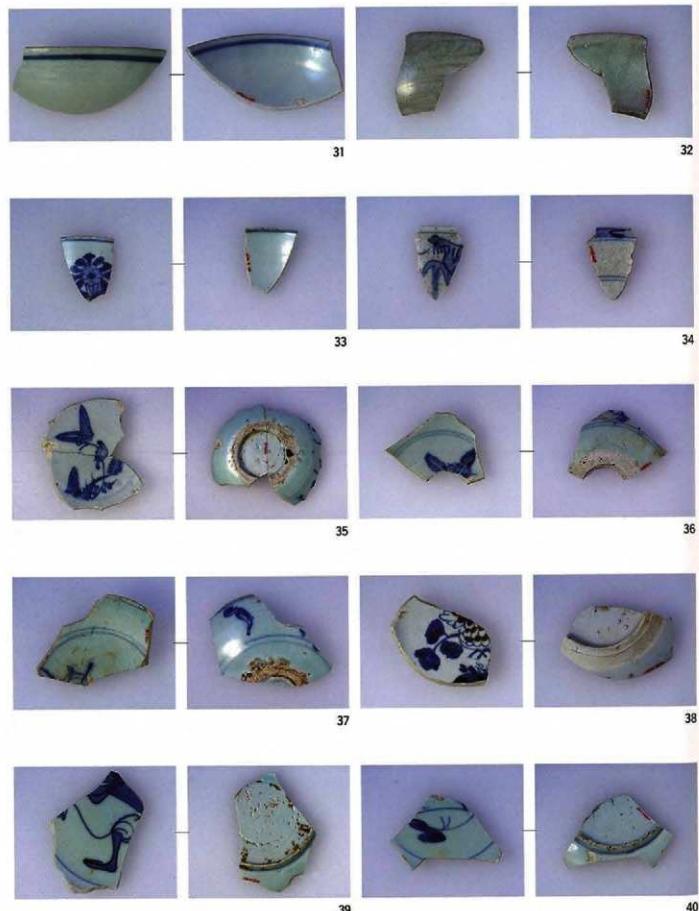
図版20 貿易磁器②



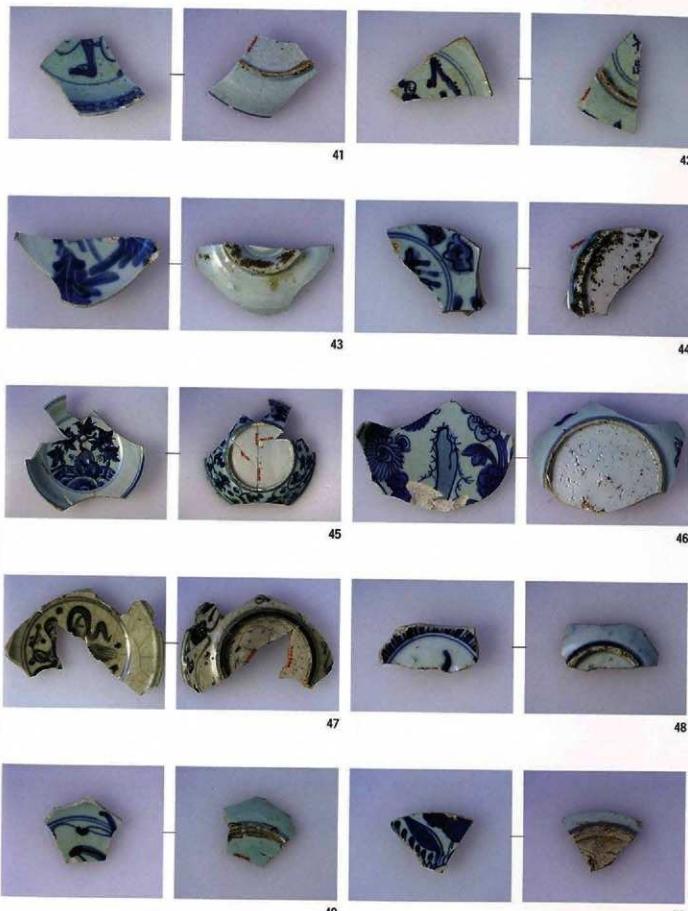
図版21 貿易磁器③



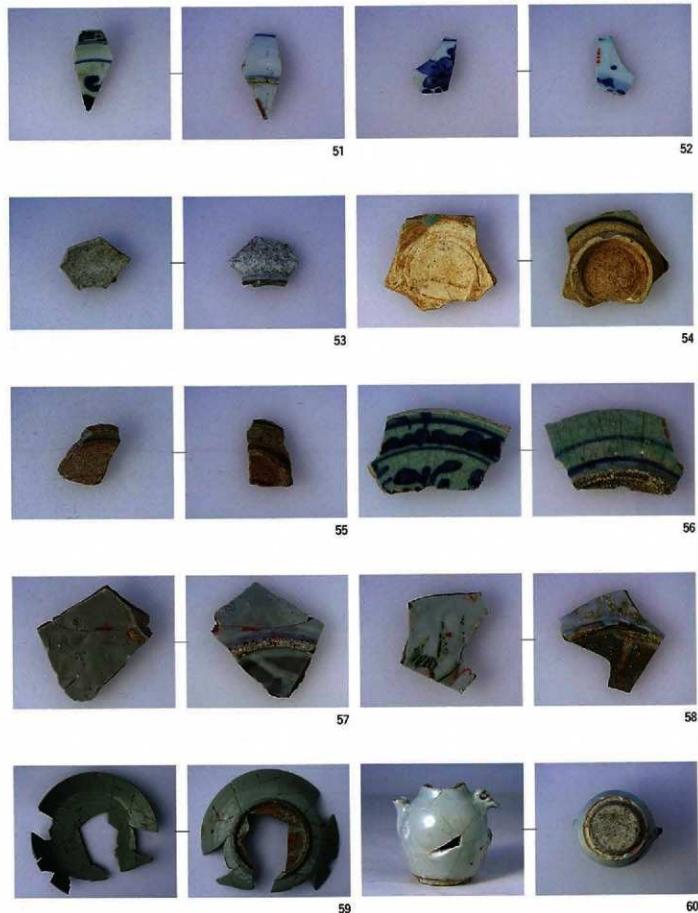
図版22 貿易磁器④



図版23 貿易磁器⑤



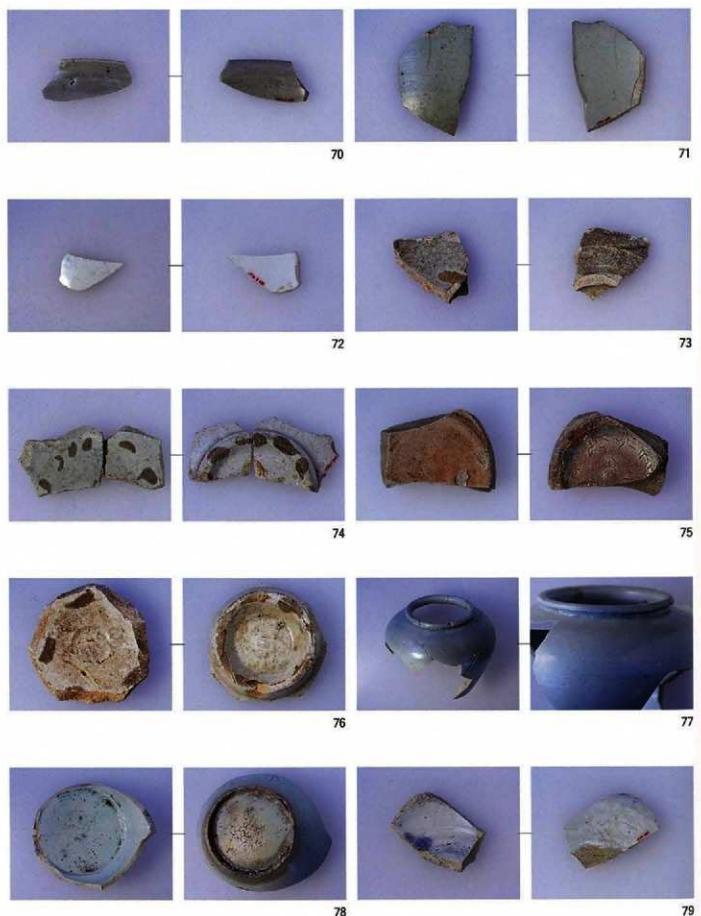
図版24 貿易磁器⑥



図版25 貿易磁器⑦



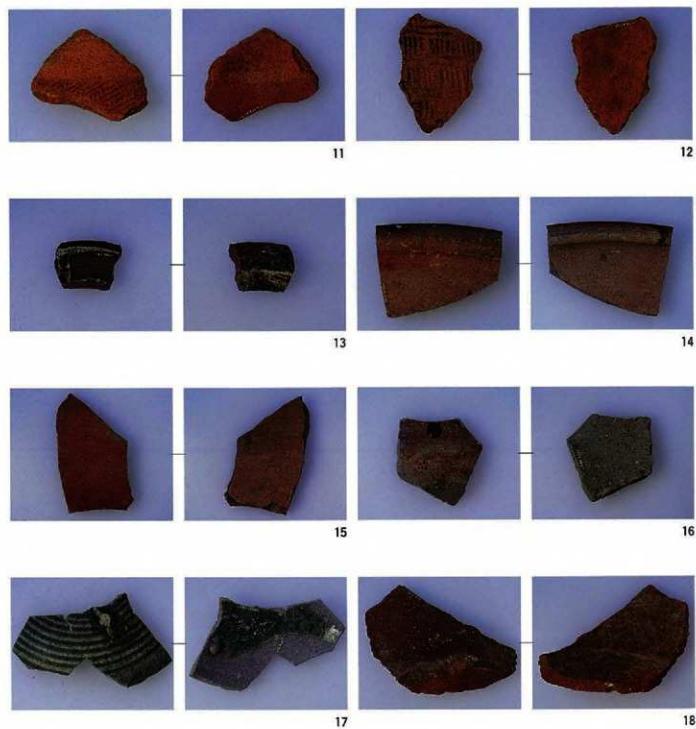
図版26 貿易磁器⑧



図版27 貿易陶器①



図版28 貿易陶器②



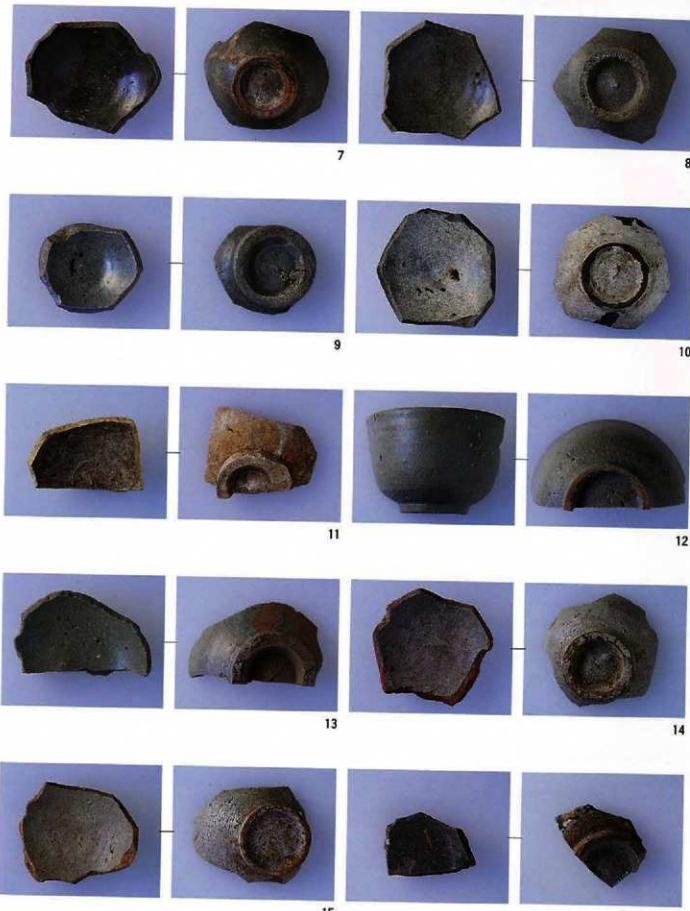
図版29 国産磁器①



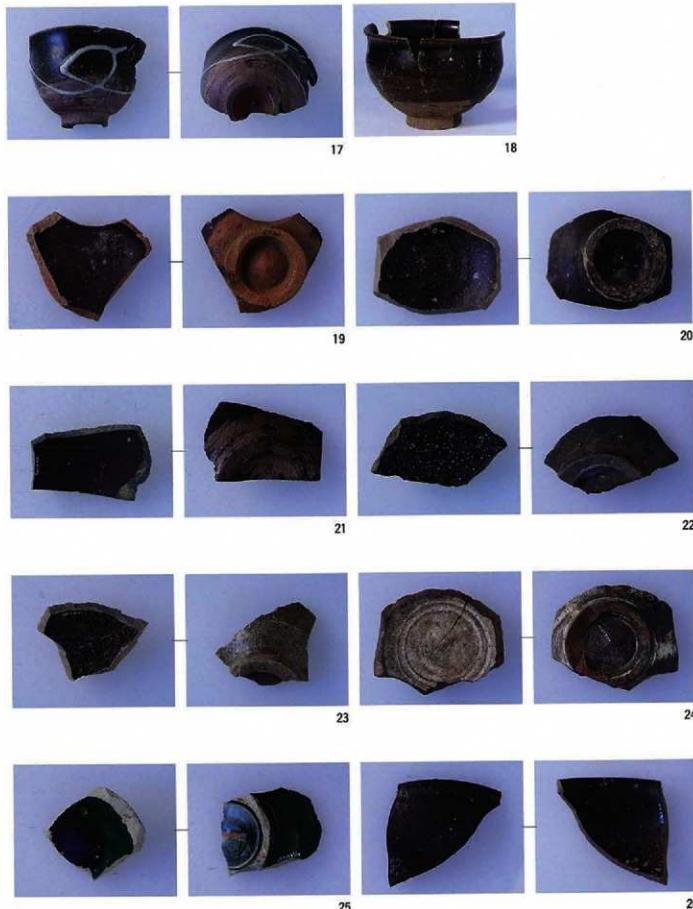
図版30 国産磁器②／国産陶器①



図版31 国産陶器②



図版32 国産陶器③



図版33 国産陶器④



図版34 国産陶器⑤



図版35 国産陶器⑥



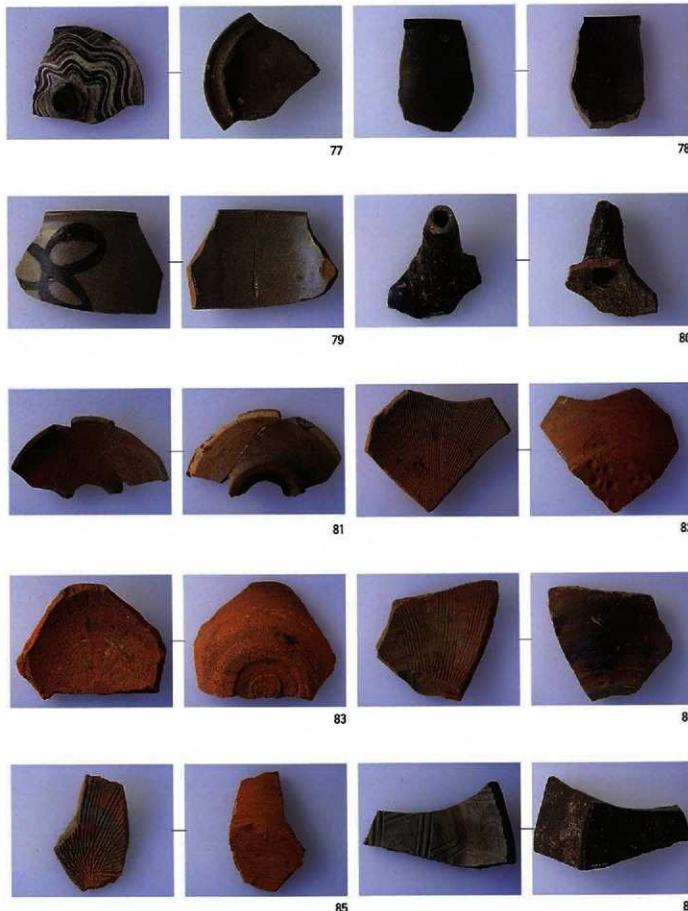
図版36 国産陶器⑦



図版37 国産陶器⑧



図版38 国産陶器⑨



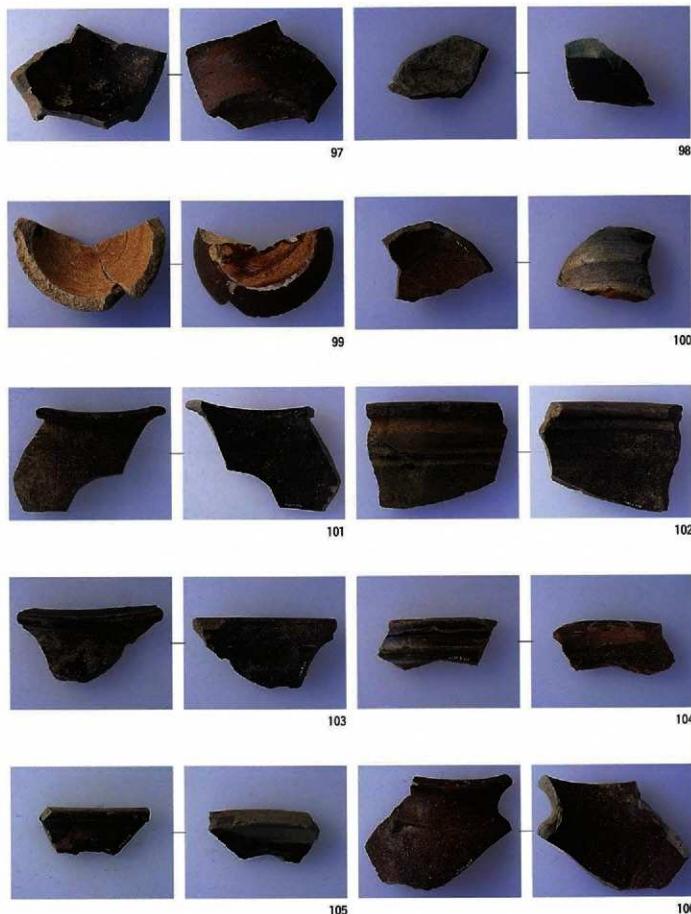
- 142 -

図版39 国産陶器⑩

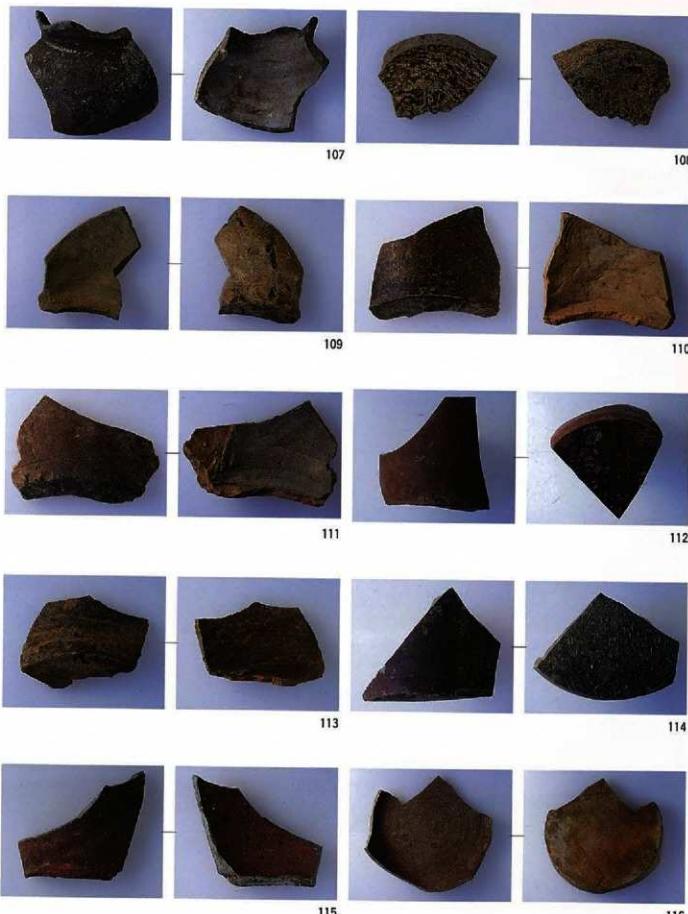


- 143 -

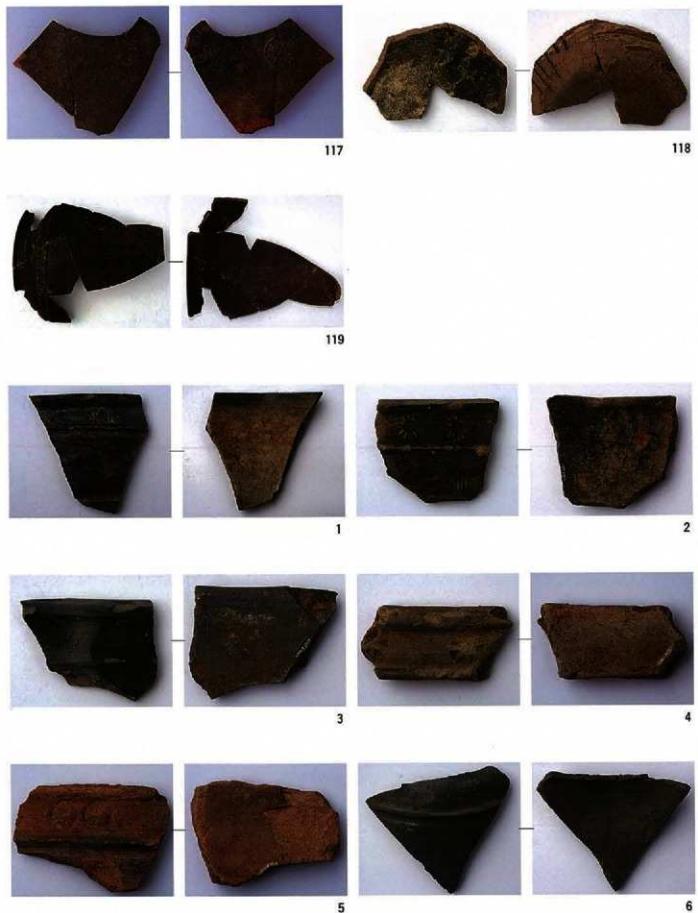
図版40 国産陶器①



図版41 国産陶器②



図版42 国産陶器⑬／瓦質土器



-146-

図版43 軒丸瓦①

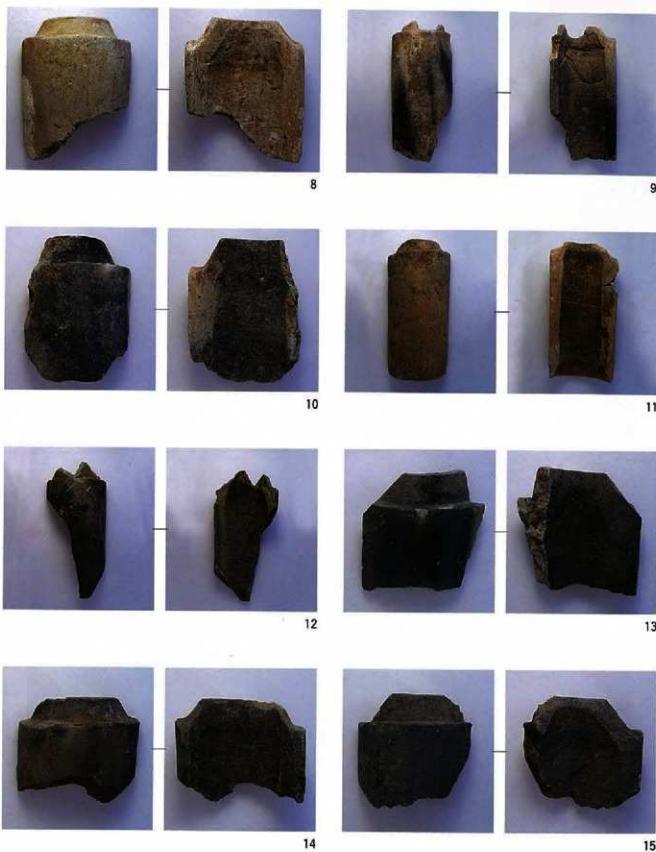


-147-

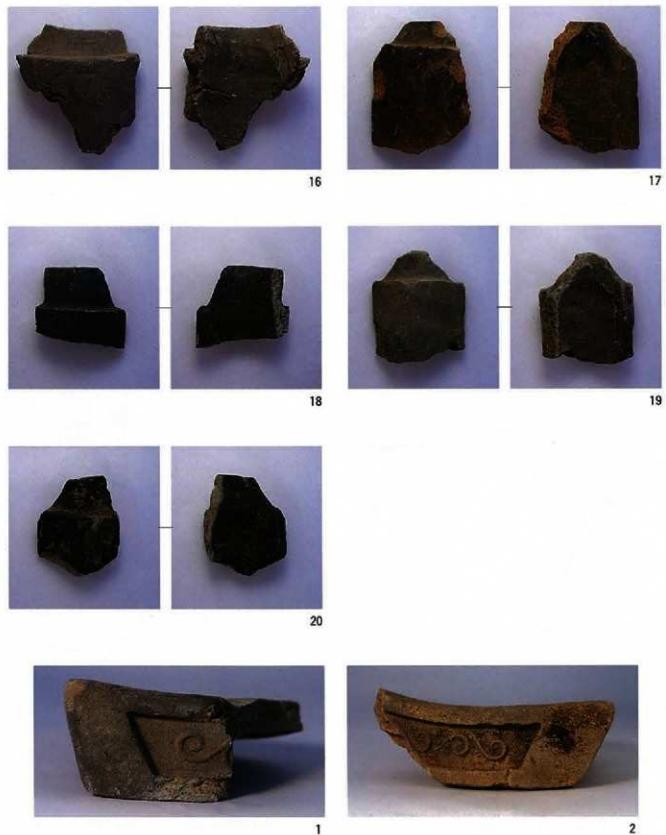
図版44 軒丸瓦②／丸瓦①



図版45 丸瓦②



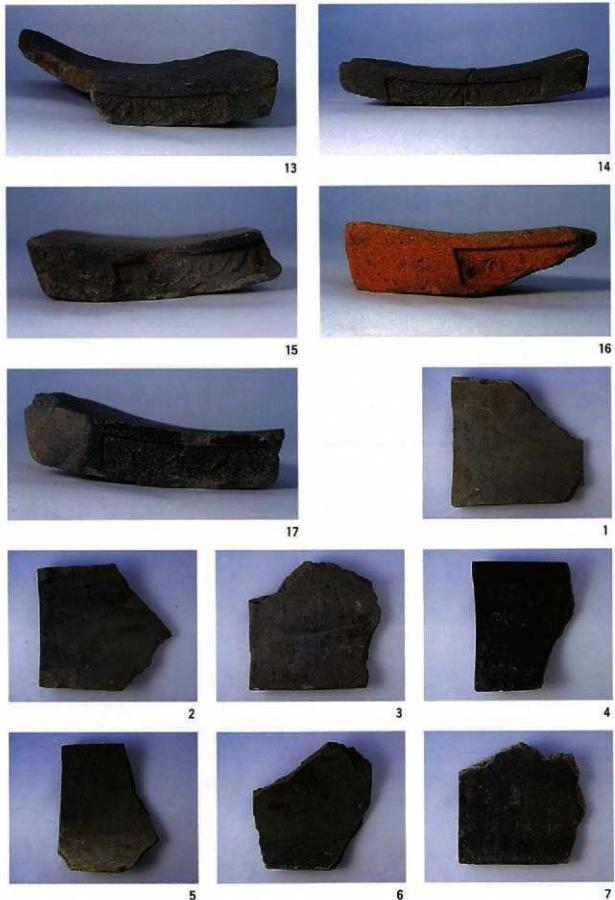
図版46 丸瓦③／軒平瓦①



図版47 軒平瓦②



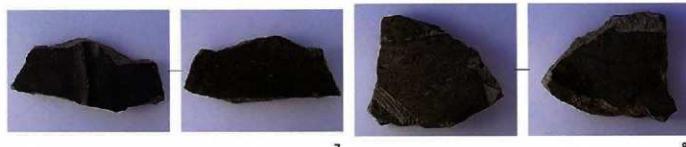
図版48 軒平瓦③／平瓦



図版49 棚軒平瓦／鬼瓦①



図版50 鬼
瓦②



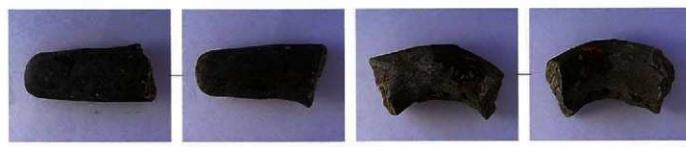
7

8



9

10



11

12



13

14



15

16

図版51 鬼瓦③／鋪瓦①



17

18



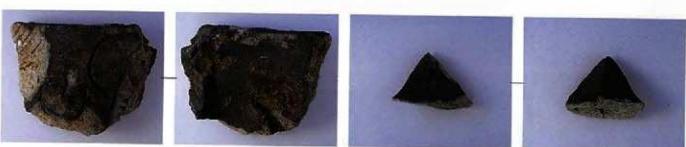
1

2



3

4



5

6



7

8

図版52 銅 瓦②



9



— 156 —

図版53 金属 製品



1



2



3



4

— 157 —

報告書抄録

ふりがな	はらじょうあと
書名	原城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	南有馬町文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	松本慎二
編集機関	南有馬町教育委員会
所在地	〒859-2412 長崎県南高来郡南有馬町乙1023番地 TEL 0957-85-3111
発行年月日	西暦 2006年 3月30日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原城跡	長崎県 南高来郡 南有馬町	42-371	6 32°37'30"	130°15'18"	19990908 ~	680m ²	学術調査
			~ 32°37'36"	130°15'27"	20000120 20000904 ~ 20010329	650m ²	学術調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原城跡	城跡	中・近世	・本丸虎口 ・破却石垣 ・雁木段 ・水路	・キリシタン関係 十字架, 花十字 紋瓦 ・陶磁器 貿易陶磁器 国産陶磁器 ・瓦 軒丸, 軒平, 丸瓦, 鬼瓦・蟻 瓦	

南有馬町文化財調査報告書 第4集

原城跡 III

平成18年3月

発行 南有馬町教育委員会
〒859-2412 長崎県南高来郡南有馬町乙1023番地
TEL 0957-85-3111

印刷 株式会社 昭和堂
〒854-0036 長崎県諫早市长野町1007-2
TEL 0957-22-6000

